

相見、凡千四五百坪程之所故、夫丈ヶ道式ニ相成、火事繁之所を申、前後屋敷之消防立除等都合、可相成、尤埋込ニ可相成、石垣取崩、埋立地境、築直し、溝筋仕附置、大雨等之節、下水吐手當も可仕、一體以前掘立之砌を、行届ながら水溜居、付、芥船等之入出も有之、非常之節、水之手之足し、可相成、積り之所、當時芥船等出入も一向ニ難相成、全不用地を相成、姿故、埋立地ニ可相成哉。此外も右様之所、平常も無用、大火之節も、多人數込合、火を避、者共之通路を妨、或は橋焼落、得、其場所模様、逃道を失、死傷致、害も有之、様成無益有害之堀筋等も、此度焼跡土瓦を以埋立、片付方も早速抄取、輕キ者共賃錢を得、困窮相凌、一時之御救筋、且向後非常人數込合、節、通路を妨不申、彼是以可然場所も可有之哉。先達多築地南飯田町海手埋立出來、分有之、右場所續等、此度之焼土瓦を以埋立、早速相片付、様可相成、勿論場所之様子、町奉行にも被仰渡、篤々利害相糺合、埋立、宜分も御座、い、打合相伺、様も可仕哉。御入用之内、賃錢御手當方等之義も、一時窮民御救筋をも兼、丑年新土手出來之節、准、様も可相成哉。何を彼是御入用も可相掛義、御座、得、共、前書之害をも相除、差當、を當節

持場内道方、焼土瓦石等取捨、往還之差障、も相成、體ニ御座、間、可然、い、取調申上、様可仕哉、此段御内慮相伺申、以上。

午二月

勝 志摩守朝。正 泉本主水正篤。正

蠣殻町稻荷堀埋立凡入用取調

蠣殻町松平越中守酒井雅樂頭屋敷裏稻荷堀、長百九拾五間、幅七間三尺之所、深八尺之見込、多、屋敷之方、片な、れニ埋立、雅樂頭屋敷間、有之、堀、口幅五間之所、右留石垣高六尺築立、尤有來石相用、遺殘之分も其儘埋立置、追、御遣方之積り、埋立土千九百五拾坪も、焼土相用埋立、積を以、入用凡見込取調、處、左之通り。

金拾五兩程

此分御入用を以石垣築立、焼土取片付方御入用之義も、去ル丑年新土手築立之御振合、准シ可申哉。

築地本願寺裏入堀埋立凡入用取調

築地本願寺裏入堀、長七拾七間三尺、幅拾八間之所、深平均壹丈貳尺之見込、多、埋立、入堀口、左右、切仕付置、有來石垣取壞、長拾八間高貳間三尺之石垣

築立、有來石遺殘之分も、其儘に埋置、追多御遣方之積り、埋立土貳千七百九拾坪、焼土相用埋立ひ積を以、入用凡見込取調ひ處、左之通。

金百五拾兩程

此分御入用を以石垣築立、焼土取片付方御入用之義も、去ル丑年土手築立之御振合に准し可申哉。

築地相引橋際方川筋埋立凡入用取調

築地相引橋際方本多下總守屋敷附川筋、長百拾五間、幅拾七間、深平均三間之見込あり、埋立場所前後切仕付、長合貳拾五間、高三間之石垣、有來石垣取壊築立、遺殘之分も其儘埋立置、追多御遣方之積り、埋立土五千八百六拾五坪、焼土相用埋立ひ積を以、入用凡見込取調ひ處、左之通。

金三百兩程

此分御入用を以石垣築立、焼土取片付方御入用之義も、去ル丑年新土手築立之御振合に准し可申哉。

右も凡目當迄に取調ひ儀に付、増減も可有之、御打合濟之上、場所見分いさし、仕様取極ひ上無之いさも、治定難致ひ。午二月

印竹内平之丞 町會所懸り

類焼窮民小屋場引拂之儀相伺書付

印主計頭 印伊賀守

印出雲守 印忠五郎

類焼窮民御救小屋に罷在ひもの共之内、身寄等に立退ひもの、此節迄三千三百人程も有之、殘三千七百人餘罷在ひ處、右之もの立退方心任に致し置ひるも、際限も無之い間、當月限りこそ小屋内立退ひ様可申渡と奉存ひ、依之此段相伺申ひ。以上。午三月

文化三寅年、三十日程なる小屋内引拂、去ル丑年、五十五日なる小屋内引拂、且此度日數之儀も、四十八日程に相成可申ひ。

町々類焼野宿之者差置ひ小屋場取建置ひ處、一昨晦日迄に不殘引拂ひに付、小屋取拂申ひ。依之御目障御斷返し案井夫々之御達し向等、取調入御覽申ひ。

午四月

印竹内平之丞 町會所懸

午四月二日

越前守殿伯耆守殿に御銘々大澤瀾三郎を以、出雲守上ル。

越前守殿

伯耆守殿

類焼野宿之者差置ひ小屋場取拂ひに付御目障御斷返之儀申上ひ書

幕府時代ノ救濟

付

小印 榑原主計頭 同 筒井伊賀守
同 土方出雲守 同 中川忠五郎

御届

一、兩國西廣小路 一、江戸橋廣小路 一、松屋町河岸
一、神田佐久間町壹丁目地先 一、數寄屋町地先

右箇所々々此度類焼町々野宿いさしもの差置い小屋場取建い付、御成之節、通御之御障こそ不相成い得共、御目障こそ罷成い旨先達多申上置い處、右小屋入之者追々引拂、此節小屋場取拂申い。尤右之段御側衆いも御斷返差出申い。依之申上い。以上。 午四月

(奉) 午四月二日加賀守殿に大澤彌三郎ヲ以、出雲守上ル。

(奉) 但、最初取建之儀加賀守殿に上り候儀に付、御同人に上り候様、彌三郎申聞ル。 印竹内平之丞 町會所掛

(奉) 加賀守殿

類焼野宿之者差置い小屋場取拂い儀申上い書付

榑原主計頭 筒井伊賀守
土方出雲守 中川忠五郎

御届

一、兩國西廣小路 一、江戸橋廣小路 一、松屋町河岸
一、神田佐久間町壹丁目地先 一、數寄屋町地先

右箇所々々此度類焼町々野宿いさしもの差置い小屋場取建い儀、先達多申上置い處、右小屋入之者共追々立退い間、小屋場取拂申い。依之此段申上置い。以上。 午四月

町會所懸り之者御手當之儀申上い書付

小印 主計頭 同 伊賀守
同 出雲守 同 忠五郎

小印 竹内平之丞

銀十枚宛
別段金五兩宛

同 七枚宛
同 金五兩宛

御勘定 佐藤傳之丞、愛知升七郎、立田岩太郎
北方御組與方 谷村猪十郎、服部仁左衛門
南方同 由比八十太夫、生田祐九郎

新都時代ノ救済

右に當二月中度く之大火なる町に類焼人路頭に迷ひ者共入置し小屋懸け
并握飯渡方等之儀、右當日か夫に手續行届去ル丑年かも格別急速に相整し
儀も一同出精仕し儀に有之、其上小屋に見廻り等骨折相勤し儀に御座し。

金千疋宛
別段金五百疋宛

町方兩御組同心
六人

右同斷差配を請握飯配方にも差添罷出、小屋に見廻り等一同出精相勤申し。

去ル丑年大火後、御用濟井臨時御救渡方相濟し節之振合を以、御手當之儀取調申
上候。

右之通御手當被下し様仕度、相伺申し、御聞濟之上も、御下ケ金利金之内を以
相渡し様可仕奉存し、以上。 午四月

午四月八日廻し濟、翌九日周防守殿に啓阿彌を以、出雲守上ル。

印竹内平之丞 町會所掛り

周防守殿

類焼町に積金差免し儀申上し書付

御届

印榑原主計頭 印筒井伊賀守
印土方出雲守 印中川忠五郎

町に積金之儀類焼有し得も、其月か六ヶ月差免し定に有し處、當二月七

日、同九日、同十日類焼町に之儀も、格別大火之儀に有之、去ル丑年大火後、間も
無之類焼致し、其上去巳年か米價高直なる、一同難儀之趣相聞し間、右丑年大
火之節、十二ヶ月之間積金差免し振合を以、當午二月か來未正月まで、月數十
二ヶ月積金差免し様可仕奉存し、依之此段申置し、以上。 午四月

竹内平之丞

町會所溜り金之内、貳拾六万兩御金藏に假納致置し内、當春大火に多類焼い
し場所貸附入用として、金貳万兩來月六日相下ケし間、御金奉行に御達
有し様致度し、尤御金を何金に多御下ケ相成し哉、承知致度し。 午六月

御書面之趣致承知し、御金之儀も、貳朱金壹朱銀之内に多御渡し可申し。

六月

御勝手方

午十二月三日平之丞か大島九郎太郎に遣ス、即挨拶下ケ札いとし來ル。

竹内平之丞殿

大島九郎太郎
大瀬雄之丞
石原孫助

御勝手方
御同役中

竹内平之丞

町會所溜り金之内、貳拾六万兩御金藏に假納致し致置い内、當七月方追々四万兩相下ケい處、猶又壹万兩來ル六日相下ケい様致し度い間、御金奉行の御達有之い様致し度、尤御金の何金に多御下ケに相成い哉、承知致し度い。
午十二月

御書面之趣致承知い、御金之儀ハ皆貳朱金に多相下ケい様可致い。
御勝手方

午十二月

頭

金五万兩御下ケ有之い日限

一金貳万兩 午七月六日御下ケ。 一、同壹万兩 同九月六日同斷。

一、同壹万兩 同十月六日同斷。 一、同壹万兩 同十二月六日同斷。

以上

天保五年御救一件大火之部。

當午年天保五年大火に付御救相渡高

御救小屋五ヶ所取建、類燒窮民共入置有之、握飯相渡い分
一、白米六百六拾五石四斗五升七合。 代金千八百五拾六兩餘。

但、當月廿六日米問屋共方書出し、辰年米相場上申下平均直段、金壹兩に付三斗九升八合三勺三才、白米にいたし壹割引之積を以、三斗五升八合五勺替。

右之通御座い以上。

午五月

町會所一件書留

天保五年二月七日大火に付御救小屋場所附

御公儀様ヨリ此度數万の人々に御救小屋御立被下、きかつこも及ばず、雨露こもうけ、そのうへめい、御鳥目を下されし事實、たうとく有るべき御仁政のほど、申もおそれ多き事ながら、萬民よろこび、萬歳をぞうたひける。
一、毎日御たき出し御用にて、深川迄茶屋、ヨリ持はこびいるし。

- 土橋久保丁原 一ヶ所 筋違御門外 一ヶ所
- 常盤橋御門外 一ヶ所 數寄屋橋御門外 一ヶ所
- 幸橋御門外 一ヶ所 神田橋御門外 一ヶ所
- 兩國廣小路 二ヶ所 江戸橋 一ヶ所
- 八町堀 三ヶ所 築地 一ヶ所
- 御小屋數都合十三ヶ所

右出火に付、御救小屋に罷在い者、又い所々難澁之者どもへ面々合力ほどこし。
下。以。

天保五甲午年二月七日大火に付、御公儀様方御救小屋所々に御建被成下、難有仕合に奉存い。猶又此度諸町々より兩國佐久間町御救小屋はほどこしの

需都時代ノ救濟

三七九

姓名

- 一、壹人前たむこ錢百文ツ
 - 一、壹人前竹の宛一ツ宛
 - 一、壹人前紙五紙五紙五狀
 - 一、壹人前ちおはちちおはちち一一ツ
 - 一、壹人前ちやまちやまち一一ツ
 - 一、壹人前てぬくてぬくひ一ツ
 - 一、壹人前ちびんちびん五五ツ
 - 一、壹人前ちびんちびん五五ツ
 - 一、壹人前七拾貳七拾貳文文ツ
 - 一、壹人前三百三百文文ツ
 - 一、壹人前ひもの廿枚ひもの廿枚ツ
- 右之通、難澁之人々に施し事、仁心之惠也。
- 二月七日佐久間町より出火。
- 燒死人老若男女凡四千餘、此外水死又行衛不知無數、町數凡千二百町餘。
- 淺草駒形内田
 - 淺草傳法院
 - 通油町さかなや十助
 - おうじ町伊勢八
 - 御藏前かさくら
 - 同所ふださし二番組
 - 筋違うちだ
 - 佐久間町ふしみや
 - あまへしをす
 - 東兩國内岡崎屋
 - 兩國國

火水風災雜輯

土藏之數凡八百二十ヶ所、橋之數凡八十二ヶ所程。

御救小屋

- 常盤橋御門外 一ヶ所 神田橋御門外 二ヶ所
- 數寄屋橋御門外 一ヶ所 幸橋御門外 一ヶ所
- 筋違御門外 一ヶ所 江戸橋 一ヶ所
- 築地 一ヶ所 八丁堀 二ヶ所
- 兩國廣小路 一ヶ所 北叟遺言

二月七日天保五年。北風烈しく、晝八時、神田佐久間町二丁目琴師の家より出火し、中略。○同月九日烈風にてありしが、暮時檜物町より出火。中略。○同月十日晝九時頃、大名小路の邊より出火。中略。御救の小屋十箇所へ十三棟を建られ、貧民を救はせらる。

町奉行引繼書中、同月天保五年二月九日、野宿之者の握飯被下、同十三日、御救小屋に入、三月晦日小屋へ引拂し事、ト見ユル者有リ。

火災救濟

六年乙未天保五年三月廿四日癸未癸未、三和歌山伊國城主徳川齊順大納言赤坂邸赤坂区内燒ク。幕府金二萬兩ヲ賜與ス。本丸廻狀、留。天保雜記。

町會所亦六月元○天保六年紀
二四九五年ヲ以テ火災ニ罹リタル窮民ニ賑給スル所有リ。○町會所一件書留。

火災救濟事蹟

火災救濟 天保五年十二月ヨリ六年ニ亘リ、屢火災有リ、内六年三月廿四日ノ赤坂紀伊邸火災ニ對シテハ、

二十七日○天保六年三月。

上使大久保加賀守

紀伊大納言殿○德川
齊順。

本丸廻狀留

右御住居焼失ニ付、被遣之。

天保六未四月十一日

御使 水野石見守

内府様御使 溝口伊勢守

御臺子一飾 鯛一折
色羽二重廿疋 鯛一折

大納言様方 御臺様方 御簾中様方 女中

右ハ御住居向焼失ニ付、爲御尋被遣之、爲御禮御登城、於御白書院西御縁、頗謁老中。

但、内府様方も被遣物之御禮、去月廿七日以上使御尋被遣物之御禮をも被

申上之

紀伊殿御簾中

行器二荷 添重一組

内府様方 塗重一組 生絹三端

大納言様方 八丈島三端

御臺様方 色羽二重 廿疋

御簾中様方 縮 緬 十端

右就同斷、女中使を以被遣之。

赤坂屋形焼失ニ付、以上使御懇之上意、其上被致拜領物、内府様方も以上使御懇之御禮、被致拜領物ハ御禮、御臺様へ被申上之。右於躑躅之間、謁御留守居石川左近將監。

紀伊殿供之家老

三井孫十郎

天保雜記

町會所ノ類焼窮民救濟ハ、

類焼町々困窮者ニ御救渡方之儀申上ハ書付

霸都時代ノ救濟

印主計頭 印伊賀守
印出雲守 印忠五郎

印竹内平之丞。河口市郎右衛門印。佐藤傳之丞印。愛知升七郎印。立田岩太郎印。谷村猪十郎印。服部仁左衛門印。由比八十太夫印。生田祐九郎印。

類焼町々御救願出以人別高取調以處左之通御座以。

十二月十八日○天保五年淺草西仲町方出火之分

凡人數貳千九百四拾壹人

同廿三日深川熊井町方同斷

同八百貳拾四人

十二月廿九日澁谷道玄坂町方出火之分

凡人數四百九拾壹人

去月○天保六年五月六日南本所扇橋代地町方同斷

同百三拾七人

同十一日神田蠟燭町方同斷

同三千八百四拾四人

同廿日兼房町方同斷

同三百四拾九人

凡合人數八千五百八拾六人

此白米貳百五拾九石壹斗四升。錢千七百拾七貫貳百文。

此金貳百六拾兩程 但金壹兩ニ付錢六貫六百文替

右類焼町々困窮者多く及難儀以趣を以名主共方御救之儀願出以ニ付取調

以處是迄類焼之節、獨身者以白米五升錢貳百文宛、貳人暮以上、男女之無差別、白米三升錢貳百文宛、三歳迄之小兒を相除、遣し來以儀ニ御座以間、右積を以、前文之通相渡し可申と奉存以、尤是迄小火之分を、其時々不申上相渡し來以得共、此度之儀ハ、六ヶ所ニ多、人數多ニも御座以間、此段申上以。以上。

未○天保六年六月

町會所一件書留

二十七日○天保六年雨ふる。類焼場御救出るニ付、町會所へ出る。雉子町林藏店御救願。

二十九日○天保六年曇る。町會所へ出る。三丁目裏町御救願にて出る也。

二十六日○天保六年天氣よし、風朝上田氏方大代地伊せや七右衛門方へ行、町會所へ御救願も出る。

齋藤月岑日記

此外十月及十二月ニハ、町會所ヨリ火災救恤有リタルコト、町會所一件書留ニ見ユ。

未○天保六年十月十五日廻し濟。庄九郎方渡。

印主計頭 同伊賀守

印大竹庄九郎 町會所掛

同出雲守 同忠五郎

先月○天保六年九月十一日夜赤坂新町五丁目出火之節、類焼致し、者共之内御救之儀、右町名主善三郎が相願ひ間、人別之儀申渡、取調差出ひ間、定例之通、獨身は白米五升錢貳百文宛、貳人暮以上、男女之無差別、壹人は白米三升錢貳百文宛、三歳迄之小兒相除遣し、仕來二付、右之積を以別帳之もの共、米錢七石貳斗三升、四十七貫四百文相渡ひ様可仕、依之右人別米錢割合相添、入御覽申ひ。

未○天保六年十月○調渡追稟書類略

未○天保六年十二月二十六日廻濟。

印主計頭 同伊賀守

同出雲守 同忠五郎

印大竹庄九郎 町會所掛

當月○天保六年十二月八日暮六時過、武州豊島郡金杉村出火之節、下谷金杉上町類焼致しもの共之内御救之儀、右町名主次郎左衛門が相願ひ間、人別取調之儀申渡ひ處、取調差出ひ二付、定例之通、獨身は白米五升錢貳百文つゝ、貳人暮以上、男女之無差別、壹人は白米三升錢貳百文つゝ、三歳迄之小兒相除遣し、仕來二付、右之積を以別帳之もの共、米拾六石五斗錢百七貫貳百文相渡ひ様

可仕、依之右人別米錢割合帳相添、入御覽申ひ。未○天保六年十二月

〔參考〕町會所一件書留ニ、

未○天保六年閏七月廿九日御廻し濟、佐藤清五郎御勘定所が持參二付、右之趣町々申通り様、當番肝煎惣藏の申渡ス。

御救願ニ罷出ひ節、名主差添ひ儀ニ付申上ひ書付

印主計頭 印伊賀守

印出雲守 印忠五郎

印大竹庄九郎、佐藤傳之丞印、岩淺三

五太夫同、立田岩太郎同、佐藤清五郎

同、服部仁太夫同、加藤又左衛門同、由

比八十太夫同、本多彌太夫同。

寛政以來、御救願町會所に罷出ひ節、願書に名主加判いゝし、家守計罷出ひ處、去午○天保五年春中、御救願人多き趣、日々貳百人程宛米錢被下、殊に米價高直ニ付、別段御救被下、多人數、殘之分相混、調方行届兼ひ間、定式之御救願ニ罷出ひ節も、當分之内、名主共家守共差添罷出ひ様、去午六月御廻し濟之上、申渡置ひ處、此節ニ至り、追々人數減、日々十人、貳拾人餘ならては無之ひ間、混雜も不仕、調方行届ひ儀も御座ひ間、去午六月以前之通、名主調印いゝし、名主共儀の差添不罷出家守計願書差出ひ

様可申渡と奉存也。尤以來非常等も有之多人數混雜致し以節を前書之通
取計の様可仕也。此段相伺申也。以上 未聞七月

附記
米穀搬出
申禁

〔附記〕 米穀搬出申禁

是年亦四年五年ノ禁令ヲ申明ス。

天保六未年四月二日申渡

下り米問屋、米仲買、地廻米三組問屋、地廻米問屋、脇店米屋
行 事 共

去々巳年五月下り米問屋共爲積登米の多し儀ニ付、答申付、同七月外米
問屋脇店組仲買にも、米相場高直ニ付、他國の積送り米差止、此以後米價下
直にも相成り、其節可相伺、萬一心得違之者有之、急度可及沙汰旨申渡置
也。今以夫程こそ米直段引下らば、先月中を下り米も不絶入込、其外仙臺
米、南部米も入津有之也。却る米相場氣配強も、若當坐之利欲ニ迷ひ、猥
買進之、内々近國の爲積送米の多し族有之におゐては、兼る申渡ニ背、重
く不埒ニ付、嚴敷答可申付也。此旨一統相心得、彌以巳年申渡之趣、急度相守
正路ニ渡世可致。

廻船問屋
行 事

前文之通、此度猶又米問屋仲買共の申渡也。其方共にも去々巳年、追及沙
汰迄迄、内々被頼、爲積登米致す間敷趣申渡置也。通、彌仲間一同堅可相守
也。若紛敷儀等有之、急度答可申付條、心得違無之様、仲買一同の不洩様可
申通。

——米穀一件

俸米前借

成。年番
取扱。

閏七月元○天保六年(紀
元二四九五年)

幕府旗下ノ士冬季給米ノ前借ヲ許可ス。○天保集

俸米前借事
蹟

俸米前借 左ノ如シ。

天保六未年閏七月

大目付

勤仕井不勤之面々共、當冬御切米渡之内五分一、此節御米こそ御借米被下置
也。間、被得其意請取方之儀も、御勘定奉行可被談也。

閏七月

——天保集成

未○天保六年閏七月廿五日御城村上和州方差越ス、即日寫し伊賀守井館市右衛門
方石出帶刀に達ス。

新都時代ノ救濟

分、當未冬御切米渡之内五分一、不時爲御借米請取申處實正也、仍如件。

天保六未年何月

町奉行

榊原主計頭

兩宛所

年番取扱

江戸廻米

〔附記〕 江戸廻米

天保六年乙未九月十二日、從來江戸大坂ニ苞米ヲ漕運スル者、本年ノ納進ハ、文化年間制定スル三年間平均額ニ準據セズ、適宜ニ増加シテ漕運シ、而シテ其漕運ノ額ヲ立定セバ、江戸ハ勘定所ニ大坂ハ大坂町奉行所ニ開申ス可キヲ令知ス。御達留拔抄卷五。 徳川理財會要

天保六未年十一月廿二日大久保加賀守殿御渡。

町奉行衆

大目付

萬石以上之面、江戸大坂廻米之儀、文化度御勘定所ニ書出置ハ三ヶ年廻米平均目當高を以、右以來廻米致し來ハ處、當未年收納米之分、以後も、右目當高ニ不拘、文化度以前之通、勝手次第石數多く廻米可被致シ、委細之儀

人參施給

を御勘定奉行に可被承合。

右之趣可被相觸。十一月

天保撰要類集○天保集成、牧民金鑑同。

人參施給

天保七年三月十日筒井伊賀守殿於御役所ニ組々名主共に申渡。

申渡

組名主共

野州産人參之内、石坂宗哲の官製被仰付ハ、髯人參、町方困窮之病人に被下、石坂宗哲宅ニおゐて相渡ハ、間、此段町中不洩様可申通。右願方手重ニ無之、病人共急速之薬用ニ相成ハ、様、名主共取計、病人懸ルハ、醫師申口承り、其支配名主奥印いし、宗哲宅に可願出。但、名主無之場所も、月行事共奥印可致。

右之通相心得、願出振合等、館市右衛門に申談、早々觸達致し、御仁惠難有相辨、壹人別に篤々可申含、月行事持之場所も、最寄名主共可申通。右申渡趣證文申付ル。申三月。天保撰要類集

町會所仕法
改正授賞

七年丙申

○天保〇紀元二四九六年

二月八日辛酉

○辛酉、三正綜覽。

幕府町奉行榊原忠之

霸都時代ノ救濟

計主頭。筒井政憲賀守伊。勘定奉行土方勝政雲守出。勘定吟味役中川長政

五〇忠。以下ヲ賞ス。町會所仕法改正ノ勞ヲ褒スル也。町會所一件書留。

町會所仕法改正授賞。町會所貸付金制限ノ議有リタルコト、上文既ニ之ヲ記ス。謂フ所ノ天保六年度ニ於ケル町會所仕法改正ハ、或ハ之ガ實行ト共ニ、緊肅等ノ事有リタル者ニ非サル歟。

町會所仕法改正授賞事蹟

申。天保七年二月八日被仰渡依。

町奉行

榑原主計頭之。忠

筒井伊賀守憲。政

御勘定奉行

土方出雲守政。勝

御勘定吟味役

中川忠五郎政。長

同

同

同五ツ

町會所仕法改正之儀、骨折相勤依ニ付、拜領被仰付之。

右於芙蓉之間、老中列座、加賀守保忠眞。申渡之。勘定組頭一人、勘定一人、勘定吟味方改役並一人略。

申。三月十日加賀守殿大澤彌三郎を以主計頭上ル。

印大竹庄九郎

町會所跡掛之者御褒美代御手當之儀申上置依書付

印榑原主計頭 同筒井伊賀守

同土方出雲守 同中川忠五郎

御勘定

銀拾枚宛

正田榮次郎外一人、榑原主計頭組與力一人、筒井伊賀守組與力一人略。

右去去未年九月掛申渡依。尤八郎左衛門中村。筒井伊賀守組與力。儀ハ、同年十二月

廿五日掛替申渡依。筒井組與力一人、兩組同心四人略。

右も町會所改革之儀、最初取取扱依御勘定吟味役改役並兩組與力同心依此度御褒美被下置依處、書面跡掛之者共儀も、去未年九月先先掛之者同様、改革之儀取扱、格別手數も相掛依處、一同差をまり、早出居殘も仕、出情骨折相勤依ニ付、追て改正居合依様、以後勵之ためも御座依ニ付、先掛之者ニ准し、書面之通、御褒美代御手當御下ゲ金利金溜之内を以、被下依積申渡依。依之申上置依。

但此度改革之儀、最初相相勤依御勘定金壹枚吟味方改役並金拾兩、兩組與力金五兩宛、同同心金壹兩宛、御褒美被下置依。御用達、年番名、主、座人以下略。
以上。申三月
町會所一件書留

町會所一件書留天保十一年七月廿八日廻濟文書小揚人足請負賃錢受取下附願中、去ル未年○天保六年町會所仕法改革之砌、同年九月廿七日右請負取放相成云々ト見ユレハ、改革ハ天保六年中ノ事ニ係ルヲ知ル可シ。

火災救濟

三月十六日己亥○天保七年紀元二四九元數寄屋町二丁目○京橋區火有リ、廿餘箇町ヲ燒ク。○變災篇參照町會所積金ヲ免シ、罹災窮民ヲ救

助ス。○町會所一件書留。

火災救濟事蹟

火災救濟 天保七年三月十六日ノ火災ハ變災篇記ス所ノ如シ。

申○天保七年四月十三日廻し濟。

加賀町外貳拾ヶ町類燒ニ付積金御免并貸附元利納猶豫之儀相伺以書付

印主計頭 同伊賀守

同出雲守 同忠五郎

印大竹庄九郎。正田榮次郎同。岩淺三

五太夫同。佐藤十兵衛同。佐藤清五郎

同。加藤又左衛門同。松浦彌左衛門。本

多彌太夫印。村井專右衛門。

當三月十六日夜、元數寄屋町貳丁目分出火之節、加賀町外貳拾ヶ町燒失之分、

小間割ヲ以、別紙之通積金六ヶ月御免并竹川町御繪師狩野晴川家守吉兵衛外拾六人貸附元利納三ヶ月猶豫之儀、願出以ニ付、取調以處、小間割等相違無之以間、加賀町外貳拾ヶ町合金四拾兩ト五匁壹分七厘五毛、先例之通、當三月より同八月迄積金差免、貸附元利、當三月分五月迄猶豫之儀、承届以様可仕奉存以、依之別紙帳面拾八冊○略相添、相伺申以。申四月

申○天保七年五月二日廻し濟。

印主計頭 同伊賀守

同出雲守 同忠五郎

印正田榮次郎。岩淺三五太夫同。佐藤

十兵衛同。佐藤清五郎同。加藤又左衛

門同。松浦彌左衛門同。本多源左衛門

同。村井專右衛門同。

當三月十六日夜、元數寄屋町貳丁目分出火之節、芝口北紺屋町外九ヶ町類燒致し以者共之内、御救之儀、右町名主德兵衛外八人相願以間、人別取調之儀申渡以處、取調差出以ニ付、定例之通、獨身白米五升錢貳百文、貳人暮以上男女之無差別、壹人白米三升錢貳百文、三歲迄之小兒相除、差遣以仕來ニ付、右之積を以、別帳之者、右町々人數合三千六百三拾七人、米百九石五斗九升、錢七百貳拾七貫四百文相渡以様可仕以、依之右人別米錢割合帳相添、入御

間ノ施米ヲ爲シ、八年丁酉天保〇紀元四九七年三月五月、二萬苞ヅ、ノ米

ヲ頒テ、一面救小屋ヲ設ケテ窮民ヲ收養シ、又濱殿京橋區溝渠浚

渫ノ工ヲ起シテ其急ヲ救フ。○天保撰要類集。應思穀恩編。松平容敬日記。松山

武御用資愛公記。曲亭雜記。札差町人共上納金一件。天保雜記。刑錢須知。天保七年七月臨時

御救一件。齋藤月峯日記。守靜堂雜錄。松屋筆記。天保七年申年再度御救一件。御觸書。天保集成。年

番取扱。天保七年御救小屋一件。天保七年十月廿七日向方掛米價高直市中飢渴之もの

入。御救小屋補理。御一件。武江年表。米價高直。御府内行倒。御品川宿外三ヶ所御救小

天保七八年
飢饉救恤事

屋に送り方出一件書留。

一、米價調節ハ、

天保七年七月廿二日町觸

去ル丑年以來、引續米直段高直之所、當年を雨天相續ハ故、右景氣ヲ以、當六月

以來米價格別高直ニ相成、市中之者共一同難義之趣相聞、於町會所も御救米

錢被下ハ間、兼多申渡置ハ通、米商賣之ものも、持圍米不致、正路ニ賣捌ハ儀を

勿論之儀ニ得共、万一隠し圍米ハあるし置ハもの有之ハハ、嚴敷可申付間、

早ク賣拂可申、且素人共飯米も餘分ニ不貯置様可致、尤當時之所、専ら魚食を

相用、可成丈ケ米穀之不足を補ハ様可致旨、先達多申渡置ハ儀ニ有之ハ

得共、猶厚く相守、都多米穀を以製ハ品も、是又當分之内無益ニ餘分之仕入不

致程能相減商ハ様可致ハ。

右之趣急度可相守、若等閑ニ心得ハ者有之ハ、嚴敷可申付ハ。

右之通町中可觸知ハもの也。申七月

觸ハ。七月廿二日

天保七年七月廿四日大久保加賀守殿御渡ハ御書付寫、初鹿野河州方請取。

町奉行衆

大目付ハ

先年米直段下直ハ間、相場之障りニ相成ハ付、追多及沙汰ハ迄、都多白米

ニ引請ハ儀、素人ニ不及申、假令問屋共ハ共、一切引請申問數旨、

幕府時代ノ救濟

文化三寅年町觸有之、奥筋井關八州御料私領寺社領にも相觸ひ處、此節江戸表米價高直に付、市中及難義の間、在方にも米所持之もの共も、白米に春立、追ふ沙汰および迄、江戸内の積送、問屋共も勿論、素人迄も勝手次第賣捌可申

ひ。右之趣奥筋井關八州御料私領寺社領共、不洩様可被相觸ひ。七月

右之通可被相觸ひ。○本丸廻狀留、天保七申年九月十五日館市右衛門方にも、小口年番名主に申渡。

當年雨天續、六月以來米價格別高直に相成、市中之者共難義之趣相聞、於町會所も御救米錢被下し間、兼る申渡し通、米商賣之もの正路に賣捌しを勿論、素人共飯米餘分、不貯置、當時専ら飢食を相用ひ、可成丈ヶ米穀之不足を補ひ、様厚相守、都る米穀ヲ以製し品、無益に餘分之仕入不致、程能相減商ひ様可致旨、當七月中相觸置ひ。

右之趣相觸、其後市中之者爲御救、拜借米も被仰付、厚御世話被爲、在し段相辨彌以前條之趣急度可相守し、今般米商賣人之内、相場合如何之儀相聞、入牢申付し。此上共素人共、餘分之飯米等貯申間敷、別る米穀を以製し品も、當分之

内成丈ヶ相減し商ひ可申し。若等閑に心得し者有之しを、嚴重に可申付し。

右之通猶又町中不殘可觸知旨、小口年番名主共にも可申渡し。申九月

右之通從町御奉行所被仰渡し間、組に不殘早に申通、町中家持借屋店借裏にまで、不洩様可申含し。

右之通被仰渡奉畏し。爲御請御帳に印形仕し。以上。天保七申年九月十五日

天保七申年十月廿七日大久保加賀守殿御渡。

町奉行

近來米直段相續高直之處、此節甚高直に相成、町方一統及困窮、此上下直に不相成し、るも、取續兼し趣相聞し。右に付、米問屋共荷主を預置し商ひ有之しを、荷主共の掛合、貯不置、仲買に不限、米商賣人も勿論、素人にも最寄次第直に賣渡し様申付、若米圍置しもの有之しを、町中可訴出し、吟味之上、其米取上、從公儀御拂可被仰付し。

一、米下直に相成し迄、米問屋共仕入米之外、上方筋地廻共入津之米穀に勿論、雜穀等迄問屋仲買に不限、素人にも勝手次第直に引請賣買致し、他國取引手廣く相成し様可致し。

一、米買ニ參ハテ直段相對致シ、ねるゞケ間鋪儀申間敷シ。若又理不盡成仕方
もいひ、米屋カ可訴出シ。

右之通、町中ニ可被相觸シ。申十月○天保集成、御觸書同。

天保七申年十一月十五日町觸○本丸廻狀留、十一月十四日大久保加賀守殿御渡書付寫。

近年違作之國柄も有之、江戸入津米無數、米價雜穀共、此節甚高直ニ相成、下々
難義致シ、付御救等被下置、其外米穀融通宜敷様、品々御沙汰も有之折柄
故、諸家中扶持米丈ケも、銘々領分知行所カ相廻シ、様可被心得シ。尤凶作皆
無同様之場所、或も運送手間取ハ場所等を格別、左も無之分も、江戸ニ多買入
ハ儀可成丈勘辨、いゝし可被取計、且餘分ニ相廻シ、扶持米程を除置、其餘市中
ニ相拂ハ義も不苦シ。

右之通万石以上以下共、領分知行所有之面々ニ可被相觸シ。十一月○天保集成同。

右之通御書付出ハ間、町中不殘可相觸シ。十一月十五日

天保七申年十一月十六日○本丸廻狀留、十八日大久保加賀守殿新阿彌を以御渡。

町奉行

米穀融通之た然ニハ間、在々多所持之米穀、江戸表ニ賣拂ハもの共も、追多

及沙汰ハ迄、米穀も勿論雜穀等迄、江戸内ニ積送、問屋仲買ニ不限、素人にも勝
手次第賣捌可申シ。

右之通御料私領寺社領共、不洩様可被相觸シ。十一月

右之趣可被相觸シ。○本丸廻狀留、天保集成同。——天保撰要類集

〔參考〕 徳川理財會要云フ、

本年年穀實ラズ、米價益々貴ク、人民饑ユ。因テ此令○米穀自由賣買令ヲ發布セリ。
蓋シ往昔上國及ヒ近國ヨリ江戸府内ニ輸漕スル商米ハ、行僮ノ外他ノ糶買ヲ禁
停スルノ規例タルモ、天明以降其法ヲ變通シ、米價昂貴ナレバ、則チ米商ニ非ザル
者ト雖モ、亦能ク直接糶買スルヲ得セシメ、價格低廉ナルニ至ツテ、再ヒ舊規ニ復
セシメ、務メテ米價ノ平準ヲ得セ令ルノ作用タリ。故ニ又々此令ヲ發布セシモ、後
チ再ビ之ヲ禁停セザルヲ以テ、竟ニ商況ヲ一變スルノ情狀ヲ見ハセリ。本年張紙
價格ハ、米百苞ニ春金七十五兩、夏金九十九兩、秋金百十八兩、冬金百二十二兩、平均
價格金百〇三兩、二朱金金二兩九五七一四二八ヲ以テ米一石ト爲ス。（目今金貨比
較米一石價格金八圓六十二錢三厘〇二八四〇四八、紙幣比較金十三圓五十八錢
九厘〇三〇四六三一二四三二ニ當ツ。米穀一件米商法、調ノ部、米價記完。）

覺

店連判

霸都時代ノ救濟

南北小口年番
名主 共

右を當六月以來米價高直之所去十八日後も別る相場引上ケ末々及難儀可申哉米價之類厚御世話も有之處日々相用ハ鹽醬油炭薪等も勿論其外木竹ニ至迄諸色直段俄ニ引上ハ段以之外不埒ニ付依之早々直段引下ケハ様可致都る日用之品兼多仕入置ハ儀にて可有之ハ處利欲ニ泥ミ諸人之難義を不顧無謂直段引上ケハ義相聞ハ間以來右體之者於有之モ召捕嚴敷咎可申付ハ。

右之通町々へ不洩様可申付旨組々名主共へ早々可申進ハ。

申○天保七年。七月二十一日

南北小口年番
名主印

右ハ昨廿一日南北年番名主一同御呼出ニ多主計頭様○神原忠之。御番所ニ被仰

渡ハ段私共ハ一同被仰渡趣奉畏ハ爲其連判差上申ハ仍如件。

表傳馬町一丁目誰店
誰印
店連判
右家主
連判

天保七申年七月廿五日

申十月四日筒井伊賀守御役宅ニ多申渡。

口上ニ多申合覺

米穀ハ人之命ニ拘リハ者ニ多無此上大切成者ニ多凶年ニ至ハ多モ輕き者

寒中一衣をぬきハ多米にかハハ多も猶足さる時ハ餓死ニ可及ハ然ルニ米屋等モ商賣ハ米穀高直ニ相成ハ多不時之利を得る事を工ミハ多下々難義ニ及ハ分ハ厭不申者ニ多可有之哉過去之義ハ目長ニ致シ此上高直ハ賣藏シ米等致ハハ糺之上嚴科ニ多可被所ハ前書之如ク人命等ニカハリハ重き者を彼是ニ托シ安く買高く拂ハ賣藏シ米ニ致ハハ無此上無道之義ニハ尤町人之義ハ利潤を以て商賣取續ハ事ニハ共是又種々可有之事ニハ既ニ入津ハ多も表向ニ買ハ内ニハ内證直段を以密ニ買置藏シ置ハ類等ハ無之哉町中御救等之如キ難有御世話共有之ハ所右ニ多不威服一己之利潤をのミ存シ人々難義を不顧御仁政之義も不相辨ハ儀ハ有之間敷事勿論ニハ此節を先教申ハ間前條之儀厚思慮可然ハ誠之道ニ叶ハハ商賣も追々繁昌致ハハ自然道理ニ多ハ前之爲ニ多則奉公ニハ右教ハ義ハ此上不量見ニ多格別人之難儀を致ハ者ハ嚴科ニ多可被所ハ是又嚴科ニ逢ハ者ハ嗚々後悔も可致と不便ニ存ハハ一先つ教ニ多成たけ米屋之者共へ上ハ之御奉公出來致シ世上之爲ニ多相成且ハ嚴科ニ多逢不申様ニなれかしと存ハ故ニ多ハ教ハ上ニ多之心得違之者ハ嚴科之時ニ臨ミハ多も後

悔致間敷、米屋之者共之内にも不埒之者、又ハ素人にも買込ハ類、又ハ仲間仲買等にも賣等致シ者もとく可申出シ、御賞美可有之ハ尤町奉行所にて、右申出シを待シとも無之ハ、容易ニ露顯致間敷なと、愚成ル人の利欲多、迷ハハ、我罪を存も有之者ハ、其所ハ前々申如ク、凶年之時餓死も及ハ者共之心ニ成多相考ハ、早速相分可申ハ間、能々其人心になりて、我ニ罪之有カ無キかの所を可相辨事要用ニ返々も其罪を不相辨して、重キ罪ニ被行も不便ニ存ル故、前廉より相教置シ、畢竟慈悲之沙汰ニ、毎度右等之御沙汰も有之儀ニ條、是又心得ハ様可致シ。此度改多如、此申渡も無之ハ、共一體之所前廉心得ニ申聞ハ事。申十月、右申渡、申十月五日會所より御小納戸御小高登一郎宅ニ差越。

書面之通、筒井伊賀守殿於役所、札差行事共ニ申渡有之ハ間、猿屋丁貸附會所ニ相届ハ付、御廻シ仕ハ。申十月

飛驒守 駿河守

大島九郎太郎 石原孫介 會所係

應思穀恩編

十一月十七日雨天。御勘定奉行方留守居呼出多、會津城詰米之内、二千二百

八十九石、來酉年五月迄ニ淺草御藏へ相納ハ様こと之書付相渡リハ旨、申出ル。

松平容敬日記

十一月十七日、松山御城米千二十二石、廻米御達御家記。

松山叢談

諸大名へ廻米被仰付ハ分

- 二千九百八十九石 松平肥後守敬○容
- 八百十七石 松平越中守永○定
- 三千百六十石 酒井雅樂頭學○忠
- 四百五十七石 小笠原大膳大夫固○忠
- 三百九十六石 松平下總守堯○忠
- 千二十二石 松平隱岐守初○勝善
- 千七十六石 松平大和守典○齊
- 千九百九十三石 松平左兵衛督詔○齊
- 九百八十一石 丹羽左京大夫富○長
- 九百八十七石 松平右近將監厚○齊

霸都時代ノ救濟

百九十六石
七百三十石
三百七十三石
百六十三石
九百八十一石
四百五十七石
三百九十二石
四百七十四石
五百五十六石
四百五十八石
百六十三石
三百九十石
二百六十一石
三百廿七石
三百廿七石

松平甲斐守柳澤保泰
戶田采女正庸氏
松平丹波守光年
真田伊豆守貫幸
松平遠江守榮忠
松平主殿頭侯忠
本多下總守禎康
石川日向守初總和
小笠原元之丞守長和
岡部内膳正和長
松平紀伊守豪信
本多上總介升忠
松平河内守良親
西尾隱岐守固忠
諏訪伊勢守恕忠

百五十三石
九十八石
百九十六石
三百五十九石
四百九十七石
七百十九石
二百六十一石
九十八石
千六十二石
二千百廿五石
千四十六石
三百三十六石
二百三十一石
三百九十石
七百三十二石

稻垣對馬守剛長
鳥居丹波守舉忠
加藤能登守邦明
松平信濃守信近
松浦肥前守熙
溝口信濃守諒直
大村丹後守昌純
大田原飛驒守清愛
稻葉丹後守守正
阿部伊豫守寧正
阿部能登守瞭正
土屋相模守直彦
松平右京亮承輝
戶田因幡守溫忠
秋元但馬守朝久

九百八十一石
 二百六十一石
 九百八十一石
 二百廿九石
 百六十三石
 三十七石
 二百六十一石
 百六十一石
 六十五石
 五十八石

青山因幡守良○忠
 久世隱岐守周○廣
 安藤對馬守由○信
 本多豐前守寬○正
 朽木隱岐守綱○河内守
張歟
 松平能登守美○乘
 永井飛驒守與○直
 土井重三郎守○大隅
利行
 松平備中守義○正
 石川播磨守承○總

右の去ル天保五年圍置米之内、右之通廻米被仰渡し、殘米此度又々早速江戸表へ廻米可仕旨被仰渡し由。

右申十一月夫々家來之者呼出し、御達有之由。

但、多分殘米有無不定故、種々御内評も有之由之處、何レにも御移り替將軍宣下之前後、淺草本所とも御米拂底故、無據譯合にて被仰付し也。

——天保中諸家御届書○史料稿
本所收。

風説ス、當年ノ乏穀ニ就、或閣老議スルニハ、又後諸氏へ廻米ヲ爲サシムベシ、上閣老云フニハ、否コノ議正當ナガラ、世ニハ違心傳心アレバ、一トホリ諸氏家頼へ内謀シテヨリ、表建テハ申スベシトノ事ニ定マリ、是ヨリ内謀ノウヘ、諸所へ命令有リシト。
 又コレハ別紙ナレド、今度諸所へ廻米ノ令有リシ略左ノ如シ。○人
名略。

——甲子夜話

二、錢相場引上ハ、
 天保七申年十二月町觸

此節米并諸色共直段引續高直之處、錢相場殊之外安ハ故、錢にて商ひいたしハ小前之もの共ハ、別て取續難儀之趣相聞、依て此度格別之御趣意を以相庭引立之ため、錢御買上被仰出、且又錢相場之儀も、當分のうち金壹兩ニ五貫七百文ハ六貫文を限り、賣買御定被成下ハ、右之通錢相場引上ハ、おのつゝのら諸色直段も相響、輕き者しのさるゝも可相成間、銘々其業體なほさり、亦く出精致し、此上とも取締ハ様心掛ケ、厚御世話之趣忘却いゝすましく

一、兩替屋其外錢商賣いさしもの共へ己之利欲迷ひ相場違を以他國多分之錢取寄い義のさく不相成い若相背やあら有之外をるさおひてい急度可申付間心得違無之様町々名主支配限り精々可遂吟味い

右之趣町中可觸知をの也 申十二月

右之通從町御奉行所被仰渡し間町中其筋商賣人の勿論家持借屋店借裏々迄不洩様可申聞い此旨町中不殘可相觸い 十二月九日

天保七申年十二月九日

申渡

本兩替屋行事 三組兩替屋行事 番組兩替屋行事

錢相場之儀近來引續下直に有之處此節米價格別高直之折柄錢の追々下落致錢にて商ひ致い輕き者ともい別て難義之趣相聞い依り相場引立之爲御仁計を以て錢御買上被仰出當分之内錢相場之儀も金一兩に五貫七百文を六貫文を限賣買御定被成下し間御趣意之趣厚相心得右相場を以無差支賣買可致且追て及沙汰い迄い他國を錢相廻し儀決て致間鋪い若私欲に泥

と相場賣崩しい歟又い相場違之徳分を見込他國が多分之錢取寄い様成儀致い者有之いい急度各可申付間相互に改合紛敷筋及見聞いい早々可申出い猶又御買上錢納方其外之儀に付町年寄喜多村彦右衛門を可申渡品も有之間同人差圖可請い 申十二月

天保七申年十二月十一日町觸

近年引續諸色高直之處當春以來米雜穀迄も拂底にて米價の不及申都て之食類前載をの其程に至まで悉高直に相成世上一統を申内にも輕者ともい別て難儀及い付格別之以御仁惠町々飢餓にも可及者い御救小屋補理入おかれ再度之御救米等被下其外御救筋品々御慈悲之御沙汰有之猶又窮民共取續之爲め錢相場引立い様此度市中之錢多分之御買上被仰付いへい此上追々錢相場高直に可相成然上の輕者共凌方之助ケにも可相成義にい條一同御趣意之趣難有可奉存共付諸色錢にて商ひい分り猶以之儀可成丈ケ此上下直に賣い様可致い勿論直段引下ケい共品を小振よ致い歟或い目方等減しい様之儀有之い間無詮事にい間右體之心得違無之様可致い若右之趣不相守諸色高直に賣い歟又い如何之取計等いさしい者有之に於り

全く難有御趣意を不相用者之儀ニ付、少しも無用捨召捕吟味之上急度可申付。右之趣名主共始厚相心得御趣意之程行届、諸人不及難澁様精々可心付。尤如何之義見聞及、其段月番之番所、以封書早々可申。右之通町中不洩様入念、可觸知もの也。申十二月。右之通從町御奉行所被仰渡間、町中家持借家店借裏々之者迄、壹人別ニ不洩様入念、可相觸。十二月十一日。

天保七申年十二月十一日喜多村彦右衛門方にて申渡。

申渡

味噌問屋。下り鹽仲買。地鹽問屋。炭薪仲買。水油仕入。方。同仲買。魚油問屋。同屋下り蠟燭下り蠟燭問屋。地掛蠟燭問屋。茶問屋。紙問屋。青物問屋。乾物問屋。肴問屋。小餅丁。鹽干肴。鹽干肴問屋。蓮根問屋。蒟蒻問屋。同屋も可申。

行事共

米穀并諸色格外高直之折柄、錢相場下落いたし、世上一統と申内、別て輕もの共取續難儀、ニ付、相場引立之、免御買上錢被成下、相場之儀も當分之内、金一兩ニ五貫七百文、六貫文迄御定被成下。依て右釣合を以、諸色直段引下ケ方之儀、町觸之趣一同承伏いたし、早々諸色直下ケ可致は勿論之事、以へ共、

猶又申渡、趣意、此程中錢相場自然と引上ケ、事故、諸色も右ニつれ少く宛も下直ニ可相成運、之處、矢張六貫八九百文位致、頃之相場を元立ニ致し、儀も、是迄際立、義も不相聞。右の眼前懐合之、付な、賣前、の更に不響、追々引上ケ、哉も相聞、畢竟下之難儀を、不思筋ニ相當り、如何、尤一同難澁之折柄、を、乍申、ケ成、立行、之、又、取續方手段も可有之哉、實以小前ニ至、其日を送り兼、次第ニ有之、得、ケ成之者、の自他を、不論助ケ合、心得、無之、の、厚御趣意も相まつ、今度、以御仁計前書之通、錢相場御定被成下、上、御趣意以前相場ニ照合、現在金壹兩ニ凡七八百文餘之開、相成、右を元立、いたし、後、夫丈ケ諸色不引下ケ筋無之、今度御趣意相場ニ元付、際立、様諸色直下ケ可致、尤表向直段而已引下ケ、目方にて減少、の、或、物之、大サ、杯縮メ、様にて、無詮事、一、同存罷在、通、追々、不輕御世話にて、窮民取續罷在、時節柄、一己之利欲ニ迷、御觸之趣、不相守、直段不相直、族於有之、の、嚴重も可被、仰付、間、錢を以賣買いたし、品、の、猶又早々引下りし、廉相顯、様、精々可申合、尤密々御調も有之、御觸不相聞、御趣意相場不相當之賣前致、族、の、無用捨被召

捕御吟味有之筈ニ付、右申渡之趣心得違無之様、銘々仲間職之者に早々可申
繼し。

但、春米屋共の別段及沙汰し。

右町御奉行所依御差圖申渡間、其旨可存。

南北小口年番
名主 共

右之趣夫々申渡し處、菓子職豆腐屋諸食物商ひ之もの、其外仲ケ間取極無之
諸商人共の、名主支配一人別申諭、尤右も一ト通り申聞置而已こそ不行
届し間、名主家主掛心頭世話可致し、等閑こいふし、御沙汰可有之條、心
得違無之様可致事。

但、諸相場書等、此度申渡ニ付、先差出ニ不及し。

右町御奉行所依御差圖申渡間、其旨可存。申十二月

天保七申年十二月十五日喜多村彦右衛門方にて申渡。

申渡

南北小口年番世話掛
名主 共

今度下々御救之爲メ、錢相場引上ケ被仰付しに就て、右釣合を以諸色直下

ケ之儀ニ付、御觸申渡等之趣、一同承伏いたし、夫々早速直下ケ可致の勿論ニ
し處、中この趣意まで聊こても直下ケさへいたし、申譯可成哉、杯
心得違之もの、或の兼て品々御世話も有之故、賣徳減居し向錢相場引上りし
を幸、是迄之不足を可入合内存之族も可有之哉、然時、諸色直下ケ區々
相成、御趣意も相振し、右體心得違之者、御糺之上、嚴重御咎可被仰付義ニ
有之、依て引下ケ直段不同無之、ゆゑ、錢賣買之分是迄、一割四五歩引下ケ可
申し、尤品柄寄右割合ニ難引下分、其譯支配名主に申立差圖可請、此段心得
違致間敷し。

但、湯錢之義も引下ケし様可致し。

右之通、町御奉行所被仰渡し間、早々諸色直下ケ行届し様可申繼し。

申十二月

天保八酉年正月十日町觸

去夏以來米價諸色共高直ニ、世上一統難澁およひしに付、夫々御救筋御世
話も有之し處、諸色不引下、右も錢相場下直故、錢ニ商ひし品々も難引下段
も無謂儀も無之間、輕者共御救之、去冬錢御買上、又も買持等も被仰付、

幕府時代ノ救濟

相場格別ニ引上ハ付多モ夫ニ准シ諸色直段モ引下ケ可申儀ニ付去冬以來追々町觸井申渡之趣承伏いたし夫々引下ハ分有之儀得共中ニ今以一向ニ引下ケ之廉不相見品有之如何之事ニハ左ハ多モ錢相場而已引上ケ諸色直段モ其儘高直ニ多モ都多世上及迷惑ハ筋ニモ相當リ以外之事ニハ此上等閑ニハ多シ置ハ族モ嚴重可申付間早々直下ケ可致ハ尤觸之趣相辨目立ハ様直下ケ可致心組之者モ仲間取極有之儀向モ不同賣無之様杯申合ニ隙取未引下ケ不申品有之哉ニ相聞ハ右モ平年共違ハ此節柄仲間申合を見合居互ニ可及場合ニ無之銘々御奉公モ相心得仲間之申合等ニ不拘早々直下ケ可致ハ下々御救之御趣意柄厚く相合格別身ニ入際立ハ様致直下ハ者モ其次第ニ寄追多御賞も可有之若又右之趣不相聞無謂直下ケ不致族モ無用捨召捕吟味之上咎可申付條心得違無之様可致ハ

右之趣町中不洩様早々可觸知モの也 酉正月

天保撰要類集

十二月二十九日

別紙卷上

大目付

當夏以來別て米價高直ニ付輕者共ハ御救之ため此度江戸表多分之錢御買上ニ相成相場格別ニ引上ケハ右者厚御趣意を以被仰出儀ニハ間在方錢兩替相場之儀江戸表町相場同様取引可致ハ觸之趣不相守紛敷義有之節ハ早速相顯ハ事ニハ條追て及御沙汰ハ迄者前條之趣相守心得違無之様可致ハ

右之趣關八州御料ハ御代官私領ハ領主地頭ハ不洩様早々可被相觸ハ

十二月

右之通可被相觸ハ

本丸廻狀留

正月十日戊子於關東觸書寫之通自附武家以書中差越ハ

- 一、通米價高直輕者救之爲江戸表多分之錢買上ケ相場格別上ハ關八州在方兩替同様取引可致ハ事
- 一、通金札遣願濟之外難相成錢札同上銀札米札同事心得違無之様之事
- 一、通金箔并下金取締方後藤三右衛門ハ一手ニ申付ハ義吹金モつし金屑金其外都て下金類金座并金座付下買ハ可賣渡以下條々之事

公武御用資愛公記 史料 稿本收

丙申季秋の比か、大坂町奉行矢部駿州守駿河守定謙轉役して、御勘定奉行御勝手に
 命されしより、いさく心を用ゐることなく、且上の御尊慮によりて、錢を多
 く御買上げとなりしかり、是まで金一兩大錢六貫六百六十四匁、小錢六貫七百八十四匁なりしに、冬
 十二月上旬より錢相場俄に登りて、金一兩大錢五貫八百六十四匁、小錢五貫九百六十匁となり
 たり。これより錢にて賣る諸物の直下けをせよとある町ふれ度々及ひ
 しうは、丁酉春二月上旬より、豆腐類など定價の物は、小半挺まで一文つゝ下
 直よりいさし、蕎麥なども二八を三五に改めけり。しかれども豆腐は例年の小
 半挺より、その形を半分よりいさし、蕎麥も例年の一椀こくらふれり、半椀より
 こなりぬ。餅煎餅などの形をちひさくして、例年の三分一ばかりこあらざる
 ゐなし。此餘定價ならざるもの、錢の安ありし折とあはることなし、諸物元
 方高料なれり、いさちひさくしてをなほ引あそすと聞ゆ。紙類の高料又い
 ふはありかし、半紙のよき物の一帖三十二文、これらも前未聞のことなり。
 酒の一升三百五十文、四百文より下直なるいなし、一升二百三十文の味醂、四
 百文よりたれとも、都て水を多く加ると覺えて、生酒のつやなし。錢相
 場の登りし商人の爲より宜しかるへけれとも、武士諸職人なんと、金を得

て錢を買ふものゝ爲よ、妙といひかふし。

——曲亭雜記

〔參考〕 錢相場公定撤除

一、此節市中錢拂底こ、兩替屋共賣錢差支い趣相聞いこ付、金壹兩こ付錢
 六貫五百文之定相場立置い儀こをい得共、當分之内、天然之相場こ復、打錢
 之儀も、以前之通相心得、錢賣買可致い、尤當時在來兩替屋之外こ、錢賣買
 令停止い、然ル上者、兩替屋共利徳こ迷ひ、一時に相場格別引立い様之義を、
 決多致間敷、早々御府内こ勿論、於在方迄も、錢買氣潤澤致い様、厚相心得
 正路こ渡世可致い、且相場之儀も、日々月番之番所こ可相届い、若相背兩替
 屋共、利潤こ抱、高下共不當之相場相立いの、嚴重之咎可申付い。
 右之趣、町中不洩様、可觸知者也。

酉天保八年十一月廿四日

——舊町名主家記

三、献金

ハ、

申天保七年十二月十七日加賀守殿に別紙平右衛門書面添御直飛驒守上ル。同十
 九日申上候通、承付候様御直五郎左衛門に御渡、承付いさし、翌廿日御同人に飛驒守
 方御直こ返上。

印部筑金三郎

町會所窮民御救筋之内の札差町人共差加金之儀ニ付申上ひ書付

書面申上候通可取計旨、被_レ仰渡、奉_レ承知候。

申十二月十九日

印筒井伊賀守 印大草 能登守
印明樂飛驒守 印田口五郎左衛門

一昨十五日飛驒守○明樂茂村申上置ひ札差町人共之内、別紙名前之もの共、此節窮民御救筋彼是御世話有之儀を難有奉存、銘々分限ニ應じ、町會所御救入用之内に差上金五千六百兩上納仕度旨、町會所詰名主平右衛門方別紙之通申立、奇特之筋ニ有之の間、願之通承届、上納申渡ひ、依之申上置ひ以上。
申十二月十七日

（朱）申十二月十日出ス。但本紙も、同十七日伺書に相添、加賀守殿に進達いさし候處、御手許に留り候ニ付、此寫に印形爲致置。

御藏前札差共之内貳拾三人御救入用之差加金仕度旨申出ひニ付御内慮奉伺ひ書付

町會所掛年番名主
平右衛門

引續米價高直ニ付、極貧もの爲御救、小屋御取建被入置、朝夕御賄元手錢迄被

下置、其餘困窮之者共にも、再度御救米被下置ひ段、厚御仁惠之程難有奉存、御藏前札差之内、左之名前之者共も、年來家業無滯相續仕罷在、別多御慈愍之段難有奉存、右御救御入用之内に御差加金五千六百兩上納仕度旨、一同申合ひ得共、聊之儀ニ付、表立相願ひを恐入ひ儀ニ付、私方迄内願書を以申立ひ。

一、金五百兩

合人数貳拾三人。
金五千六百兩。

右之通申合、銘々出金仕、御救御入用金に御差加被成下度旨申立ひ間、此段御内慮奉伺ひ以上。

申十二月

町會所掛年番名主
平右衛門 印

（朱）申十二月十九日廻し濟。同日於町會所金三郎申渡。掛一同立會。

印伊賀守 印能登守 印飛驒守 五郎左衛門 印部筑金三郎

申 渡

一、金五百兩ツ、

伊勢屋

四郎左衛門 ○外三人、三百兩一人、二百五十兩四人、二百兩十二人、百五十兩二人、百兩一人略。

右々窮民御救筋厚く御世話有之儀を難有存じ、町會所御救入用之内に差上金いさし度旨、名主平右衛門を以申立、奇特之筋ニ付、願之通上納申渡

霜都時代ノ救濟

四二五

間、町會所は可相納し。

右々大久保加賀守殿○忠に被申上之上、奉行衆被仰渡之。

右被仰渡之趣、一同難有承知、奉畏し。依之御請奉申上し。以上。

天保七申年十二月十九日

淺草福富町壹丁目幸次郎地借

作兵衛略○外

右之趣、私儀も罷出、被仰渡之趣、難有承知奉畏し。依之奥印仕、御請奉申上し。以上。

町會所年番名主

平右衛門

町御會所

(朱) 申○天保七年十二月廿八日加賀守殿に御直飛驒守○明樂茂村五郎左衛門○田口喜行立會上ル。翌廿九日承付いとし候様御書取御添、御直飛驒守に御渡、承付いとし、即刻林阿彌を以返上。

印都筑金三郎

正田榮次郎印

佐藤十兵衛印

福田所左衛門印

田中新五兵衛印

松村忠四郎印

中村又藏印

高橋鐵次郎印

町會所窮民御救之内に札差町人共再應差加金相願儀に付相伺し書

付

書面之通可取計旨被仰渡、奉承知候。

申十二月廿九日

印筒井伊賀守

印大草能登守

印明樂飛驒守

印田口五郎左衛門

札差町人共之内貳拾三人之者共、窮民御救筋彼是御世話有之儀を、難有奉存、町會所御救入用之内に差加金五千六百兩上納之儀、町會所詰名主平右衛門に申立、奇特之筋に付、其段申上置、願之通承届、上納申渡し。然ル處猶又右之者共も勿論、其外札差共之内、別紙名前之もの共都合八拾壹人、猶又九萬四千兩差加、最初之差加金五千六百兩共、合金拾萬兩之高し。し差上度、尤右之内上納相濟し分共五萬兩も、其砌上納仕、殘金五萬兩也。翌酉年丑迄五ヶ年ニ割合、壹ヶ年金壹萬兩ツ、相納度旨、是又前書平右衛門に別紙之通申立、一同奇特之段也、最初差加金いとしのもの共同様之趣意に付、願之通差加金之儀、右札差共は可申渡し奉存し、依之奉伺し。以上。申十二月

(朱) 申十二月廿九日。加賀守殿御直飛驒守に御渡、伺書一同即刻林阿彌を以返上。

覺

書面伺之通、可被取計之事。

(朱) 申十二月廿七日出ス、但本紙を翌廿八日伺書に相添、加賀守殿に進達いさし候に付、此寫に印形爲致置。

御藏前札差共之内八拾壹人御救筋に差加金仕度旨申出に付御内慮奉伺書付

町會所掛年番名主
平右衛門

引續米價高直に付、極貧者爲御救小屋御取建被入置、朝夕御賄元手錢迄被下置、其餘困窮之者共にも再度御救米被下置に段、厚御仁惠之程難有奉存、御藏前札差之内、年來家業無滞相續仕し者とも、別多御慈愍之段難有奉存、右御救御入用之内に御差加金五千六百兩上納仕度旨、先達る伊勢屋四郎左衛門外貳拾貳人之者共一同申合に得共、表立相願ひも恐入儀に付、私方迄内願書を以申立に付、御内慮奉伺に處、當月十九日右貳拾三人之者共被召出、伺之通願之趣御聞届被成下し旨被仰渡、翌廿日金五千六百兩上納仕、一同難有仕合奉存に、然ル處、右體冥加上納金願之通被仰付に趣、外札差共追及承窮民御救筋品々御世話被下置に段、厚難有奉承伏、銘々家業無滞相續仕し爲冥加

一同乍聊上金仕度旨申合に付、前書伊勢屋四郎左衛門外貳拾貳人之者共も、猶又相加り、先達る上金五千六百兩に金九万四千四百兩此度相加之都合、金拾万兩に仕、冥加上納仕度、尤右高之内、先上納之分相加之、當時金五万兩上納仕、殘る金五万兩を、來酉年分壹ケ年金壹万兩ツ、五ケ年分割合、年々十二月上納仕度奉存に間、何卒右御救御入用に御差加に被成下度旨、坂倉屋治兵衛外八拾人之者共、一同申合に得共、莫大御入用之内少分之上金に付、表立相願ひも、別多恐入儀之旨、私方迄内願書を以申立に。

淺草森田町家持
坂倉屋治兵衛
○外八拾人略。

一、金七千兩
内、金三千五百兩 當時上納
金三千五百兩 來酉より五ケ年割上納

合、人數八拾壹人。
内、金五萬兩 當時上納。
内、金五千六百兩 當月廿日上納相濟申候。
金五萬兩 來酉年分五ケ年割合、年々金壹萬兩ツ、上納仕候。

右之通申合、銘々出金仕、御救御入用に御差加被成下度旨、内願書を以申立に間、此段御内慮奉伺に以上。

申十二月

町會所掛年番名主
平右衛門印

札差町人共上納金一件

一、當年違作之國柄も有之、御府内へ入津米無數、市中及難儀、輕き者共に至り
 いて、飢餓も及ひ、付、毎度御救も被下、其上神田佐久間町河岸に御救小
 屋補理、食事等被下、其外品々御世話之趣有之、此上入津米無之いて、彌
 米穀直段に不拘、市中難取續、春米屋にて日々小賣、春立も不行、是の間、此度町
 方身元宜手厚成との相撰、遠國其外賣米可有之國々にて米買入、江戸表へ相
 廻し、市中米直段引下ケ、様、融通買入方御用向之儀、町方御用達三人并其方
 共一同へ申付、尤新米出穀之時節に付、後過いて右取計方行届間敷哉、差支
 程も難計に付、町方御用達仙波太郎兵衛内藤佐介、永田伊三郎へも先達
 て申渡、右三人手代共金子用意致し、國々へ差遣し、此節買付方召出の間、右買
 入米爲替金子手當、庄左衛門外九人、金貳千兩宛、本郷追分長左衛門外九人
 へ金子千兩宛、當分立替之義申付の間、早々用意可致、來酉年右御用相濟の
 へ、金子御下ケ戻し、御府内永住安堵に暮罷在、御國恩之程も相辨の上
 の、一統御忠節之事に得、割付高々餘分御用も相勤の者、格別之事に
 間、出精致し、銘々員數之儀可申立、別段之儀を以申付、義に付、厚相心得銘

々出精可相勤

右
 名 主 米屋 名 主

前書申渡町人名前

長谷川町

村越庄右衛門

瀬戸物町鑓節屋

伊勢屋伊兵衛

谷中西光寺門前質屋

三河屋權左衛門

木場金貨

鹿島清左衛門

右之者共金貳千兩

本郷追分質屋

高崎屋長左衛門

富澤丁古着問屋

富田屋源七

金吹丁

播磨屋新右衛門

本郷四丁目

酢屋平兵衛

右之者共金五千兩宛

右申十二月五日於筒井伊賀守憲御役宅申渡由

新

鹿島利右衛門

富澤町

大黒屋又兵衛

麴町四丁目質屋

越前屋又右衛門

麴町七丁目呉服屋

伊勢屋八右衛門

三十間堀四丁目質屋

甲斐屋九郎兵衛

本丁四丁目藥種屋

伊勢屋長左衛門

同町平川町質屋

喜谷喜六

同所六丁目金貨

紀伊國や長左衛門

深川大島丁質屋

福島や彌兵衛

室町二丁目雜商

木屋九兵衛

同丁古着問屋

大黒屋長右衛門

本兩替丁

柳屋小左衛門

通油丁糸問屋

辻屋新兵衛

本郷二丁目藥種屋

近江屋甚兵衛

赤坂傳馬丁一丁目

出雲屋彌太夫

糸問屋

辻屋又四郎

鈴木三衛門

三河屋安兵衛

本丁吳服問屋

梅屋孫衛門

萬屋三衛門

ごふくや

大黒や三衛門

傳馬丁紙店

村田七右衛門

木綿問屋

小澤清左衛門

大門通 大丸や正右衛門

通油丁吳服問屋

大黒や庄右衛門

茅場町酒問屋

小西九郎兵衛

傳馬丁木綿問屋

池屋平衛門

金貸

橋爪三右衛門

本町ごふくや

槌屋徳左衛門

升屋久右衛門

本町藥種問屋

大黒や庄三郎

本所衛問屋

鹽原屋太助

靈巖島酒問屋

井坂市右衛門

本石町ごふく問屋

大和屋三郎兵衛

深川木場材木問屋

万屋和介

金貸

中瀬善三郎

右申十二月廿三日差越にて金子二千兩宛上納申渡し由

七千兩宛

伊勢屋四郎左衛門

三千兩つ

伊勢屋や嘉右衛門

二千四百兩つ

森村屋次兵衛

伊せや安兵衛

同

市郎右衛門

坂倉や佐兵衛

千三百兩

兒玉や權左衛門

同 四郎兵衛

井筒や四郎右衛門

坂倉や清兵衛

千九百兩

伊勢や幾次郎

千四百兩つ

大口や彌右衛門

千六百兩

伊せや平左衛門

千百兩

坂倉屋喜右衛門

坂倉や七郎兵衛

土屋善八

二千二百兩つ

和泉や源兵衛

三千兩つ

伊勢屋與兵衛

いせや平七

千五百兩

和泉屋喜平次

七百兩つ

伊勢屋茂右衛門

下野や十兵衛

右貳拾三人之者共差上金、此程願之通上納申渡し間、金高をも差加し間、書面之通可相納し。

七千兩

坂倉や治兵衛

同

清左衛門

九百兩

山田や金右衛門

同

仁右衛門

上總や忠兵衛

坂倉や次郎左衛門

松坂や市右衛門

同

富之介

伊勢や市十郎

近江や三郎兵衛

五百兩つ

坂倉や勘兵衛

三百兩つ

伊勢屋兵左衛門

三千二百兩

伊勢屋利兵衛

二千六百兩

いせや三郎左衛門

千兩つ

坂倉や太郎兵衛

同

万右衛門

八百兩つ

笠倉や喜右衛門

七百兩つ

坂くふや源太郎

六百兩つ

いせや權十郎

四百兩つ

利倉や庄左衛門

上總や徳兵衛

上總や源七

いせや與八

同

與八

三千四百兩つ

伊せや四郎次郎

三千兩

和泉や甚左衛門

同

文六

笠倉や彌七

伊勢屋惣右衛門

坂倉や與次兵衛

いせや彌兵衛

岩村や角次郎

五百兩つ

大口や源七

利倉や勘兵衛

藤田屋市右衛門

五十兩

井つゝや三右衛門

二百兩 <small>つ</small> 、大口や長兵衛	下野屋又兵衛	相模屋庄兵衛
百兩 <small>つ</small> 、伊せや喜太郎	利倉や源右衛門	伊せや久右衛門
坂倉屋喜七	坂倉や次郎八	同 助 八
井つゝ屋儀兵衛	和泉や才兵衛	利倉や又兵衛
二百兩 <small>つ</small> 、伊せや喜十郎	同 惣次郎	同 嘉十郎
村杉や次郎介	いせや庄五郎	菱屋武右衛門
いつゝや喜四郎		

右の前書二十三人之者共同様、御救筋厚御世話有之いを、難有存知、町會所御救入用之内へ、二十三人之もの共い一同こて合金拾万兩差上金之義、名主平右衛門を以申立い趣、寄特之義こ付、願之通上納申渡、先達て上納相濟五千六百兩共、合金五万兩ツ、此節上納、五万兩來酉年か五ヶ年こ割合、一ヶ年一万兩ツ、町會所へ可相納い。

右被仰渡い趣、一同難有承知奉畏い。依之御請奉申上い。以上

申十二月廿九日

御藏之者共連印

町御會所

右御藏前札差共十萬兩上ヶ金之儀、當正月十三日差出、當時五番會所より請取有之、跡五萬兩い來ル子年迄五ヶ年之内相納い由。

天保中諸家御届書

乍恐以書付奉申上い

一、町會所御救御入用之内い、金五千六百兩御差加上納仕度段、先達貳拾三人之もの共い奉願上い處、願之通被仰付、右金五千六百兩い金九万四千四百兩相加い、都合拾万兩上納仕度、八拾壹人い奉願上い所、去ル十二月廿九日願之通上納被仰付、難有仕合奉存い。依之金拾万兩之内、五万兩此節上納可仕旨申上、尤先達い上納仕い五千六百兩上納之分差引、殘金之分當月十三日上納仕、殘金五万兩い當年か五ヶ年こ割合、一ヶ年金五万兩ツ、毎年十二月上納仕度旨、書付ヲ以奉申上い。右之通御聞届こ相成い間、此段書付ヲ以御届奉申上い。以上。酉正月四日

割合

七千兩宛 伊勢屋 四郎左衛門	同 四郎兵衛	坂倉屋七郎兵衛
三千兩 <small>ツ</small> 、同 次兵衛	伊勢屋加右衛門	井筒屋八郎右衛門

霸都時代ノ救濟

四三五

○下略。

右三右衛門儀近來引續御金吹方御用相勤、莫大之御手當頂戴致、家格も結構被仰付いこ付も、永御奉公相勤度心底之所、病身こ成御用多之御奉公相勤兼い間、隱居致し、悴弘三郎の跡式相續被仰付い様致度、因も爲冥加是迄頂戴致い御手當金并吹滅減。餘目之外等迄、取集金高貳拾万兩上納、内拾万兩の當春相納、殘拾万兩を來酉年を追く取集上納致度旨、相願いこ付、加賀守殿の相伺い所、隱居之儀を追る御沙汰之次第も可有之間、先是迄之通爲相勤、上ケ金之儀も願之通上納被仰付い旨被仰渡い間、其段三右衛門の申渡い、依之此段御達申い。申十二月

銀座年寄 辻傳右衛門 秋田 内記
銀吹所 大黒作右衛門

右之者共儀、近來引續通用銀二朱吹直し、壹朱銀吹立御用相勤、多分之歩一井掛糺料等被下置、難有奉存いよ付、爲冥加銀座人共者一同を金拾五万兩上納、三万兩を當年相納、七万兩は來酉三月、殘五万兩を七月十二月上納、大黒作右衛門儀も、金七千兩上納、千兩を當春、二千兩を來酉七月、殘四千兩の同、二月上

納致度旨、銘々相願い旨、加賀守殿の相伺い處、願之通上納被仰付い旨被仰渡い旨、間其段銀座年寄并大黒作右衛門の申渡、依之此段御達申い。

申十一月

天保雜記

丁酉ノ春ノ話ニ、此度金座銀座へハ多數ノ御用金ヲ命セラレ、金座ノ方ハ二十万兩ト聞コユト。

一説ニハ、此節金座ノ後藤ハ、一家ニテ直ニ二十万金ヲ上納シテ、且隱退ヲ願タリ、其旨ハ罪ヲ懼ル、ニ由レリ、サレトモ隱退ハ免サレス。

一説ニハ、右後藤氏近來貯貨夥シク成テ、既ニ百万ヲ以テ算フルニ至レハ、近頃ソノ觀會ヲ爲シタルホトニテ、二十万ハカリハ聊身財ノ損ニハナラヌト。

又銀座ノ方ニハ、先達テ冥加ノ爲トテ、十万兩上金セシガ、此度又十万金ノ上納ヲ命セラレケル。思フニ是ハ同座中役懸リノ向キハ、其者々々ノ身元相應ニ割ツケ仰渡サルノ旨。

陋説ニハ、銀座役掛ノ中、小南ト稱スル者へ出入スルキヤウシ袷匠ノ話セシハ、コノ家内ニテハ金銀等數シラズトリ散シ、又家内ノ者自ラ百兩包抔作ル體、世上錢幕都時代ノ救濟

ヲ取扱フガ如シ、時トシテハ、裱匠ナトへ蒲焼ヲ食サセシ、二方金三方金ヲ出シテ、買來ラスル、杯常ナリト。

コノ小南別業ヲ三處ニ構ヘテ、何レモ造作ノ費千金ニ出入セリト。コノ一口ニ上金一万兩ヲ命セラレタレハ、右ノ別業ナト賣却シテ、強勉シテ其數盈シト、當時ノ嚴令斯ノ如シ。

右等ハ、近來彼ノ向キ奢侈甚シキニ因テ、矢部氏御勘定奉行ノ策ニテ、豫メ隱密人ヲ遣ハシ、彼ノ内實ヲ悉ク聞置テ、コノ命令ニモ及フ、又既ニカノ別業杯ノ地、圖造作ノ眞マテモ、密ニ官廳へ寫有ルト云。

又小南コノ上金ノ氣指ヲ知リテ、何レノ官權へカ二千兩ヲ携往テ、苦歎ヲ言伸タルニ、協ハスシテ苞苴ハ返サレシト、亦裱匠ノ話。——甲子夜話

四、小給者借米

天保七年水野出羽守殿御渡

拜借米之儀ニ付御書付

米相場高直ニ付、小給之者及難儀ハ、段、達御聽、格別之思召を以、高百俵五人扶持被下、并御扶持方計之分も、壹人扶持五俵之積り高ニ直し、江戸於御藏被下

ハ分ハ、高貳拾分一之積り、拜借米被仰付ハ、間、頭支配裏判手形を以、淺草御藏ニ多可請取之、返納之儀も、追多可相達ハ、以上。

右之通可被相觸ハ、六月

刑錢須知

五、救米給賜(初度) 七月廿五日ヨリ九月十四日ニ至ル。給賜人員三十五万三百五十五人。白米六千五百六十二石六斗四升五合、錢十万九千三百七十七貫四百十六文。

天保七年七月十二日

加賀守殿主計頭伊賀守左衛門立會、米價追々高直ニ相成ハ、付、市中ハ御救可

被下哉之段、口上を以、御内慮相伺ハ、處、伺之通御救差出ハ、様、即刻御下知有之

ハ、付、主計頭方一體圍穀も手薄ニ付、此度も米錢半々之積を以、相渡ハ、様可

仕ハ、旨申上、是又御聞置ニ相成申ハ、同日御勘定所詰合岩淺三五太夫ハ、被仰

渡ハ、右ニ付、伺書等も不差上、左之通申上置之、書面取調差上ハ、事。

申七月十三日加賀守殿ハ、御直伊賀守上之。

印渡邊三郎助。正田榮次郎。岩淺三五

太夫印。佐藤十兵衛同。佐藤清五郎同。

加藤又左衛門。松浦彌左衛門同。本多彌太夫。村井專右衛門同。

米價高直ニ付其日稼之者共ニ御救米錢被下儀申上書付

印柳原主計頭之。同筒井伊賀守。同土方出雲守。同田口五郎左衛門。

此節追々米價高直ニ付市中之者共及難儀ニ付右之者共ニ御救相渡方ニ可有御座旨御内慮相伺處伺之通被仰渡間人別取調渡方取調様支配向組之者申渡。尤例米價高直之節も男壹人一日米五合、六十歲以上拾五歲以下之分并女壹人同三合、之割合を以相渡得共此度之儀も米錢半々之積ニ男壹人米貳合五勺當時市中下白米相場錢百文ニ付六合之割を以錢四十文六十歲以上拾五歲以下之者并女壹人米壹合五勺錢貳十四文、日數十日分差遣様可仕奉存依之此段申上置以上。申七月

申七月十九日廻し濟

印主計頭 印伊賀守 印出雲守 印五郎左衛門

印渡邊三郎助。正田榮次郎。岩淺三五太夫印。佐藤十兵衛同。佐藤清五郎同。

加藤又左衛門同。松浦彌左衛門同。本多彌太夫。村井專右衛門同。

此節米價高直ニ付其日稼之者共ニ向柳原町會所并筋違橋御門内建添地ニ多米錢被下ニ付右園内ニ園糶摺立白米春立場之儀町會所内ニ取建有之糶摺立場を取繕其外七新規取建積前々臨時御救之振合ニ不差綺諸色省略仕入札申付開札仕處惣建坪四百七十六坪餘并町會所内摺立場取繕共一式

金貳百八拾壹兩銀九分九厘 伊勢屋 七
金貳百八拾七兩一分銀貳分五分 明石屋 市郎兵衛
金三百八兩壹分銀二分五分 河内屋 半平

右之通ニ有之不相當之義無之ニ間落札直段を以爲取懸申。尤掛役人時見廻座人手代等附切可成丈手廻仕今日中皆出來之積御座。此段申上置以上。申七月

渡邊三郎助。正田榮次郎。岩淺三五太夫。佐藤十兵衛。加藤又左衛門。松浦彌左衛門。本多彌太夫。村井專右衛門。

米價高直ニ付町會所御救米錢渡方之儀申上以書付

榊原主計頭 筒井伊賀守
土方出雲守 田口五郎左衛門

御 届

米價高直ニ付市中其日稼之者ハ御救之儀向柳原町會所并筋違橋御門内建
添地於兩所晴雨共明後日廿五日ハ米錢渡方仕以。尤御救惣人數米錢渡高等
之儀ハ渡方相濟以上可申上以。依之此段御届申上以。以上○町會所一
件書留同。

申七月廿三日

主計頭殿附札

書面之趣此節之人氣ハ有之ハハ、何モ大道春モ取交
爲搗可申旨於町會所得与利解申聞願書下ケ可然ハ前文之趣當時之人氣ニ心
痛致し以。

七月

主計頭

申七月廿四日廻し濟。

印主計頭 同伊賀守
同出雲守 同五郎左衛門

印渡邊三郎助。正田榮次郎。岩淺三五
太夫印。佐藤十兵衛同。佐藤清五郎同。

加藤又左衛門同。松浦彌左衛門同。本
多彌太夫同。村井專右衛門同。

大道春屋共儀此度も定請負春屋共ニ春立差支無之ハ間願之趣モ不及
御沙汰願書差戻以積御廻しを以申上置以處右大道春行事共御番所ハ改
願出以由ニ多訴狀御渡ニ付得と取調以處此度之儀モ米錢半々之儀ニ多町
會所定請負春屋兩人ニ春立方無差支仕以積申立其段申渡尤右春屋共儀
定請負ニ相成以後初之臨時御救渡ニ付春屋道具類新規ニ多分相拵既ニ
春立相懸以處手操モ宜ク有之町會所圍内并筋違内建添地圍内共初摺立場
立米春立場御救渡場御救人溜所等夫々取建物致し筋違之方モ明地更ニ無
之町會所圍内此節明地ニ相成居以場所モ不辨利之場所ニ有之ハ間第一モ
大道春場可相渡地所無之尤差繰以ハ都合モ出來可仕以得共左様相成以
るモ又ハ右春立場新規ニ取立以儀ニ右入用凡五十兩程并一割減之外春
人共ハ一日壹人ニ付錢百文ツ、飯料相渡以儀ニ有之右之分定春屋之外全
無益費用相懸り以のミならず右春場ハ座人御用達手代附切罷在以儀ニ
以處御改革以來座人人數モ相減此節迎も引足兼以程之儀ニ有之以得モ右

大道春屋被仰渡いりて、殊更人數も不足仕、押多爲相勤い様こりて、混雜之時、節取締方之處、何共一同懸念仕、殊最初申上い通、定春屋共計こり、聊差支も無之、且入用も相懸り、座人共引足不申、手配等行届兼、旁願之趣御聞濟無之方可、然哉こ奉存い得共、被仰渡い御趣意も御座い間、此上再度御救被下い儀こも至い、其節取調方之次第も可有御座と奉存い間、先此度願之趣も不被及御沙汰方と奉存い。申七月

申八月廿四日加賀守殿に啓阿彌を以上ル。

印渡邊三郎助。正田榮次郎印。岩淺三五太夫印。佐藤十兵衛印。佐藤清五郎印。加藤又左衛門印。松浦彌左衛門印。本多彌太夫印。村井專右衛門印。

町會所御救相渡い箇所并人數相増い儀こ付申上い書付

印柳原主計頭 印筒井伊賀守

印田口五郎左衛門

米價高直こ付、市中其日稼之もの御救米錢、向柳原町會所園内こり貳ヶ所、筋違橋御門内建添地園内こり二ヶ所、都合四ヶ所こり一日凡五千人餘宛、先

月廿五日追渡方爲取計罷在い處、惣人こりて凡三十四万人餘之渡方こ付、日數も相掛りい儀之處、次第米價高直こ罷成、自然被下方後レいもの共も、殊更可及難儀間、向柳原町會所内の渡場壹ヶ所相増、都合五ヶ所こ仕、一日凡壹万人程ツ、渡方可被取計旨、支配向組之もの申渡い、依之申上置い。以上。

申八月

申九月十五日加賀守殿に啓阿彌を以上ル。

印渡邊三郎助。正田榮次郎印。岩淺三五太夫印。佐藤十兵衛印。佐藤清五郎印。加藤又左衛門印。松浦彌左衛門印。本多彌左衛門印。村井專右衛門印。

米價高直こ付、市中其日稼之者の御救渡方相濟い儀申上い書付

印柳原主計頭 印筒井伊賀守

御届 印田口五郎左衛門

人數三拾五万三百五十五人

此錢白米六千五百六十二石六斗四升五合。拾萬九千三百七十七貫四百十六文。

右も米價高直こ付、町も其日稼之者一統の御救米錢相渡い方こ可有御座旨

先達御内慮相伺、其節申上ハ通、三歳迄之小兒も相除、男壹人ハ白米五合、六十歳以上拾五歳以下之男并女壹人ハ白米三合之割を以、米錢半ト、日數十日分ツ、之積、七月廿五日ハ昨十四日迄ニ、向柳原町會所并筋違橋御門内建添地ニおゐて渡方相濟申ハ。依之此段申上ハ以上。九月十五日

(奉)申九月晦日加賀守殿ハ大澤彌三郎を以、伊賀守五郎左衛門立會上ニ之、同十月十八日御書取を以承付ハ様、御同人同人を以御下ケ。

臨時御救米錢渡方相濟ハ付町會所掛之者ハ御手當之儀申上ハ書付

書面申上ハ趣被御聞置、向後臨時御救渡等有ハ之ハ節、掛リ之者ハ御手當被下
方之儀も勸辨致し可取計旨、被仰渡、奉承知ハ。

申十月十八日

印筒井 伊賀守 印大草能登守

印田口五郎右衛門

米價高直ニ付、市中其日稼之者ハ御救米錢被下ハ積、御内意相伺ハ通、被仰渡ハ付、掛之者ハ申渡、當七月十三日ハ夫ト手配爲仕、向柳原町會所筋違橋御門内建添地ニおゐて、都合渡場所五ヶ所ニ、一日壹万人餘宛渡方爲仕ハ段、町會所仕法改正後始ル之臨時御救渡之儀ニ付、掛之者共ハ精々申渡、都ル是

迄之仕來ニ不拘改ル爲仕ハ處、前ニ米價高直ニ付、御救渡之節、諸失脚入用高

○下ケ札 壹見合、下ケ札之通此度之方莫太ニ入用高相減申ハ。右ニ去秋中仕法改正之

御趣意堅く相守、一同出精を盡し、無油斷吟味仕、骨折相勤ハ故之儀ニ、以後

之御取締ニも相成、且モ不少會所之益ニ有之、殊此度之儀ニ、日ト之渡人數モ

多く、其上去ル巳午年御救渡人數ニ見合、貳万人程相増ハ付、別ル取調向モ

手込ハ處、都ル日數少ニ渡方相濟、且今般之儀、改正後初ル之取扱ニ、多分入

用減ニ付、出格之譯を以、御勘定組頭ハ銀拾五枚、御勘定ハ金貳十兩宛、兩組與

力ハ金十八兩宛、同心ハ金八兩宛、町會所御下ケ金、利金溜之内を以、爲御手當

被下ハ積、其外御用達共以下之儀モ、先例夫ト手當差遣ハ儀ニ付、此度之儀モ、

右ニ見合、是又手當差遣ハ積申渡ハ。

右ニ前ニ臨時御救渡相濟ハ節、私共評議致、夫ト手當被下ハ旨、申渡ハ得共仕

法改正後始ル之儀ニ付、此段申上置ハ以上。申九月

下ケ札 壹

合金千三百拾七兩餘

是レ此度臨時御救渡ニ付、糊摺立貨銀御救渡場取立物其外諸失脚之分
天保四年右同斷之節
金四千五百七拾八兩餘

差引金三千二百六十一兩餘 此度之方減ス。
 同 金五千八百八拾三兩餘
 差引金三千八百六十六兩餘 此度之方減ス。

下ヶ札 貳

臨時御救渡相濟の節、御勘定組頭の銀七枚、別段銀五枚、御勘定方の銀十枚、別段金五兩、兩組與力の銀七枚、別段金五兩、同心は金千疋、別段金五百疋宛、爲御手當被下は旨、私共評議之上申渡は處、此度之儀、町會所去秋仕法改正後、始る之臨時御救渡、殊取縮も宜、諸失脚入用も格別相減は間、本文之通被下は旨評議仕、申渡は儀御座は。

申十月四日

臨時御救渡中骨折は付、御手當被下は段、伊賀守殿能登守殿五郎左衛門殿御書取、三郎助は御渡之旨、尤御禮ハ同人方申上は旨申聞は。

- 銀拾五枚
- 金貳十兩宛
- 金拾八兩宛
- 金八兩宛

御勘定組頭は
 吟味方改役 御勘定は
 兩組與力は

同心は

右は町會所臨時御救渡中骨折相勤は付、爲御手當被下之略外

天保七申年七月臨時御救一件

天保七申七月十二日

覺

米價高直に付、其日稼之者共御救被下は間、家族三歳迄を相除、名前年付等に至迄、別紙廉々相當致は分、成丈早々取調、支配限り人別書可差出旨、御掛り御役人方被仰渡は。尤場所柄宜鋪町々表店之者相除、裏店に文。表店住居之者に順は者は、是又相除、其日稼之者共は限り、取調可申段、情々被仰渡は間、別紙廉書之趣得と御心得、御支配限り當人共身柄差別御調違等無之様御取計可被成候、右は御調行届は次第、別紙人別雛形之通、半紙堅帳にて御支配限り合冊被成、來ル十六日迄之内、拙者共詰所へ銘々御差出可被成は。此段御組合限り早々御通達可被成下は。但、月行事持場所は、其最寄御同役は御調、御加印は御差出可被成は。

七月十二日

町會所
 年番肝煎

其日稼之者共取調方目當

一、棒手振其日稼之者。
 一、諸職人手間取こ出、其日稼こ多手間賃計こ多家内扶助之もの。
 一、道心者の詫鉢致、其日稼之者、但、尼僧之分相分い様、左之肩書こ御記可被成
 い。
 一、地主之内場所末こ多、纔之住居地面こ上り高も無之、其日稼こ罷出徳分計
 こ多家内扶持之者。
 一、其日稼家族之内、十六歳より已上男女掛り人こい共、人別雛形之通、何稼と
 申儀不洩様御書記可被成い。
 但、續合無之、同居而已こ多の相分らばい間、出居衆何稼と御認可被成い。
 一、店々御救被下い節、調落又も不相當之者、杯有之、御渡間際も相成、人別帳増
 減申立い向も儘有之、且御支配境隣町之分り、表店之者入交い町並身柄不同
 こ相成、當人共騒立、見込願等こ罷出、如何こ付、御支配最寄共、御同役こ多御打
 合、御書出可被成い。右御達申い。七月十三日

右雛形

一、何人暮

何の誰店 何稼誰申何歳 妻誰同 梓誰同 娘誰同

極老之分ハ稼名目こ不及。

一、何人暮

何町誰店 何稼誰申何十歳 何稼懸り人誰同 甥歟 姪歟

何人

何町誰店 何稼誰

一、獨身者

右何町 惣人数何十人

應思穀恩編

同、男何百人 女何百人

五日○天保七年六月雨ふる。○中此節冷氣こて、わはせを着る人多し。

二十二日○天保七年七月天氣よし。二十四日○中ふりの天氣之。風よく。

十二日○天保七年七月曇時々雨。○中此節米直段百文付五合五勺。夜山吹よて御救

米之義こ付寄合。夜更かへる。

十六日天氣よし。あつし。米高直こ付御救調書上出來、今日納之處、夕方出來こ
付明日納る。

十八日朝○中大風雨。雉子町火之見吹落す。○中今日大風雨、所々家を倒し、怪我
人等有之由。

十九日天氣よし。白米小賣此節四合五勺なり。

二十一日。大川此節迄満水。

二十六日天氣よし。此節御沙汰ニ付、白米百文ニ五合ニ下る。

十四日○天保七年八月天氣よし。風。朝支配米高直之御救付、柳原初藏へ出る。

三日○天保七年九月天氣よし。會所へ出る。夜山吹よみて明田へ御救之儀ニ付談。平田

小藤橋本木村氏同所へ寄合、井上様へ森川儀平出。

四日天氣よし。筋違建添地へ出る。夕方々頭殿手當之儀明田氏支配御救調之

事ニ付、山吹へ行、夜四ツ歸る。

九日重陽御節句、建添地へ出る。

十三日雨ふる。今日非番之處、會所々文通ニ付、書物手傳ひよいつる。會所臨時

御救明十四日こてのこらす御渡濟。

十四日天氣よし。筋違建添地へ出、會所へ廻る。明田氏へ行、暮前かへる。

十二日○天保七年十月南へ御呼出、小雨。御救中年番被仰付付、爲御褒美銀壹枚被

下、於町會所御手當銀三枚被下付。夕方會所へ廻る。

十三日天氣よし。朝八丁堀へ御禮廻行、會所へ出、同役一同御勘定方へ御禮

廻行、雜司谷へ廻る。關岡柳川鈴木木村同道ニ

——齋藤月岑日記

御救米頂戴人數書付

人數三拾四万三千二百四拾六人

右モ此度於町會所市中輕き者ノ御救被下付惣人數ニ御座付。尤去々午年御

救頂戴致付人數三拾三万三千八百廿七人ノ即合付へハ九千四百拾九人相

増申付。

一、男壹人

白米二升五合
錢四百十六文。

一、同拾四歲以下
六十歲以上之者

白米壹升五合
錢二百四十八文。

一、女壹人

同斷。

但、三歲以下之小兒モ相除付事。

右モ先日御咄し御座付ニ付、此段申上付。以上。

申八月

町年寄

一、十二月中二度目御救米被下付事。

——應思穀恩編

公儀ニてハ、御府内之貧人共三拾万人餘へ、柳原御藏ニおゐて、男へ米五升錢

五百文、女小供へ米三升錢三百文宛、御救被下付ニ付、毎日町々貧人共、其最寄

霸都時代ノ救濟

四五三

こ大勢組合旗ヲ建、御藏前へ爲相詰御救米錢被下レ義莫大之事ニ有之レ由、
扱又御府内富家之者共よりも、分限ニ應し、金穀夫々ヲ救指出ルもの數多有
之、貧人共飢饉之難ヲ免レ故、天明年中凶荒之度ハ、貧人共富家穀屋等へ押
入、亂妨狼籍致ルものも有之レへとも、此度之義ハ、御府内さレのしき事も相
聞へ不申ル。

— 守靜堂雜錄

おほやけより命ありて、裏店住の町人男子ニ白米貳升五合錢四百貳拾四文、
老幼婦女の類ハ白米壹升五合錢貳百四十八文たまはりき。江戸中まべて三
拾貳万二千人餘マて、米五千石餘錢拾三万貳千貫許といへり。裏店住ニても
下女下男弟子などあるものハ、たまはぶす、表住の者ハ下女下男弟子など
のなき工商ニても賜事なし。

— 松屋筆記

〔參考〕 寄特者

火水風災雜輯ニ據レバ、

七月二十日淺草花川戸山谷駒形邊迄一圓
一、蕎麥壹斗ツ、井壹人前百文、子供五十文ツ、

松屋四郎兵衛

深川堀川町十四ヶ町外三組
一、壹人前金壹朱ツ、
但シ六十以上金三朱ツ。

幸崎屋
(以下略)

六、救米給賜(再度)

十一月十八日ヨリ翌八年四月廿一日ニ至ル。給賜人員四

十万九千百六十四人。白米一万五千三百五十九石二斗八升。

(朱)天保七申年十一月四日加賀守殿ハ大澤彌三郎を以伊賀守方進達致しル處、御同人
御一覽之上、市中之氣請如何可有之哉カ、大澤彌三郎を以飛驒守ハ被レ仰聞ル付、掛
紙之通文段相直し、翌五日同人を以伊賀守上ル處、書面之趣被レ御聞置ル間、渡方可取
計旨、彌三郎申聞ル事。

印部筑金三郎 正田榮次郎印
佐藤十兵衛印 福田所左衛門印
田中新五兵衛印 本多彌太夫印
村井專右衛門印 加藤又左衛門印
松浦彌左衛門印

米價高直ニ付其日稼之レの共ハ再度御救米錢被下ル儀申上ル書付

印筒井伊賀守 印大草能登守
印明樂飛驒守 印田口五郎左衛門

米價高直ニ付、市中其日稼之レの及難儀ハ、付、當七月中カ九月中迄、一統ハ
御救被下ル處、此節も打續米價追テ相進ミ付、其日稼之レ之内、元手錢
も盡果、飢も可及程のものハ、神田佐久間町ハ御救小屋補理入置ル積、當
十月中申上置ル處、右小屋ハ入ル程も無之、其日稼之レの、是又御救筋無ク
懸紙

之いゝるも難相成し間、右之をも一統に、尙又再度御救米錢相渡し方、可有御座儀と奉存し間、其段支配向組之ものを申渡、尤先例男壹人の一日米五合、六十歳以上十五歳以下之分并女壹人の同三合ヅ、之割合を以、初度御救之通米錢半々之積、男壹人の米貳合五勺、當時市中白米小賣相場百文に付四合之割合を以、錢六十文、六十歳以上十五歳以下之者并女壹人の米壹合五勺錢三十六文ヅ、日割十日分差遣し様可仕奉存し、依之、此段申上置し、以上

申十一月

有之い方と奉存し。尤初度御救之節も、米錢半々之割合を以、被下置し得共、此節之場合、之い、皆米を被下置し方、別る御仁惠之筋あり、且一體之并にも相成可申哉。に付、前々之割合を以、先例之通男壹人の一日米五合、六拾歳以上拾五歳以下之分并女壹人の同三合ッ、之割合を以、日數十日分差遣し様可仕奉存し、依之。

申十一月十六日加賀守殿の大澤彌三郎を以、田口五郎左衛門上之。

印都筑金三郎。正田榮次郎印。佐藤十兵衛印。福田所左衛門印。田中新五兵衛印。本多彌太夫印。村井專右衛門印。加藤又左衛門印。松浦彌左衛門印。

米價引續高直に付町會所御救米再度渡之儀申上し書付

御届
印筒井伊賀守 印大草能登守
印明樂飛驒守 印田口五郎左衛門

米價引續高直に付、市中其日稼之者一統及難儀に付、再度御救米被下し積申上、其段支配向組之者に申渡、爲取計し處、市中人別取調、初摺立立米春立共、追々出來仕し間、明後十八日、晴雨共、向柳原町會所おゐて御救米相渡申し、尤惣人數米高等之儀も、渡方相濟し上可申上し、依之、此段申上置し、以上。

十一月十六日

申十一月廿日早濟。

印伊賀守 印能登守 印都筑金三郎。正田榮次郎印。佐藤十兵衛印。福田所左衛門印。田中新五兵衛印。本多彌太夫印。村井專右衛門印。加藤又左衛門印。松浦彌左衛門印。

今般再度御救米被下しに付、大道春屋共、右御救米之内春立申度旨相願しに付、勘辨仕し處、會所定春屋共、春立させし得も、九分減る外雜費も無之、大道春屋共之方も、是迄之振合壹割減之外、壹人に付百文ッ、賃錢相渡し儀

こ有之_レ得共此節米價相進_ニ折柄_ニ付定春屋同様九分減之積を以別段
こ賃錢等_ハ不相渡_レ積相心得御救渡米之内_ニ玄米千五百石春立方之儀町會
所_ニ呼出し可申渡哉_ト奉存_ル依之相伺申_ル申十一月
申十一月廿四日五郎左衛門_ハ出_ル之。

初有高七万八千貳百三十石餘。

此玄米三万千貳百八十壹石餘。但、四合摺之積。

白米_ニノ貳万八千四百六十五石餘。但、春減九分減之積。

内

此度再度御救可被_レ下凡人數三拾五万人程。

○此白米壹万三千三百石餘。

御救小屋入人數五千人程。

○此白米貳千三百拾石。但、當十二月廿四日_ハ來西四月晦日迄_ハ百五十四日分。

定式御救渡

○白米千八百四十八石餘。但、前同斷。

是_レ此節日々願出_ル目當を以凡積致_ル處、如_レ斯。

○三口
合白米壹万七千四百五拾八石餘。

差引
□白米壹万七千七石餘 殘高

玄米貳千五百三十貳石餘。

内、玄米七百四十壹石餘。但、當秋山本大膳引受納之分

□此白米貳千三百四石餘。

貳口
合白米壹万三千三百拾壹石餘。

此分再三御救渡_ニ相成_ル得_ル、平日御救
并小屋入_ル之者_ハ被_レ下_ル飯米無_レ之_ル事。

酉四月廿二日越前守殿_ハ封_シル_ル林阿彌を以伊賀守上_ル。

小印渡邊三郎助。正田榮次郎。岩淺三

五太夫。佐藤十兵衛。福田所左衛門小

印。田中新五兵衛同。松村忠四郎同。中

村又藏同。高橋鐵次郎同。

米價高直_ニ付市中其日稼之_レの_ハ再度御救米渡方相濟_ル儀申上_ル書
付

小印筒井伊賀守 小印大草能登守

御届 小印明樂飛驒守 小印田口五郎左衛門

人數四拾万九千百六拾四人

此白米壹万五千三百五拾九石貳斗八升。

右米價高直ニ付、市中其日稼之ものは再度御救米渡方之儀、去申十一月中加賀守殿○大久保忠真に申上置ハ通、三歳迄之小兒を相除、男壹人ニ付白米五合ツ、六拾歳以上拾五歳以下之男并女壹人ニ付同三合ツ、之割を以、日數十分、去申十一月十八日方昨廿一日迄、向柳原町會所ニおゐて渡方相濟申ハ依之此段申上ハ以上。四月廿二日

去申年初度御救渡之節、會所改正初ル之儀ニも有之、諸入用格別相減ハ趣を以、左之通御手當として被下置ハ

銀拾五枚 御勘定組頭。 金貳拾兩 吟味方改役。御勘定方。
金拾八兩 兩御組與力。 金八兩 兩御組同心。

西參五月三日

臨時御救渡中骨折ハ付、御手當被下ハ段伊賀守殿能登守殿、五郎左衛門殿御書取、三郎助に御渡之旨、尤御禮と同人方申上ハ旨申聞ハ。

銀七枚 別段銀七枚

都筑金三郎

銀拾枚 別段金拾三兩宛
銀八枚 別段金拾兩宛
銀七枚 別段金拾兩宛
金千疋 別段金五兩宛

正田榮次郎。佐藤十兵衛。
福田所左衛門。田中新五兵衛。松村忠四郎。

中村又藏。高橋鐵次郎。
御普請役壹人。同見習貳人。兩組同心十四人。

右ニ於町會所臨時再度御救渡中骨折相勤ハ付、御手當として被下ハ之。○此外

——天保七年再度御救一件

七、天保八年度賜米

三月、二万俵ヲ賑給シ、五月再ヒ二万俵ヲ賑給ス。

天保八酉年三月

御勘定奉行ハ

去申年○天保七年諸國違作ニ付るも、米穀其外共拂底ニ多、御府内市中末ニ之も其及難儀ハ付、厚御世話も有之ハ得共、次第ニ陷困窮ハ者不少趣ニ付、御救として淺草御藏ニおゐて、御米貳万俵被下ハ間、町年寄共ハ申渡、右御米爲請取、末ニ之者共ハ早ニ割渡ハ様可被取計ハ。尤御米請取方之儀、御勘定奉行ハ可被談ハ。

右之通町奉行ハ相達ハ間、可被得其意ハ。

——御觸書

天保八酉年五月十日水野越前守殿筒井伊賀守に御渡御書付寫。

幕府時代ノ救濟

町奉行の

去申年諸國違作に付るも、米穀其外共拂底なる、御府内市中末之との及難儀いとの不少趣に付、御救として淺草御藏におゐて、御米貳万俵被下、末之とのに割渡去月中申渡、右御米町年寄共、爲受取割渡遣い處、此節之様子も多も、當年諸國共麥作も出來方宜、取入穀數も多可有之哉之趣相聞、自米價も追引下ケ可申哉に付、得共、兎角食物乏く、差當り末之との及難儀いとの多分之趣に付、猶又爲御救筋淺草御藏におゐて、御米貳万俵被下、間、町之名主共受取、各組之をも差添、末之とのに割渡遣い様申渡、尤右米受取方之儀も、委細御勘定奉行の申談、諸事差支無之様可被取計い。五月

——天保撰要類集○天保集成、御觸書同。

天保八酉年六月

町奉行の

去申年諸國違作に付るも、米穀其外拂底なる、御府内市中末之との共及難儀い付、厚御世話も有之に付、得共、次第に陷困窮い者不少趣に付、御救として淺草御藏におゐて、御米貳万俵被下、間、町年寄共の申渡、右御米爲請取、末之

者共の早に割渡い様可被取計い。尤御米請取方之儀、御勘定奉行可被談い。

——天保集成

（朱）天保八酉年

谷村源左衛門様 中島嘉右衛門様

原善左衛門 仁杉五郎左衛門

以手紙得御意い。然も此度町方末之との之内、稼人病氣、殊に家族も多、其日之食事にも差支いとの、且病氣に無之に付、極老なる壯年之稼無之との、并幼年なる兩親死失致し、見繼人無之との、或も稼人死失、家内女子供計なる、稼方無之程のとの共、町方買持錢之内を以、幼年并女子なるも、店主之との壹人、に付錢壹貫文宛、家族之分も四歳以上之との、同六百文宛被下、に付、一番組方貳拾壹番組番外并月行事持共、其最寄世話番年番名主共、今日此方於御役所割渡、明日小前之との、組合限り世話番年番之内なる立合割渡い、に付、右場所三廻り役者、廻り先々見廻りい様被申渡い間、其御方も御同様三廻り役之とのに、此方廻り役之との申合、見廻りい様御申渡有之に様存い。此段及御懸合い。以上。四月廿一日

原善左衛門様 仁杉五郎左衛門様

谷村源左衛門 中島嘉右衛門

御手紙致拜見。然も此度町方末々之の内稼人病氣殊ニ家族も多其日之食事よも差支ひ之、且病氣ニ無之共極老ニ多壯年之稼人無之之、并幼年ニ多兩親死失い多し、見繼人無之之、或も稼人死失、家内女子供計ニ多稼方無之程之之共、町方買持錢之内を以、幼年并女子ニ多も、店主之もの壹人ニ付錢壹貫文宛家族之分ハ四歳以上之之、同六百文宛被下ニ付壹番組ハ貳拾壹番組番外并、月行事持共、其最寄世話番年番名主共、今日其於御役所割渡、明日小前之之、組合限り世話番之内ニ多立合割渡ニ付、右場所三廻り役之者、廻先方見廻し様被御申渡ニ付、此方も御同様三廻り役之もの、其御方廻り役之もの申合、見廻し様可申渡旨、被抑越し紙面之趣承知致し。右御報如斯御座し。以上。四月廿一日

三月廿四日夜四時來ル。

中島嘉右衛門様

原善左衛門
仁杉五郎左衛門

以手紙得御意。此度別段爲御救市中末々之もの、淺草御藏御米ニ多貳万俵被下置しニ付、壹番組ハ貳拾壹番組番外貳ヶ所名主共并月行事、右御米今日割渡し間、名主銘々支配限ニ多、月行事持之場所を組合名主立合、小前

之ものに明日割渡し様被仰渡、右割渡し場所見廻として、三廻役之もの其外差加、別紙場所割之通見廻し様被申渡し間、其御組方も壹人ツ、立合同心中壹人ツ、御觸可被成。依之及御掛合。以上。三月廿四日

追多場所參着之儀、六半時之積りに有之。

米割渡場見廻り場所割

- 一、壹番組、貳番組町々 右ニ年番下役之内壹人。
- 一、拾壹番組、拾貳番組町々 右ニ三廻り之内壹人。
- 一、三番組町々 右同斷壹人。
- 一、貳拾番組、新吉原町々 右同斷壹人。
- 一、拾三番組町々 右同斷壹人。
- 一、拾四番組町々 右同斷壹人。
- 一、四番組、五番組、七番組町々 右ニ年番下役之内壹人。
- 一、六番組、八番組町々 右同斷壹人。
- 一、拾五番組町々 右ニ三廻り之内壹人。
- 一、貳拾番組町々 右同斷壹人。

- 一、拾番組町々 右同斷壹人
 - 一、九番組拾九番組品川門前地町々 右同斷壹人
 - 一、拾七番組町々 右の本所方下役之内壹人
 - 一、拾六番組拾八番組町々 右同斷壹人
- 西三月廿六日田中仲太を以上ル。

御救米渡し場所町々見廻し儀申上し書付

年寄下役 三廻り役 本所方下役

此度市中其日稼困窮之をの共、爲御救御米被下置、昨廿五日名主銘々支配限并月行事持之場所を、組合名主割渡しに付、右町々見廻し處、御米壹人別割渡方行届、末々之をの一同難有頂戴仕し趣申聞し。依之申上し。以上。

- 三月廿六日
- 年寄下役 大苜喜祖右衛門 吉澤久太夫 戸田儀左衛門
 - 向 吉川源次郎 高木熊次郎 平野平三郎
 - 隱密廻 片山善八
 - 向 相場半左衛門

- 定廻 豊田礒右衛門 山本兵太夫 高部治部左衛門
- 向 岡本三左衛門 平野勝五郎 小林藤太郎
- 臨時廻 桑野平九郎 片山伊左衛門 持田勝助
- 向 鈴木定八 大八木四郎三郎
- 石澤又助 吉田武右衛門 小倉朝五郎
- 安原鐵三郎 岡本三郎
- 本所方下役 神田武八 片山門左衛門
- 向 宍戸郷藏 川口万右衛門

御救米渡し場所町々見廻し儀申上し書付

年番下役 三廻り役 本所方下役

此度市中其日稼困窮之者共、爲御救御米被下置、昨廿五日名主銘々支配限并月行事持之場所を、組合名主立合割渡しに付、右町々見廻し處、御米壹人別割渡方行届、末々之をの一同難有頂戴仕し趣申聞し。依之申上し。以上。

三月廿六日

雙方年番下役
六人名前

隱密廻り
二人同

定廻り
六人同

臨時廻り
十人同

本所方下役
四人同

谷村源左衛門様 中島嘉右衛門様

原善左衛門 仁杉五郎左衛門

以手紙得御意。然も此度市中末々之ものに御救として、猶又御米貳万俵被下し。付、淺草御藏に名主共罷出、直々受取し様被仰渡し間、來ル廿四日廿五日兩日、相渡りし。付、爲取締年番方下役之内、三人ッ、双方六人罷出し様、各様に拙者共御掛合可申旨被申渡し。尤明ヶ六時分相渡りし。付、刻限遲滯無之様、御勘定奉行衆も達有之、且雨天日送、小雨之分、相渡りし積。付、其心得。多し出役有之。様御申渡之様存し。此段得御意。以上。五月廿一日

原善左衛門様 仁杉五郎左衛門様

谷村源左衛門 中島嘉右衛門

御手紙致拜見。然も此度市中末々之ものに御救として、尙又御米貳万俵被下し。付、淺草御藏に名主共罷出、直々受取し様被仰渡し間、來ル廿四日廿五日兩日、相渡りし。付、爲取締年番方下役之内、三人ッ、双方六人罷出し様、其御頭様被仰渡し趣被仰越奉承知し。尤明ヶ六時分相渡りし。付、刻限遲滯無之。承知可被下し。以上。

追多下役儀、當時御人少。付、壹人差出、外兩人を役掛之内、差出し積に付、右様御承知可被下し。以上。

此度市中末々之ものに御救として、御米被下し。付、於淺草御藏名主共請取し。付、明廿四日明後廿五日、爲取締明ヶ七半時分同所に出役し。向方申合可被相勤し。依之相達し。以上。

但、刻限遲滯不致様可被出し。

五月廿三日

中島嘉右衛門 谷村源左衛門

明廿四日

吉澤久太 夫殿
内藤清左衛門殿
中村武左衛門殿

奉承知し。
奉承知し。
奉承知し。

明後廿五日

戸田儀左衛門殿
尾上惣一郎殿
吉澤仙四郎殿

奉承知し。
奉承知し。
奉承知し。

谷村源左衛門様 中島嘉右衛門様

原善左衛門 仁杉五郎左衛門

以手紙得御意。然も此度市中末々之者に御救として、猶又御米并錢被下置

いこ付、壹番組、貳拾壹番組番外貳ヶ所、名主共井月行事持場所之分を、組合名主共の錢を昨日今日割渡相濟し處、小前之者共の銘と支配限、月行事持場所を組合名主立合割渡し儀を、御米渡濟之上、御米錢一時に割渡し積る、明後廿六日割渡し様被申渡、當三月之通右割渡場所見廻をして、年番下役三廻り役本所方下役の別紙場所割之通見廻し様被申渡し間、其御組方も壹人宛立合、同心中壹人宛御觸可被成し、然ル處御米今日雨天に付相渡不申、日送相成し間、割渡し日限も右に准し、日送相成し間、日限之儀を、駈と難取極し得共、先ッ來ル廿七日之積に有之し、尤前日猶又御達可申し得共、内觸之儀御申渡被置し様致し度、此段得御意し、以上、五月廿四日

追ふ見廻り場所參着之儀を、朝六時刻限無遲滯罷出は積有之し、以上。

御救米錢割渡場所見廻り割

- 一、壹番組、貳番組町々 年番下役之内 双方貳人
- 一、四番組、五番組、七番組町々 右同斷 貳人
- 一、六番組、八番組町々 右同斷 貳人
- 一、拾壹番、拾貳番町々 三廻り役之内 双方貳人

一、三番組

- 一、貳拾壹番組、新吉原町々 右同斷 貳人
- 一、拾三番組町々 右同斷 貳人
- 一、拾四番組町々 右同斷 貳人
- 一、拾五番組町々 右同斷 貳人
- 一、貳拾番組町々 右同斷 貳人
- 一、拾番組町々 右同斷 貳人
- 一、九番組、拾九番組、品川門前地町々 右同斷 貳人
- 一、拾七番組町々 本所方下役之内 双方貳人
- 一、拾六番組、拾九番組 右同斷 貳人

原善左衛門様 仁杉五郎左衛門様 谷村源左衛門 中島嘉右衛門

御手紙致拜見し、然も此度市中末之の御救として、尙又御米并錢被下置しこ付、一番組、二十壹番組番外二ヶ所名主共井月行事持場所之分を、組合名主共の錢を昨日今日割渡相濟し處、小前之の共の銘と支配限、月行事持場所を組合名主立合割渡し儀を、御米渡濟之上、御米錢一時に割渡し

積こゝ明後廿六日割渡の様被仰渡、當三月之通右割渡場所見廻りとして、年番下役三廻り役本所方下役に、別紙場所割之通見廻り様被仰渡の間、此方方も立合同心壹人宛可相觸り旨致承知し。然處御米今日雨天に付相渡不申、日送相成り間割渡日限も右に准し、日送相成り付、日限之儀を睨と難御取極、先ッ來ル廿七日之積、尤前日尙又御達被遣ひ得共、内觸之儀被仰越御紙面之趣致承知し。右御報如斯御座し。以上。五月廿四日

追ふ見廻り場所參着之儀も、明ヶ六時刻限に無遲滯罷出ひ積之旨、致承知候。

此度市中末之者の御救として、御米は錢被下置しに付、壹番組分貳拾壹番組番外井月行事持之分共、明後廿七日支配限制割渡しに付、月行事持之場所も、組合名主立合割渡しに付、同日明ヶ六時場所割之通、各向方廻り之者申合、見廻可被申し、尤廿七日之積こそ共、睨と取極不申し間、猶明日相達可申し、爲心得場所割書付相達置申し。以上。五月廿五日

隱密廻
定廻
臨時廻
同心中

谷村源左衛門
中島嘉右衛門

平松喜太夫様
大芦喜祖右衛門様
三井源十郎様

日向野與太夫
堀口六左衛門
古川源次郎

以手紙得御意し。然も御救米錢、彌明廿七日町々名主共方こゝ割渡相成しに付、右見廻り出役此方こゝも、壹番組貳番組の高木熊次郎、四番組五番組七番組に古川源次郎、六番組八番組に中田林五郎出役いゝし間、宜被仰合可被下し。其御方御出役御名前承知いゝし度、且人足之儀も、當三月中御救割渡出役いゝし通、御取計可被成し。此段得御意し。以上。五月廿六日

尙々拾壹番組拾貳番組に佐久間傳藏、三番組に平野平三郎、拾五番組に笹岡源左衛門出役いゝし。尤右場所此方こゝも廻り役之もの出役いゝし積之處、差支有之に付、同役共之内こゝ罷出儀に御座し間、御承知迄に此段も得御意し。

原善左衛門様 仁杉五郎左衛門様 谷村源左衛門 中島嘉右衛門

御手紙致拜見し。然も一昨廿四日御掛合有之に御救米錢、今日こゝも名主共一同受取濟に相成り間、彌明廿七日南北町々名主共方こゝ割渡相成り間、右見廻出役相觸可申旨被仰越、致承知し。右御報如斯御座し。以上。

五月廿六日

佐野幾右衛門様
神田武八様
片山門左衛門様

谷村源左衛門
中島嘉右衛門

此度市中末之者の御救として、御米并錢被下置し、付、壹番組方貳拾壹番組番外并月行事持之分共、明廿七日支配限制割渡し、付、月行事持之場所も、組合名主立合割渡し、付、同日明ヶ六時別紙場所割之通、各向方同役申合、見廻可被申し、依之相達し、以上。五月廿六日

追ふ受書并場所割出役名前共可被差出也。

隱密廻
定廻
臨時廻
同心中

谷村源左衛門
中島嘉右衛門

御救米錢彌明廿七日町々名主共方、割渡し、付、昨廿五日達置し、場所割之通、各向方廻之者申合、見廻可被申し、依之相達し、以上。

但、刻限之儀も、當三月中之通可被心得也。

五月廿六日

追ふ受書可被差出也。以上。

年番取扱

八、救小屋(府内) 神田佐久間町壹町目地先、花房町地先、柳原土手ナダン等二
廿一棟ヲ建ツ。天保七年十月廿三日取建、八年十月廿八日撤却。小屋入人員五千
八百餘人。

米價高直ニ付無宿病人行倒し者多人數有之也。付手當之儀取調奉伺
し書付

此節御府内町々住還るる行倒しもの數多御座し、付、町役人共召連訴出
間、夫々溜の遣、藥用之儀申付、平年之振合取調し處、當四月、此節迄男女七十
四人、不歩行る倒しもの有之、平常年柄よりも過人數御座し、右も全當年不
季候も、米價追々高價ニ相成、市中裏々ニ住居しもの共、殊之外難澁之折柄
も、取續も難相成、別る鰥寡孤獨之もの共儀も、終こそ物費ニ相成し哉、其外
違作之國柄も爲稼御當地に罷出する後、年柄不宜故、稼も勿論、奉公濟も不相
成、無宿も可相成、歎ケ敷次第ニ付、評議仕し處、去ル巳年違作之國々より、御
當地に妻子召連出し、その共、御當地に、出物貫致し歩行し、内、病氣付往還の倒

相果いゝの多分有之いゝ付、其段申上、穢多頭彈左衛門に申渡、同人圍内の假小屋取建、手下之をの共相廻、不歩行之をの又も病氣こゝ往還に倒居いゝの相尋、違作之國を出いゝの共も、圍内の連參り、右小屋に入置、十ヶ月之間介抱手當いゝるし、病氣全快いゝるし、身分片付之儀取計仕いゝ儀に御座いゝ處、當年之儀を在方之をのをも、御當地之窮民共別多困窮に迫、行倒いゝのをも御座いゝ間、御府内之をのをも尙更、在方之をのにも御座いゝるも、給續兼、御當地に出いゝと申をの共迄も、手當等行届いゝ様致し遣度奉存いゝ、依之當十月、酉七月迄十ヶ月之間、都る去ル已年之振合之通こゝ、扶持米之儀を病人之儀に付、男一日三合、女子貳合當テ之積相渡いゝ處、全快之をの有之、身分片付等取調いゝ内も、小屋に差置いゝ間、病人と違ひ、三合貳合之當こゝをも引足不申いゝ付、増扶持之儀申上、男五合女子貳合五勺之積相渡申いゝ、右之通介抱手當致し遣いゝ、御大禮之被仰出も有之、莫大之御救筋下ゝこ迄行届いゝ様相成いゝ、諸人見聞およひいゝをの共、厚御仁惠之程感伏可仕奉存いゝ、則假小屋取建いゝ御入用高取調いゝ處、凡申立いゝ間、吟味減も申渡いゝ處、嚴敷積立いゝ儀に付、此上減方無御座、由申立、依之去ル已年申上書寫井、仕様繪圖面共相添、此段奉伺いゝ、申^{○天保}七年九月

當年違作之國柄有之無宿多人數御當地に徘徊致しいゝ者共之内不歩行之者手當之儀取調奉伺いゝ書付

町奉行

此節支配町に往還に病人體こゝる行倒いゝの訴有之いゝ處、右を平年か人數多に付、取調いゝ處、當年違作之國柄こゝるも、右地に住居難相成、可便方無之、無宿に相成、御當地に罷出、所々立廻物貫致し罷在いゝ得共、給續兼、終こゝる行倒いゝ哉に相聞いゝ間、評議仕いゝ處、五十年以前天明四辰年凶年之砌、無宿多人數御當地に徘徊致し、右之内こゝる病人こゝる不行歩之者有之いゝ間、介抱手當之儀穢多頭彈左衛門に申渡、同年三月、十二月迄十ヶ月、日々彈左衛門井手代共、非人足召連、手分致し召捕、圍内に明家有之、右に差置、介抱手當爲致、此人數七百貳拾貳人、外に食事等焚出定掛人足共扶持米石高百十八石三斗五升、凡平均七斗七合九勺替之積こゝる、此金百六拾七兩永百八十四文六歩餘、諸入用高金八拾九兩壹分永百五十文三步、銀十六貫五百七十四文三分八厘、惣べ金五百三拾貳兩三分永五十三文四歩相掛いゝ處、右を人數之多少こゝる、増減可有之いゝ得共、素か病人之事故、全快迄之處を、男を米三合ッ、女

て二合之當こ多、粥よいたし爲給ひ積、且右御入用出方先例無御座の間、都
 多溜入用を見合、書上の様申渡、右之振合こ米金等日、請取相渡ひ先例御
 座ひ得共、去ル文化三寅年、同十二亥年兩御役所焼失之節、書物類焼失仕、耽
 と書留無御座ひ得共、此度之儀も右例こ見合、天明度之通、召捕ひ節、手當之
 儀、彈左衛門に相尋ひ處、當時園内こ明家無之の間、手下非人頭居小屋等相
 調ひ得共、孰も場狭こ有之、手當難行届、無宿不歩行之者、手當之儀申付ひ
 ひ、園内こ南北十三間餘、東西六間程之明地も有之の間、右之内に間口八
 間、奥行二間半之小屋一ヶ所、番人詰所九尺壹間、同所續壹棟こ湯茶藥煎所
 九尺こ壹間半之所、壹ヶ所、假家補理ひ、凡百人程相詰、左ひ、手當も
 行届可申旨申立ひ間、入用之儀相尋ひ處、小屋場其外一式代金貳拾兩貳分
 貳朱錢三百四拾文こ多出來仕ひ旨申立ひ間、仕様内譯帳取調ひ處、不相當
 之儀相見不申ひ間、書面之入用高こ多申付、代金を御役所御入用金之内を
 以相渡、此節、來午年○天保五年出來秋八月頃迄、凡十ヶ月程之間、右辰年之振
 合こ申付、手分致し爲相廻、無宿こ多不歩行之者見當ひ、相尋、全國元違
 作こ多給續兼、無餘儀御當地に罷越ひ譯柄等、申立無相違相聞ひ、彈左

衛門召捕申立ひ、直こ介抱預手當申付、其後生夫こも相成ひ、其領
 主地頭相尋、引渡可申、左も無之、其身片付方申立ひ、其通取計ひ様仕ひ
 ひ、莫大之御救筋、下こ至迄行届ひ様相成ひ、諸人見聞およひ者
 共、厚御仁惠之程感伏可仕奉存ひ間、右之通取計可申哉、人數之儀も、日こ増
 減可有之、凡之高こ多も取調難申上ひ、尤伺之通被仰渡ひ、無宿共、被
 下ひ米金之儀も、月こ溜其外入用米金受取方之外、別手形こ多請取ひ様可
 仕ひ哉、依之仕様内譯帳繪圖面相添、此段奉伺ひ以上

巳○天保四年十一月

榊原主計頭 筒井伊賀守

斃者人數書

榊原主計頭
筒井伊賀守

- 一、天保六年正月分
- 一、右同斷二月分
- 一、右同斷三月分
- 一、天保六年三月分
- 一、右同斷四月分
- 一、右同斷五月分
- 一、右同斷六月分
- 一、右同斷

- 男九人、但、女無之
- 男拾五人、但、女無之
- 男拾人、但、女無之
- 男五人、但、女無之
- 男五人、但、女無之
- 男三人、但、女無之

天保六未年七月分

一斃者人數高

右同斷閏七月分

一右同斷

右同斷八月分

一右同斷

右同斷九月分

一右同斷

天保六未年十月分

一斃者人數高

右同斷十一月分掛

一右同斷

右同斷十二月分

一右同斷

天保六未年正月分

右者天保六未年正月分

十二月迄斃者人數高

取調處書面之通御座

以上 申二月

一一年番取扱

男四人。但、女無之。

男五人。但、女無之。

男九人。但、女無之。

男五人。但、女無之。

男九人。但、女無之。

男拾八人。但、女無之。

男貳拾三人。女壹人。

都合貳拾四人。

男百貳拾人。

女貳拾人。

天保六未年正月分

右者天保六未年正月分

十二月迄斃者人數高

取調處書面之通御座

以上 申二月

一一年番取扱

男四人。但、女無之。

男五人。但、女無之。

男九人。但、女無之。

男五人。但、女無之。

男九人。但、女無之。

男拾八人。但、女無之。

男貳拾三人。女壹人。

都合貳拾四人。

男百貳拾人。

女貳拾人。

天保六未年正月分

右者天保六未年正月分

十二月迄斃者人數高

取調處書面之通御座

以上 申二月

一一年番取扱

男四人。但、女無之。

男五人。但、女無之。

男九人。但、女無之。

男五人。但、女無之。

男九人。但、女無之。

男拾八人。但、女無之。

男貳拾三人。女壹人。

都合貳拾四人。

男百貳拾人。

女貳拾人。

天保六未年正月分

右者天保六未年正月分

十二月迄斃者人數高

取調處書面之通御座

以上 申二月

一一年番取扱

男四人。但、女無之。

男五人。但、女無之。

男九人。但、女無之。

男五人。但、女無之。

男九人。但、女無之。

男拾八人。但、女無之。

男貳拾三人。女壹人。

都合貳拾四人。

男百貳拾人。

女貳拾人。

天保六未年正月分

右者天保六未年正月分

十二月迄斃者人數高

取調處書面之通御座

以上 申二月

一一年番取扱

男四人。但、女無之。

被仰渡之事

伊賀守 能登守

飛驒守 五郎左衛門

波邊三郎助

佐藤清五郎

正田榮次郎印

佐藤十兵衛印

本多彌太夫印

村井專右衛門

加藤又左衛門印

松浦彌左衛門印

書面市中御救之儀

付年番與力心附之趣評議仕申上

此節市中

行倒

もの多有之

年番方申立

趣小屋被建

御救方有

之方

可有之哉

猶

評議可仕旨御談

付再應勘辨仕

被仰渡之事

伊賀守 能登守

飛驒守 五郎左衛門

波邊三郎助

佐藤清五郎

正田榮次郎印

佐藤十兵衛印

本多彌太夫印

村井專右衛門

加藤又左衛門印

松浦彌左衛門印

書面市中御救之儀

付年番與力心附之趣評議仕申上

此節市中

行倒

もの多有之

年番方申立

趣小屋被建

御救方有

之方

可有之哉

猶

評議可仕旨御談

付再應勘辨仕

代金を町會所可受取之趣に有之に得共此節會所有金も少く既よ玄米買入方にも差支の間御金藏假納之内御下ケ金の儀申上り程之儀に多し月々貸附方振向ひ分且此上來春よ至再度御救之御沙汰等御座の節之御備も無之に多し差支にも相成の間此節右入用金等會所可相賄ひ儀も難出來の儀に有之の間町會所可白米相渡り多し其餘之儀都多年番方にも引請取計の様仕度奉存に依之此段申上り申十月

下ケ札
去ル午年彈左衛門圍内小屋入人數に見合極貧なる此度小屋入可相願もの凡三百人を見積り、
三ヶ月分 貳萬七千人
一日壹人參合之積 米八拾壹石
同斷 五合之積 米百三拾五石

町方飢餓之者御救之儀に付申上り書付

原善左衛門 仁杉五郎左衛門

近年引續米價高直なる其日稼之者共一統及困窮の處當夏か追々米直段格別引上ケ此節も必至よ及難儀の趣に多し店賃相滞の儀も勿論家財衣類等迄

賣拂猶夫にも給續兼住所に相離の類之者有之物費致し歩行の多し此節柄之儀食物施しをの少く往還に倒病死又を相煩罷在の者も多く且平年を捨子一ヶ月に四五人位の儀に多し捨人も有之事を稀成儀に御座の處當七月か先月迄三ヶ月之間に七拾六人なる此節も猶更相増當月朔日か十日迄に拾七人有之既よ去七日夜南傳馬町壹丁目往還に捨子の添ひ書置之趣も米高直に付給續兼夫婦相別レ此節之儀に得も無致方愛子に別れ捨子に致の間此子の命相助りの様繰返願の趣之書付に多し前書之通捨子多有之の儀も全米價高直故右類之儀も相聞且又住所にも離れ御救相願の段申立御番所に欠込願出の者も追々有之當時錢百文に付白米四合賣に多し暫引續居に付老人子供厄介多有之者も別多給續兼無致方無宿に相成及飢餓の間差當右體之者御救被成の方にも可有御座の哉然ル處天明四辰年并去ル巳年か翌午年に至違作之國柄其土地に住居難相成可便方無之無宿に相成御當地の出物費に致し歩行に得共給續兼終に倒相煩罷在の者有之に多し付穢多頭彈左衛門圍内に介抱小屋補理十ヶ月之間右體之病人見當次第引連參小屋に入置病氣全快之上身分片付相願の儀も元領主地頭に御引

渡可相成積被仰付扶持米藥代雜用錢小屋場入用等御金藏方請取彈左衛門
 の相渡儀に御座處右病人共全快之節身分片付方之儀天明之度も人數
 七百貳拾貳人之由片付方書留無之難相分去々午年は人數貳百九拾人之内
 貳人も幼年者も母一同右小屋に入罷在り内母も病死致ししに付幼年者
 二人元領主に御引渡に相成其餘も銘に國元可立返旨申立しに付上方を
 の之分を品川宿奥州筋之をも千住宿其外御府内町外迄引連見送遣儀
 に有之に處今般之儀を在方をの之儀をも無之元町方人別之者も俄に住
 所に離れしをの共付前書之振合を以穢多町之内に被差置當座之御救被
 成下し共跡之可取續手段無之其上穢多共之手に掛り養育受し多も後日
 身分立戻方之運ひも自然不宜旁終に無宿非人に相成し者多く可有之哉左
 へ得も一旦之御憐愍をも可相成し得共小屋引拂儀節矢張立行難相成儀に
 付勘辨仕儀處場所を見立三間に貳拾間程の小屋を貳ヶ所も相建町會所が
 朝夕之賄御救被下晝之内に銘に商ひ等も罷出儀様相成しに元手錢も
 も有付小屋引拂儀節店持儀も出來可申哉此度之をの共も元手錢も盡
 果仕舞儀程之ものを付商ひ渡世可相成をの之分に右爲取續先達多町

御救被下し趣に准し壹人に付錢四百文宛も被下置しに渡世も取付可
 申し哉勿論猥に小屋入等申付し多も左迄も無之をも這入儀様相成際限
 も有之間敷に間前書之通兩御番所缺込御救相願しをの元町之町役人
 呼出し一ト通相糺實に極貧も住所にも相離し程之者相違無之に小
 屋入申付且行倒者も元々無宿非人之分は是迄之通溜預申付其外及飢餓行
 倒しに相違無之者の糺之上小屋入申付しに御仁惠之程行届可申哉勿論
 月限之儀も凡三ヶ月も小屋入申付其内出稼等爲致元手も有付儀様精々
 怠り無之様見廻り之役人教諭致しに一命之境實意に承伏行届重々厚
 き御仁惠相辨しに銘に身分之立行方も自然と仕覺可仕哉奉存に間右之
 趣も被仰付しを如何可有御座し哉此段申上以上天保撰類集同。

申十月

原善左衛門 仁杉五郎左衛門

御救小屋取扱方書付

原善左衛門 仁杉五郎左衛門

此度町方飢餓之をの御救小屋補理取締方其外手續左之通

一、小屋場貳ヶ所之内、松屋町河岸壹ヶ所、神田紺屋町土手際壹ヶ所、取建し積。
一、小屋場地所長貳拾五間程之處、廻り竹矢來こ致し、菱矢來こ結立、裏葎一枚通り當、押縁結付、木戸貳ヶ所仕付。
一、小屋場梁間三間、桁行貳拾間、入口片側は五ヶ所宛、都合拾ヶ所付、風凌方宜様四方菰張、屋根菅葺、軒高サハ成丈低く致し、桁行中通り葎二多仕切致し、前後奥行九尺宛こ相成は様致し、根太簀子搔、琉球疊を敷。
但、右竹矢來門は見計、小用所雪隠取建。
一、番小屋貳間こ三間、廻り板圍、入口を付、屋根板葺、中仕切致し、一方土間こ多湯釜壹ヶ所差置、一方を名主共腰懸ヶこ相成は様見計取建。
一、番人貳人宛差置し積。
一、名主共之儀を類焼之節御救小屋はと、最寄組合名主共壹ヶ所は兩三人又も四五人宛、晝夜詰切は處、此節を惣町と名主共貳百貳拾人餘之分、南北二手こ分ヶ申合、壹ヶ所は晝夜貳人宛順番こ相詰し積。
一、飢餓之を小屋入取扱方之儀も、兩御番所并町會所は駆込御救相願はのも、町役人呼出、一ト通り相糺は上、衣類道具等不殘賣拂、實と給續兼はの

之分、名前書押切判致し渡遣、小屋場こ相詰は名主共方こ多、右押切書付を相改、小屋入を致し積。

一、右同斷店仕舞、當時無宿相成、御救願出は者ハ、元町之町役人呼出し、右同様相糺、尙九月中旬以來無宿こ成はのこ多、非人こ不相成分を、押切書付相渡、右同斷小屋入を致し積。

但、店賃滯一通りこ多店立こ相成はのハ、小屋入申付、其外惡事有之ものハ、小屋入不申付し積。

一、行倒は程も無之、及飢餓難儀致しもの、召連訴出は得も、糺之上野非人等も無之分を、右同様小屋入申付し積。

一、小屋こ罷在は内、晝之内を成丈商ハ職分等こ罷出、相稼は様精と教諭致し、出精可を致事。

一、其をの入り日ハ百日を限り、小屋入申付は間、出精元手こも有附は様可を致旨申渡し積。

一、元手錢壹人こ付錢四百文宛差遣し積。

一、日數相立、小屋出は節を、最初相渡は押切書付を、小屋場詰名主共方ハ預り

置いを當人の相渡、元小屋入申付い御役所の相納、御禮申述、勝手次第何方に成共店持可申事。

一、喧嘩口論不取締之儀無之様、名主共々精々申付、心付可申事。

一、小屋内より惡事致しいもの勿論、風儀不宜者の名主共々精々申付、不相用もの名主共々見廻り之役人の申立、小屋追拂品を寄御吟味之儀をも可申立事。

一、小屋入之もの共に志し有、施し致しいもの有之いもの、無斟酌爲差遣い積。

一、焚出し場所之儀も、町會所より取計い積。

一、朝夕賄之儀も、一食貳合五勺宛、二度分五合を一度に相渡、女子供を同斷三合相渡い積。

一、前書小屋入御救之儀、彌被仰渡いもの、御救願方心得之儀、南北小口年番名主共御役所に呼出し申渡、小屋場詰等之儀も是又申渡い様可仕い。

一、町方往還を行倒相煩いもの、召連訴出い儀も勿論、いまだ行倒い程も無之、及飢餓難儀致しい者の、召連可訴出旨、是又可申渡い。

面 桶

原寸 高三寸五分 深三寸四分 周四寸

島田一郎所藏

周圍ニ書シテ左ノ如ク有リ。

天保七丙申歲大凶年飢饉也。從公儀窮民御救之ため、和泉橋向御救小家庭、其外所々に御小家庭、江戸中の窮民おびたく、這入る。此面つふに飯壹ばねづ、當歳子に至る迄戴申事、難有事也。此器木具新請取被捨ける故、一つ貰請、後年に至りかよふの凶年難澁の事をわすれざるため、書附殘し置物也。

米麥大豆小豆引割其外とも

金壹兩ニ付大體貳斗七升位。

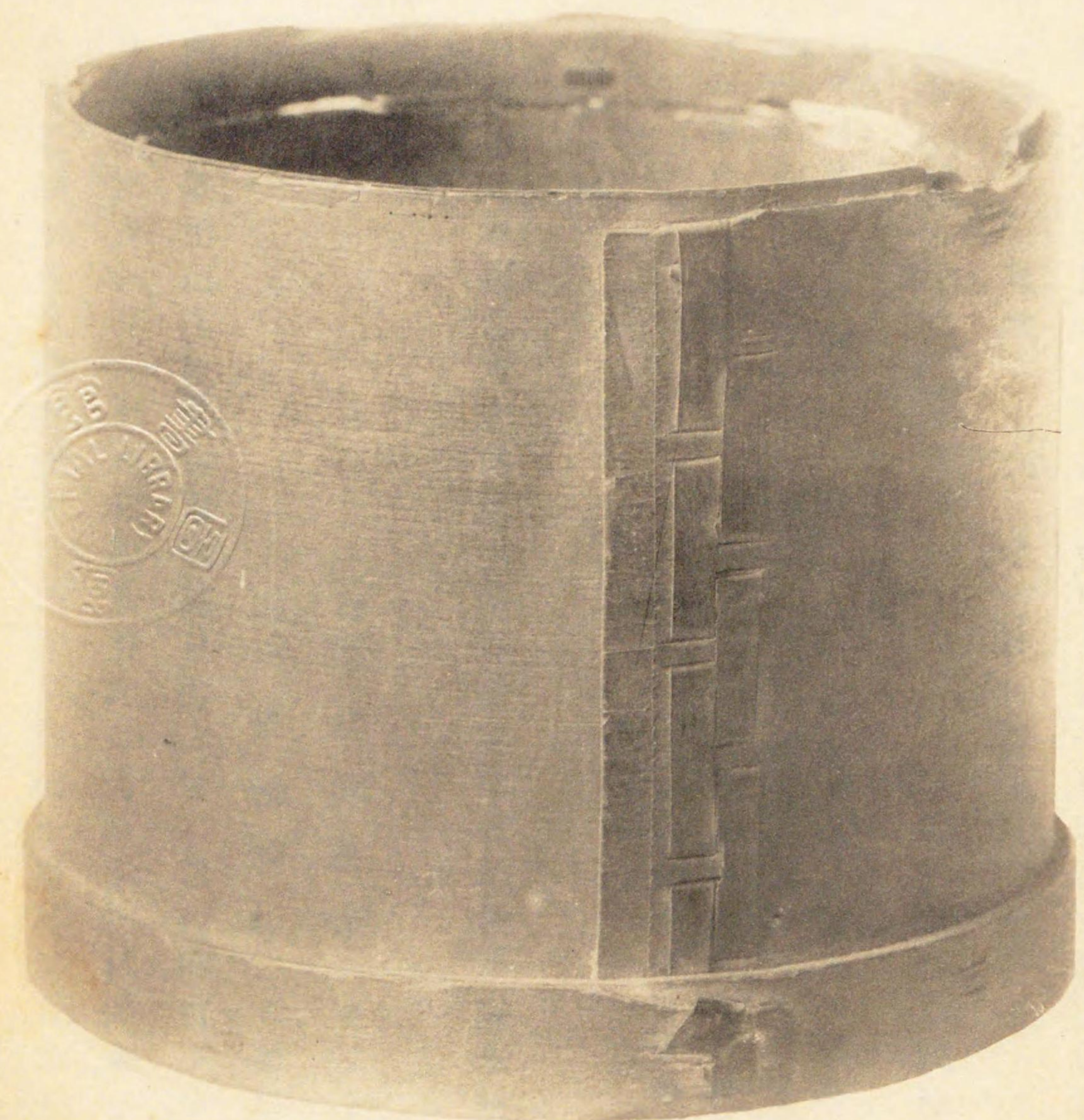
餅米貳斗四五升也。

其外諸色大高直也。

此器、飯を先三合這入る積りのよし。

梅干三ツづゝ入て、毎朝戴き申い。尤日數百日の間也。誠、難有御慈悲也。

裏底ニ、此面通子々孫々に至る迄のけ置、かよふの凶年飢饉を物語、萬事相煩、わすれざるよふ、いたし可申い。ト誌ス



Faint, illegible text is visible on the right page of the book, appearing as ghosting or bleed-through from the reverse side. The text is arranged in several columns and is too light to be transcribed accurately.



右を荒増之儀ころ、一式町會所入用を以取計し積、其餘洩レハ儀も有之ハハ
、右懸りに私共方申談ハ様可仕ハ以上。

申十月

原善左衛門 仁杉五郎左衛門

申十月廿一日廻し濟。

印渡邊三郎助。佐藤清五郎印。正。田榮

申十月廿二日加賀守殿に

次郎印。佐藤十兵衛印。田中新五兵衛

林阿彌を以伊賀守上ル。

印。本多彌太夫印。村井專右衛門印。加

藤又左衛門印。松浦彌左衛門印

加賀守殿

市中其日稼之者之内飢も可及程之者御救小屋取建入置ハ儀ニ付申上
ハ書付

印筒井伊賀守 印大草能登守

印明樂飛驒守 印田口五郎左衛門

米價之儀引續高直ニ付、市中其日稼之もの之内、極貧多實、難立行、飢も
可及程之者、いつれとか御救筋有之ハ方を奉存ハ間、去ル午年大火之節之振
合を以、神田佐久間町壹丁目地先ハ御救小屋取建、右之もの入置、朝夕賄之儀

も、男女并三歳以上は一日壹人米三合宛之積り、町會所におゐて焚出、差遣し積可取計旨、右懸り支配向組之者に申渡し、依之申上置し以上 申十月
(朱) 申十月廿三日加賀守殿に大澤彌三郎を以伊賀守上ル。

印渡邊三郎助。佐藤清五郎印。正田榮次郎印。佐藤十兵衛印。田中新五兵衛印。本多彌太夫印。村井專右衛門印。加藤又左衛門印。松浦彌左衛門印。

市中其日稼之者之内飢可及程之者入置し御救小屋出來仕儀も付申上し書付

御届

印筒井伊賀守 印大草能登守
印明樂飛驒守 印田口五郎左衛門

米價高直に付、市中其日稼之者之内飢可及程之者、爲御救神田佐久間町壹丁目地先の小屋取建し様可仕旨申上置し處、右小屋出來仕儀に付、追々願出次第小屋入申付、握飯相渡し積り、尤右體極貧之者之儀も付、元手錢無之し多し、日々稼方も相成兼し者にも、小屋入之節、可稼當人の計り壹人錢四百文差遣し申し、惣人數米錢渡方等之儀も、渡方相濟し上、追々可申上し。此段御届申

上し以上 申十月

(朱) 申十月廿五日廻し濟。

此度御救小屋に張出し控書入し御覽置申し。 申十月

印伊賀守 印能登守
印飛驒守 印五郎左衛門

印渡邊三郎助。佐藤清五郎。正田榮次郎印。佐藤十兵衛印。田中新五兵衛印。本多彌太夫印。村井專右衛門印。加藤又左衛門印。松浦彌左衛門印。

控

此節米直段高く、其の日のくゞしも成がるく、給はゞさか途住所こそおれ、道路よさほよふも有之由、依て此御小屋へ入おかれ、毎日御賄下され、當人にも元手錢迄下さる程の厚き思召、汝有か多く存じ、日々稼方精を出し、一日も早く其身くくの有付かた兼て心懸けるく、御小屋いつ迄もと存、御取拂の時、身の片付かたよろるへぬ様心懸るし。

- 一、火の用心嚴重に心付可申事。
- 一、酒一切相用ひ申間敷事。

一、公儀御法度の申よ及ぞ、喧嘩口論、都る男女相あかひよ行儀相慎、老人子

とも等別ていゝるる事

一、病人等有之節も、早々申立し様可致事

右之趣堅く相守り、心得違ひ有之よおゐて、小屋出申付るもの也。申十月

申十一月六日加賀守殿に大澤彌三郎を以、五郎左衛門上ル。

印都筑金三郎。正田榮次郎印。佐藤十兵衛印。福田所左衛門印。田中新五兵衛印。本多彌太夫印。村井專右衛門印。加藤又左衛門印。松浦彌左衛門印。

市中其日稼之もの之内飢可及程之もの御救小屋建増し儀に付申上し書付

印筒井伊賀守 印大草能登守
印明樂飛驒守 印田口五郎左衛門

米價高直に付、其日稼之もの之内、極貧よて飢よも可及程之もの爲御救、佐久間町地先の小屋取建、右之内に入置、町會所におゐて焚出し仕し旨、去月中其段申上置、支配向組之ものに申渡、爲取計し處、右小屋入之者、當月四日迄二百七拾三人に相成、是迄之小屋も多し手狭に付、猶又同所の一ヶ所小屋取建し積申渡、依之申上置し以上。

申十一月十二日廻し濟。

印伊賀守 印能登守
印飛驒守 印五郎左衛門

印都筑金三郎。正田榮次郎印。佐藤十兵衛印。福田所左衛門印。田中新五兵衛印。本多彌太夫印。村井專右衛門印。加藤又左衛門印。松浦彌左衛門印。

御救小屋入しもの共、追々相増、是迄之建坪も多し引足不申しに付、貳度目建増し圍内は尙又桁行三拾間、梁間四間之小屋并焚出し場等建増し積を以、入札申付し處、左之通。

御救小屋之方

- 一、落札金九拾五兩貳分 河内屋半平
- 二、番金九拾七兩貳分銀貳匁五分 伊勢屋惣七
- 三、番金百五兩 明石屋市郎兵衛

焚出場の方

- 一、落札金六兩三分銀拾四匁 右惣七
- 二、番金七兩貳分銀五匁 右半平
- 三、番金七兩三分 右市郎兵衛

右之通に有之、不相當之儀も無之の間、落札直段を以爲取懸、役人時々見廻り、

御用達手代等ハ附切相仕立シ積御座シ。此段申上シ。申十一月(朱) 申十一月十二日廻シ濟。

印伊賀守 印能登守
印飛驒守 印五郎左衛門

印都筑金三郎。正田榮次郎印。佐藤十兵衛印。福田所左衛門印。田中新五兵衛印。本多彌太夫印。村井專右門印。加藤又左衛門印。松浦彌左衛門印。

米價引下り不申シ付、再度御救被下シ積被仰渡シ付、追々取調罷在シ處、先達町會所構内ニ補理シ白米春立場ニ多ク不足付、壹ヶ所新規取建シ積、諸色省略入札爲致シ處、左之通

- 一、落札金四拾四兩三分銀三匁
- 二、番金四拾五兩銀壹匁七分五厘
- 三、番金四拾六兩三分

明石屋市郎兵衛
伊勢屋惣七
河内屋半平

右之通ニ多ク不相當之儀も無之シ付、落札直段を以爲取掛申シ間、此段申上シ。申十一月

(朱) 申十一月十五日加賀守殿ニ大澤彌三郎を以、田口五郎左衛門上ル。

印都筑金三郎。正田榮次郎印。佐藤十兵衛印。福田所左衛門印。田中新五兵衛印。

(朱) 衛印。本多彌太夫印。村井專右衛門印。加藤又左衛門印。松浦彌左衛門印。

市中其日稼之内可及飢程之者差置シ御救小屋建増之儀申上シ書付

印筒井伊賀守 印大草能登守
印明樂飛驒守 印田口五郎左衛門

引續米價高直ニ付、市中其日稼之内、極貧ニ多ク飢ニ可及程之者、神田佐久間町地先ニ爲御救小屋取建入置、焚出し握飯差遣シ積申上置シ處、小屋入之者追々相増、右ニ多ク手狭ニ付、同町續々花房町地先ニ尙又小屋取建シ積可取計旨、掛り支配向組之者ニ申渡シ、依之申上置シ以上。申十一月

(朱) 申十一月廿三日加賀守殿ニ大澤彌三郎を以伊賀守上ル。但備後守殿ニ封シ、阿彌チ以上ル。

小印都筑金三郎 町會所掛り

市中其日稼之内可及飢程之もの差置シ御救小屋建増シ付御目障り之儀申上シ書付

小印筒井伊賀守 印大草能登守
同明樂飛驒守 同田口五郎左衛門

市中其日稼之内可及飢程之ものを差置し御救小屋神田佐久間町井同町續花房町地先に取建しこ付先達る其段申上置し處此度柳原土手北之方ナダレ地と唱し場所之内稻荷河岸東方淺草御門西之方迄之間明き地之分は猶又小屋建増し間御成之節通御之御障こそ不相成し得共御目障こそ相成しこ付御斷申上し取拂次第御斷返し可申上し尤御側衆にも御斷差出申し以上

申十一月

西八月廿八日廻し濟

印伊賀守 印能登守
印飛騨守 印五郎左衛門

印都筑金三郎正田榮次郎印佐藤十
兵衛門印福田所左衛門印田中新五
兵衛印松村忠四郎印中村又藏印高
橋鐵次郎印

御救小屋内病人之分療治いゝし醫師兩人去十二月廿九日迄之藥代煎藥壹貼こ付銀五分つゝ之積其外丸藥等兩人共同様こ代銀仕出し差出し處過當こ相見し間座人共之内以前藥種商ひいたし者有之しこ付右之者に相尋し處右をいつれこも半減こ御渡方御座いゝ多徳分等も有之し間右こ可然旨申聞し間煎藥壹貼こ付銀五分之分貳分五厘其外共都る凡半額之積代

銀取調し處左之通

銀壹貫七百七匁餘
金ニノ貳拾八兩餘
銀壹貫三拾壹匁餘
金ニノ拾七兩餘

藤村 榮軒
板垣 玄貞

右之通こ相成不相當之儀も有之間敷と奉存し間右之通銘と相渡し様可仕奉存し依之相伺申し 酉正月

西正月廿八日加賀守殿に啓阿彌を以飛騨守上ル
西丸を備後守殿に啓阿彌を以飛騨守上ル

市中其日稼之内可及飢程之者差置し御救小屋取拂し付御目障御斷返之儀申上し書付

筒井伊賀守 大草能登守
明樂飛騨守 田口五郎左衛門

神田佐久間町井同町續花房町地先柳原南北之方ナダレ地と唱し場所等市中其日稼之内可及飢程之者差置し小屋取建しこ付御成之節通御之御障こそ不相成し得共御目障に罷成し旨先達申上置し處小屋内こ罷在し者追々人數相減しこ付右御救小屋之内柳原土手北之方ナダレ地に取建し一圍之分取拂申し右之段御側衆にも御斷返差出申し依之申上置し以上

酉正月

酉正月廿八日廻し濟。

印伊賀守 印能 登 守

印都筑金三郎 町會所懸

印飛驒守 印五郎左衛門

此程小屋出之の次第は相増一日百人餘貳百人程も願出の有之、昨今も貳三拾人宛を小屋出仕し得共、最早小屋取拂之時節も至の間、得と勘辨仕、小屋内之様子夫々承糺取調の處、當人尙又を家族之内相煩居、手當行届兼、無餘儀小屋内ニ罷在のにも有之哉。付、何れと歎御手當有之の、方と勘辨仕、取調の處、此節小屋内ニ罷在の、

惣人數三千五百人餘

煩人數七百人餘

此錢千百四拾貳貫文餘、但、病人一人ニ付壹貫五百文ツ。

此金百九拾兩餘。

内、無難之者貳千八百人餘

此錢千八拾九貫文餘

此金百八拾兩餘。

合金三百七拾兩餘

右之通御手當被下、多分小屋出難有相願可申哉。奉存の間、書面之通被下、方にも可有御座哉。左、右御手當錢之外、是迄之通市中一統に被下、再度御救米をも人別に應し、相渡し遣し、様可仕と奉存。依之相伺申。

酉正月

西二月七日加賀守殿に林阿彌を以上ル。

但、加賀守殿御引中ニ付、御同朋頭を以上ル。一體に御右筆組頭ニ有之。

西丸に備後守に林阿彌を以上ル。

市中其日稼之内可及飢程之者差置、御救小屋取拂ニ付、御目障御斷返之儀申上、書付

筒井伊賀守 大草能登守

明樂飛驒守 田中五郎左衛門

神田佐久間町并同所續花房町地先、御救小屋取建ニ付、御成之節通御之御障こそ不相成、得共、御目障ニ罷成、爲先達、其段申上置、處、小屋内ニ罷在の、追々人數相減、付、右御救小屋之内、花房町に取建、一圍之分取拂申、右之段御側衆にも御斷返し差出申、依之申上置、以上。酉二月

幕府時代ノ救濟

西二月十七日廻し濟。

印伊賀守 印能 登 守
印飛驒守 印五郎左衛門

印都筑金三郎 町會所懸り

御救小屋内ニ罷在しをの共、追々人数相減し、付、神田佐久間町地先に取立
し御救小屋一圍取拂、望人共に入札申付、爲引取し積御評議相濟し、付、望人
共に入札申付し處、左之通。

- 落札
- 一、金拾八兩壹分
- 二、金拾三兩壹分
- 三、金拾壹兩
- 四、金拾壹兩
- 五、金拾兩銀三匁

- 高田四ッ家町家主 政次郎
- 小傳馬上町地惣兵衛店 鐵次郎
- 河内屋 半平
- 伊勢屋 惣七
- 明石屋 市郎兵衛

右之通有之し間、落札直段を以爲引取し積御座し、依之申上置し。西二月

西十月廿九日越前守殿に啓阿彌を以安房守上ル。

小印渡邊三郎助 町會所掛

神田佐久間町壹丁目地先に取建し御救小屋取拂し儀申上し書付

小印筒井伊賀守 同大草能登守

印明樂飛驒守 田口五郎左衛門

米價高直ニ付、去申十月中申上置、市中其日稼之の之内、可及飢程之の、神
田佐久間町壹丁目地先等に御救小屋取建入置、朝夕之賄町會所ニおゐて焚
出し、差遣し處、去ル十九日申上置し通、追々米價も下落および、取續も可相成
間、店持可申旨夫々當人共にも爲申聞、小屋出可相願段、元居町町役人店請人
共町會所に呼出し、申渡し處、追々小屋出相願し間、夫々手當米錢等差遣し、不
殘小屋出いたししニ付、右御救小屋昨廿八日取拂申し、依之申上し以上。

西十月

西十一月十一日廻し濟。

印伊賀守 同安 房 守
印飛驒守 同五郎左衛門

印渡邊三郎助

去申年以來引續米價高直ニ付、其日稼之者之内、極貧ニ多難立行、飢にも可及
程之の爲御救、神田佐久間町地先に小屋取建、男女入置、老少之差別を以、朝
夕之賄町會所より焚出、差遣し積、去十月被仰上、小屋取建し處、追々小屋入人
數相増、同町其外花房町地先柳原土手あぐれ等に小屋建増、都合貳拾壹棟惣
霸都時代ノ救濟

付、銘々服藥數取調ひ處、甫眞儀を煎藥壹万四千五百貼餘振出し七百七拾袋餘、其外丸藥等相施ひ分代金は積、凡金六拾兩餘は有之、友專減迪儀を兩人申合、煎藥壹万八千九百貼餘丸藥四拾八包、其外煉藥等相施し分代金は積、凡金九拾兩餘は有之、右體多分之施藥仕、尤右三人之外、施藥又ハ食類等施し、ものも御座し得共、御褒美之儀可申上程之儀こそ無御座し處、右三人儀も數月之間晝夜共骨折療治仕、聊名聞こ拘り儀とも不相聞、實意こ取計、奇特之儀こ付、向後之示諭も相成可申と奉存し間、御褒美として甫眞の銀五枚、友專減迪の銀三枚ツ、町會所金之内を以差遣申し、依之申上置し、以上

西十二月

天保七年御救小屋一件

南北小口

年番名主共

近年引續米價高直こと、其日稼之もの共一統及困窮し處、當夏以來追々米直段引上ケ、必至と及難儀、家財衣類等迄賣拂し、るも給續兼、住所こそ離レ、及飢餓し程之ものも、此度爲御救神田佐久間町河岸の小屋補理置し間、右小屋入申付し、尤朝夕賄之儀も町會所を被下し間、晝之内を銘々出稼致し、元手を稼溜、凡百日程相立し、銘々店持し様可致、尤格別之御仁惠を以被仰付し儀

こ付、小屋内こ罷在し内、風儀宜相慎罷在し様申付、其外諸事町會所掛り差圖可致間、其旨可存、且俄こ住所こ離、いまは行倒し程こそ無之、及飢餓難儀致し、いもの有之、い、召連可訴出。

但、窮民御救ひ小屋に入し儀も、兩御番所并町會所の駈込、困窮申立し、るも、

元居町町役人相糺、實々及飢餓し程之儀相違無之、い、押切書付渡し遣

し、小屋入申付、尤右書付も、小屋場詰名主方の預可置事

右之通申渡間、其旨相心得、組合限不洩様可申通、○天保集、成、御觸書同。 申十月廿日

下ケ札

此所本文之趣こると、宿有之ものを御救小屋入難相成とて相聞不申し。

何町誰店

誰

親

妻

子

歳 歳 歳 歳

右之ものを共此度御救小屋入申付もの也。

南番所押切

霸都時代ノ救濟

谷村猪十郎様 中島嘉右衛門様

原善左衛門 仁杉五郎左衛門

以手紙得御意。然も町方飢餓之ものとも、此度御救之儀取調申上并御救小屋取扱方等之儀申上。伺之處、伺之通被申渡。間、南北小口年番名主に申渡。尤小屋入願出。得も、當番方取扱。多、別紙雛形之通押切書付相渡し、小屋入申渡。間、右寫三通雛形相添。此段爲御承知得御意。以上 十月廿六日

原善左衛門様 仁杉五郎左衛門様

谷村猪十郎 中島嘉右衛門

御手紙致拜見。然も町方飢餓之もの共、此度御救之儀取調申上并御救小屋取扱方等之儀被仰上。伺之處、伺之通被仰渡。間、南北小口年番名主に御申渡有之。尤小屋入願出。得も、當番方取扱。多、別紙雛形之通押切書付御渡し、小屋入被御申渡。間、右寫三通雛形共被遣、落手致し。右御報如斯御座。以上 十月廿六日

申十一月十一日町會所願出。もの之内、小屋入申付。程之もの。決着致し。分も、直。小屋入申付。其餘二半之もの。又も申上方胡亂之もの等も、兩御

役所。差出、糺受。様可爲致旨、町會所懸り 申

印飛騨守殿 印五郎左衛門殿

印能登守 印伊賀守

此度窮民爲御救、神田佐久間町壹町目地先。御救小屋取建。付、市中極貧之もの共、追。小屋入之儀、拙者共兩御役所并町會所願出。付、糺之上、小屋入申付。處、此節餘程人數相増。哉。有之、右之内。左迄。無之もの。万一這入。多、切角之御仁惠も却。多、不行。届様可相成。哉。付、取調。處、先月廿六日。當月八日迄、十二日之間、惣人數千百十九人有之。間、小屋詰名主共、別紙之通書付差出。處、右も御救筋之儀。付、多人數相成。共無餘儀事。此得共、此節再度御救も出。積、人數之取調も有之。時節。得も、小屋入之者、此上無際限相増。様。多、却。多、御救筋も不行。届様相成可申。哉。致掛念。依之取調。處、兩御役所。差遣。人數。多、町會所之方格別多分。有之、尤兩御役所。多、兼。多、相談濟之通、市中其日稼之者之内、可及飢。程之もの願出。得も、元町之町役人呼出し相糺。上、實。極貧。多、家財衣類等迄賣拂。多、給續兼、及飢餓、住所。離。無宿相成、又も住所。も離。可申界。至。り。もの。こ

相違無之旨、家主五人組名主が書付差出い得て、小屋入申付、勿論格別之譯柄
 二無之もの、又も同居人之分も、成丈ヶ身寄之もの等呼出し、厚利解申聞、引渡
 遣し儀も、町會所之儀も取調方弛ま儀も無之い得共、御救筋取扱
 場所二付、名主共之内申立方等二寄、押る糺方致し兼い場合も可有之哉二付
 若右様之儀有之い、向後町會所願出いもの共も、兩御役所之内に差出
 以上、家主五人組名主御役所呼出し、糺之上小屋入申付い、再度御救調
 中、兩様二多混雜之手數をも省き、可然哉と存い付、此段及御相談い以上。
 申十一月

申十月廿六日方同十一月八日迄十二日間、神田佐久間町壹丁目御救小屋入之もの。

南御番所方

人數 貳拾五人

町會所方

同 千三拾三人

右三口

人數 千百拾九人

右之通二御座い以上

申十一月

御小屋詰

名主 共

筒 伊賀守様

大 能登守様

都筑金三郎

以切紙申上い、然も御救小屋神田佐久間町地先井花房町之分共、都合三圍に
 昨廿日迄二人數四千貳百人餘小屋入二相成、此上小屋入之儀も、建増出來之
 上ならて差支い旨、御勘定方申聞い、尤先日申上置い、柳原土手ナダレ地之
 儀も、御材木石奉行の掛合申遣置い間、右否挨拶有之次第取調、小屋取建之儀
 一兩日之内二も申上い積り二御座い、依之此段申上い以上。十一月廿一日
 天保七年十一月廿七日喜多村彦右衛門方二申渡。

組々年番

名主 共

此節奉行所願御救小屋入願之もの、日々多人數願出、何を幾困窮人と申中二
 左迄無之者も、家主共其外心得違二、小屋入願申進めい儀等有之い、
 厚御趣意二も相振、如何に付、猶當十四日其段喜多村彦右衛門方申渡置、一同
 心得可罷在い得共、其後も矢張日二二人數高相増い、尤極貧之者御救之御趣
 意二い得も、實二無餘儀分を格別ケ成二も立行いもの迄爲願いも、恐入い事
 候、然ル處駒込片町名主八左衛門儀も、右體御救筋厚御世話被成下い難有
 御趣意之程相辨、支配町二輕キ者共小屋入相願い得共、容易二願遣しい、
 恐入い義も、支配内身分相應之者とも追二申談、駒込片町外四ヶ町表店を勿

論、裏々迄も自身相廻り、難澁之次第見届、商元手錢或も手當錢等相惠之窮民救遣し、可成丈小屋入相願間敷旨、厚教諭いゝし趣感伏ひるし、銘々渡世勵合ひ趣相聞、畢竟深切に心掛、支配町々之もの申諭、段、役前二取一廉之勤功に付、既に八左衛門始同意いゝし者共、夫々御賞も有之、外町々之儀も、右様ニ有之度事、此節を猶更、平常逆も名主共銘々厚打はまり世話いゝるし、御趣意之趣に押移り、様心掛、出精可相勤、此旨惣仲間之者共、能く行届、様、早々可申通、

右申渡趣、一同證文申付ル。

申十一月廿七日

天保撰要類集

申(○天保七年)十月廿六日方同十一月八日迄十二日之間、神田佐久間町壹丁目御救小屋入之ものを。

南御番所方 人數 貳拾五人
 町會所方 同 千三拾三人
 右三口 人數千百拾九人
 右之通御座以上。

御小屋詰
 名主 共

申十一月十一日(○天保七年)方同晦日迄。
 一、握飯代

内

男三千五百拾四人 此代貳百三十四貫貳百六拾四文
 女并 七千八百七拾五人 此代三百拾壹貫七百拾八文
 子供

錢五百四拾五貫九百八拾貳文
 此金八拾貳兩貳分三朱錢貳百四十六文 但、兩ニ六貫六百文替。

外

一、人足百人ニ付半人掛晝夜分 壹人錢三百三十文之積
 此貨錢 錢三拾七貫七百貳十三文

一、炭拾六俵 此代錢六貫百五十八文
 廿日之内、四日除十六日分

一、筵百枚 此代錢十貫四百四十八文

一、半紙貳万貳千枚 此代錢三拾貫八百五十三文

一、半切六千枚 此代錢六貫六百文

一、蠟燭三百貳十挺 此代錢五貫百四文

六口、錢九拾六貫八百九拾文

此金拾四兩二分二朱錢三百六十六文
 霸都時代ノ救濟

惣 錢六百四十貳貫八百七十六文

此金九十七兩壹分貳朱錢貳百四文

申十二月朔日方酉正月廿日迄。

一 握飯代 人數四百四十七人

内

男百四十九人 此代錢九貫九百三十貳文

女并 二百九十八人 此代錢拾壹貫七百九十二文

錢貳十壹貫七百二十八文

此金三兩二分一朱錢三百五十二文

外 一人足百人ニ付半人掛晝夜分 壹人錢三百三十文之積

一 炭五俵 此賃錢壹貫四百八十七文

此炭壹俵銀三匁五分 此代錢壹貫九百廿四文

一 半紙八百九十四枚 此半紙一束銀二匁五分五厘 此代錢壹貫二百五十貳文

一 半切二百廿四枚 此半切百枚銀一匁 此代錢二百四十五文

一 蠟燭百二十挺 此蠟燭十挺銀一匁四分五厘 此代錢壹貫九百十三文

一 筆五十對 此筆一匁ニ付四對もの 此代錢壹貫三百七十貳文

一 墨七挺 此墨壹挺ニ付八分もの 此代錢六百十五文

一 朱墨七挺 朱墨同四分もの 此代錢三百八文

八口 錢九貫百〇〇〇文

此金一兩二分錢百廿八文

惣 錢三拾貫八百五十六文

此金五兩二朱錢百八文

兩ニ六貫文替 前書銀直し 六貫六百文之積り。

天保七申年十月廿七日向方掛 米價高直市中飢渴もの入し 御救小屋補理し一件

神田佐久間町御救小屋一ヶ所

申十月廿九日出來上り。

北通り東方六間ニ有門 右兩門の棟ノ札ニ

定

西門ノ切り。

此圍之内ニ無用者猥不可入者也

○插圖略

月 日

小屋長サ二十間ニ三間計と相見内ニ不入故惣大積り、二棟の内南之方高サ大なり、兩門の外南東ニ通路口無之、先年火事ニ由出來之時トハ違之、北通

霸都時代ノ救濟

路口柱ニ高張二ツ出。○圖略ス。

惣圍の端見印幟高く有之(○圖略ス)

家主名主に願、夫々取調之上、會所を願、此御小屋へ入者、八十日限亭主分之者、四百文被下、妻子其外、男四合五勺、女三合ツ、梅干三ツ添被下、右男毎日稼い多、日數中之分取調勘定致、日限之内夫々店杯取續致、御仁惠を以御小屋御取建有之由、但毎日五十文ツ、上ケ錢致、右ヲ積置、出時爲本手被下由。

十一月朔日、佐久間丁御救小屋入初りし所、追々人數多ク相成、家主名主を以願立、し者の間ニ合不申、依之當人々々懸込願ニ出、し者共ヲ其町役人被招呼、御取調之上、同月十一日二棟と成、南北へ四間ツ、倍、東西の五十間ニ圍取廣ケ、十五日カ二棟相増別圍一ヶ所出來、十八日カ又ハ二棟別圍一ヶ所、五十間ニ十二間、三ヶ所共追々西之方へ出來、其中ニ番組有之、懸行燈夜分の表カ相見へ、霞菰張とま吹故、風雨之夜寒哀むへし、毎日男分五十文ツ、上ケ錢、右を取集メ、八十日目ニ元町之家主へ御引渡有之由、付、元住居裏店も其儘ニ致置、追々御引渡之節本手出來、取續ニ相成、し様御趣意之由、カ様ニ御仁へし。

政被爲施、非人共迄をも御慈悲筋ニ多、御見分夫々御申付有之、し所、近年之様凶作打續キ、万人難澁ニ及、し事、何故ニ哉、何レにも御昇平久敷打續、万民奢驕ニ長し、非分之事多故之御戒ニ哉とも存し、朝暮我住家ニ罷在、飯粥共ニ安樂ニ暮罷在、大幸不可過之、右御救小屋を、し多、隱德之心ヲ可起事成へし。

申十一月十九日
御救小屋惣人數高三千八百貳拾貳人

内、三歲以下三百六拾貳人

小屋入後ニ 女子出生 八人 父病死 拾三人

一、をみ藏内ニ多三斗だき、のまにて、三十六竈之場處よてたき出し被下、し由、
一、朝の粥晝のを、つそ、夕の引り被下、しれ、誰人やふん御小屋に落首を張たる由、其句よ云、

おすくいと、いふの大きな町會所七分を取て割をく、とする
天保七年

江戸中家數 表通り家數計 貳拾八万八千間程

此外ニ御米被下、し人數 百廿八万七千八百人程

内、男五拾八万九千八百人 女六拾八万八千人

外ニ人數三千八百四拾四人 座頭 三千五百八拾人 神主

七千二百三十人 山伏 五万四千八百五人 出家

新吉原町 六万九千四百五十九人

人數壹万五千七百人程

男、八千貳百人 女、七千五百人

此内遊女二千五百人

一、天保七丙申十月一ヶ月之所

一、行倒 百人 一、捨子 五十三人 一、缺落 百十八人

一、盜賊 百五十七人 一、湯屋着逃 百五十八人

當時御救小屋之者男女貳千五百七人 應思穀恩編

これに依て丙申八月より、上よりも裏借屋の窮民に、御救として度々一人別に米錢御米二升五合 錢二百五十文を下され、江戸の巨商も施行をしたり。まかれとも猶窮民多しと聞えしかば、丙申の冬十一月上旬より、江戸佐久間町河岸へ御救小屋を造らして、願ふものの老弱男女共に入れ置れ、一日は米五合ツ、を給したまはりて、新吉原町並に施行をせざる富商も、その炊出しを命せられ、窮民の男子の渡世も出ること免されて、かせきとりに致し、毎日上げ錢五十文

を納め、來春二月御小屋をとり拂る、折、その錢五貫文許なるを本手は渡し、たまはると云。こよなき御仁政仰き奉るゝ餘りあり、その後同所大根河岸に無宿の者の御救ひ小屋を造らして、無宿の窮民を入れおかれ、日毎は三喰を下さるゝこと右之如し、丁酉の春二月十日比までにて、御定の日限果ければ、宿ありしもの元の家主に引渡され、無宿もみな出されて、御小屋のとり拂ひとなりぬ。 曲亭雜記

今年七天保 四月より日々雨降、又曇天まで五月に至り、霖雨止む時なく、菜蔬生る事なし、嵯峨開帳詣人少く、看せ物あまゝ出しけれども、見物なし。兩國橋畔納涼まゝ寂莫たり。七月十八日二百十日は當り、且より大風雨家屋を傷損す。大川通出水あり、是より米價一時は登揚し、夫のみならず八月朔日先に倍せる大嵐朝より烈しく、屋宇を破り樹木を折り、怪我人あまゝあり。近在は水溢る。是によつて米穀彌乏しく、諸人困苦甚し。七月より貧民御救として米錢を給り、又十月にいさゝり筋違橋御門外より和泉橋迄の間、河岸通りに、御救の小屋を營て、これに居らしめ食物を給はる。此節水油拂底になり、小賣の油やハ商ひを休む。

武江年表

九、救小屋(府外) 曰ク品川。曰ク板橋。曰ク千住。曰ク内藤新宿。天保八年之ヲ設ク。

(朱) 水野越前守殿御渡儀御書付寫

町奉行衆

大目付

去申年七年天保以來米價高直ニ付多シ、御府内市中其日稼之もの共及難儀ハ
間、町會所ニおゐて御救米錢被下、又ハ御救小屋取建、厚御世話も有之ハ得共、
此節ニ至シ多シ、路頭ニ迷ヒ、又ハ行倒シものも有之哉ニ相聞ハ付、此度御
代官中村八太夫・山田茂左衛門・伊奈半左衛門・山本大膳掛リニ多シ、品川・板橋・千
住・内藤新宿邊にも、御救小屋取建御手當有之ハ積ニ付、右體道路ニ迷ヒ、或ハ
行倒シもの等も有之ハ、其場所辻番所組合頭取、家來差添、最寄小屋場
ハ差出、右組合ニ入不申向、銘々家來差添、同様可差出シ。

右之趣江戸中武家方寺社之向にも不洩様被相觸シ。三月

右之通可被相觸シ。○天保集成、御觸書、政保問記同。

(朱) 水野越前守殿御渡儀御書付寫

大目付

品川外三ヶ所御救小屋ハ入シもの之内、當時村方人別相除シものニ多シ、御
料所并万石以下知行出所之分ハ、可成丈歸住爲致、其餘之分ハ人物ニ寄、荒地
又ハ人足寄場等にも被差遣シ、積公儀ニおゐて品々御仁惠之御所置も有之
ハ事故、右御趣意厚ク相心得仕置等申付シものニ無之、村方人別相除シ類、御
救小屋ハ入シ分、御代官ハ元領主ハ引渡シ、追拂等不致、脱落一通リ之も
のモ、可成丈宥免之上、歸住爲致シ、積を以、手當之儀可取計シ。
右之趣万石以上之向にも不洩様可被相觸シ。三月○天保集成、御觸書、政保問記同。

御救小屋取建儀ニ付町觸寫

去申年以來米價高直ニ付多シ、御府内市中其日稼之もの共及難儀ハ間、町會
所ニおゐて御救米錢被下、又ハ御救小屋取建、厚御世話も有之ハ得共、此節ニ
至シ多シ、道路ニ迷ヒ、又ハ行倒シものも有之哉ニ相聞ハ付、此度御代官中

霸都時代ノ救濟

村八太夫・山田茂左衛門・伊奈半左衛門・山本大膳掛りこゝ、品川板橋千住・内藤新宿邊にも、御救小屋取建、御手當有之に積こ付、右體道路こ迷ひ或ち行倒しもの等も有之に、町役人共召連、最寄小屋場に可罷出し。右之趣從町御奉行所被仰渡し間、町中不洩様早く可相觸し。三月六日○天保撰要類集同。
天保八酉年三月十日受取、挨拶下ケ札取調、向方に同十一日御相談爲持遣シ、尤御頭御差合相成は間、伊賀守殿御持寄無之にハ、明日御同人方御達有之に様、向方に申遣ス。

町奉行衆

御代官中村八太夫・山田茂左衛門・伊奈半左衛門・山本大膳掛こゝ、品川板橋千住・内藤新宿邊にも、御救小屋取建、御手當有之に積こ付、右體道路こ迷ひ或ち行倒しもの等も有之に、其場所辻番所組合頭取方家來差添、最寄小屋場に差出、右組合こ入不申向を、銘々家來差添、同様可差出旨、御書付を以被仰出し、付、左之通及御掛合し。

一、侍體中間體之もの行倒し節、主人并宿所等無之、且言舌不相分ものを、是迄之通町奉行所に相渡可申、中間體こゝも脇差帶居不申しハ、御救小屋に相渡可申し事。

一、町人體無宿體、乞食體之もの、宿所并身寄之もの等無之、且言舌不相分病人體之ものも、御救小屋に相渡可申し之事。

一、修行者體、回國體之もの、往來書付所持之ものこゝも、遠國こゝ江戶内こ宿所身寄等も無之もの、且言舌不相分病人體之ものも、御救小屋に相渡可申し事。

一、非人體之ものこゝも腰札無之、宿所并身寄之ものも無之、且言舌不相分病人體之ものも、御救小屋に相渡可申し事。

一、遠國之もの并江戸近在こゝも五六里以上隔りしものも、御救小屋に相渡可申し事。

右五ヶ條共問合し向も有之に節も、家來差添、向寄御救小屋に引渡し様可致、挨拶も存し、右之通こゝ其御役所向御差支之儀も無之に哉、否御下ケ札こゝ御挨拶有之に様存し以上。

三月

大澤主馬

下ケ札

御書面侍體中間體のもの、是迄之通各様御支配向見分之上、拙者共月番之御役所に御引渡有之、此節道路ニ迷ひ或は行倒れもの、御書面之通御挨拶有之、拙者共差支之儀無之。

西三月

筒井伊賀守

大草能登守

西(天保八年)七月廿九日佐野和三兵衛を以御渡ニ付、窮民送り方出役へ、并臨時廻り鈴木定八に相送。

品川板橋千住内藤新宿邊に御救小屋被取建置し間、道路ニ迷ひ及飢れもの共、勝手次第罷越、小屋入之儀可相願をの也。月別紙之通町々木戸等に張札あるし置し様相觸し筈之處、今以張札不相見、早張出しし様、町年寄に今日被仰渡し、見廻し節右張札無之町方有之、申渡し様可被致し、此段相達し以上。

七月廿九日

中島嘉右衛門

谷村源左衛門

瀧田源次郎殿 大瀧平三郎殿

江戸町之もの小屋入斷之儀申上し書付

中村八太夫

山田茂左衛門

伊奈半左衛門

山本大膳

品川外三ヶ所飢人御救小屋に、江戸町之店借之もの共、身上を仕舞罷越、小屋入相願しをの共も有之、此趣粗相聞し處、右も最初之伺濟も譯柄違可申哉、左の、右様之儀無之様、兼町奉行衆へ御達御座し様仕度奉存し、依之申上し。已上。

卯八月

中村八太夫

山田茂左衛門

伊奈半左衛門

山本大膳

御挨拶下ケ札案

御書面町方店借等ニ及、飢餓し者、町會所に御救願出儀ニ多、品川外三ヶ所御救小屋入可相願とめ、身上を仕舞れもの、先々無之筈ニ得共、若し心得違のものも可有之哉、及因窮、身上仕舞、可便方無之、道路ニ迷ひ小屋入相願れものも可有之、右等の差別ハ其もの申立に寄、紛敷し間、町役人共に申渡置し様可致し。尤市中行倒等のもの、町役人召連し節、其者身元之儀、御代官手附手代并去秋已來町會所おひて直御救受れもの共も、是又元居町引渡、一同所役ニ手當爲致し様、當三月中御掛合有之、右之趣を以町々に申渡置し儀ニ付、其段町役人共相心得罷在し儀も奉存し。此段及挨拶し。

酉十月晦日齋藤爲右衛門を以御渡、尤吉野勝十郎請取來ル。

安房守殿

筒井伊賀守

品川宿外三ヶ所御救小屋入之もの之儀に付、御代官が申立、書面相添、御勘定奉行が掛合有之の間、町年寄に申付爲取調、別紙之通申上、右書面之通御廻し、先此段及御相談、西十月

品川外三ヶ所御救小屋入之儀、町役人共、被仰渡筋に付、御内意奉伺、書付
町年寄

町方店相仕舞、品川外三ヶ所御救小屋に罷越、者有之由、先達及御懸合、節、御救小屋入可相願、先、身上を相仕廻、先、無之筈、心得、若心得違之ものも可有之哉、及困窮身上仕廻、可便方無之、道路に迷ひ、小屋入相願、ものも可有之、右等之差別を、其者申立、寄、紛敷、間、町役人共、被仰渡、積、御挨拶之趣も有之、別紙之通掛り、御代官が申立、右之趣も、兼、町役人等、御申渡被置、儀、可、可有之、心得、共、婦子供等、勿論、其外、可便方無之、難、澁之者も、能、心附世話致し、可遣旨、被仰渡、度、段、御代官別紙相添、御勘定奉行衆、御掛合書、御下、被成、

此儀町に店借等之もの、品川外三ヶ所御救小屋入可相願、先、身上を仕

廻、右小屋に罷越、儀、難成事、間、道路に迷ひ、又、行倒、等、町役人共、見懸相尋、處、右體之、を、小屋場召連申問敷、尤困窮、先達、身上仕廻、可便方無之、道路に迷ひ、小屋入相願、ものも、是迄之通、相心得、小屋入相願、の、召連出、様、可致旨、先月中旬、北御役所、被仰渡、同月番、藤左衛門、小口年番名主、申渡仕、

右之通、先月中旬、被仰渡、小口年番名主、申渡有之、全御救小屋入可相願、に、店相仕廻、ものも、無之、譯、心得、共、今日暮兼、身上仕廻、者も、無、是非次第、奉存、御代官書面之内、に、婦、相成子供多之ものも、元居町に引渡、相成、を、氣之毒、相心得、四、五、日相立、得、無、據立去り、袖、致、様、相成、趣、相聞、ものも、有之、由、右等、其、の、共之氣配、酌立去り、程、町役人之無念、とも、難、申上、且、元居町に引渡、所役、手當、可仕旨、兼、被仰渡、御座、心得、共、此節、婦子供等、能、心附、世話、可仕趣、別段、廉を立、被仰渡、御座、の、追、町入用、相響、可申哉、當、十月迄、町内、置去り之、妻子、并、孤等、御仁惠を以、町會所、か入用、被下、其居町役人共、世話仕、得、共、最早、限月、相成、殊、是、寒氣、向、ひ、多、實、困窮、に、迫り、自然、飢人共、相増、可申哉、此上、共、万、一、御救小屋、可相

願ふめこ身上仕廻愁訴仕い者等有之い多も不埒こい得共實く其日を暮兼路頭こ迷ひいもの小屋入奉願儀も無據儀こ付右類輩不相紛様町役人共可取計趣も今一應被仰渡い多も可然哉こい得共其餘世話厚薄之儀こ付御察計御座いも如何可有御座い哉一ト先御掛合書別紙共返上仕此段御内意奉伺い以上

酉十月

館 市右衛門 喜多村彦右衛門 檜 藤左衛門

酉十月廿三日受取

筒井伊賀守殿
大草安房守殿

明樂飛驒守
矢部駿河守

江戸町方店相仕廻品川外三ヶ所御救小屋に此節罷越いものも有之由右も先達多及御懸合い節御救小屋入可相願い免こ身上を仕廻いもの先ッを無之筈にい得共若心得違之者も可有之哉及困窮身上仕廻可便方無之道路こ迷ひ小屋入相願いものも可有之右等之差別も其もの申立こ寄紛敷い間町役人共御申渡被置い積御挨拶之趣も有之い所別紙之通懸り御代官方申

立い右之趣も兼多町役人等に御申渡被置い儀こ可有之い得共孀子供等い勿論其外可便方無之難澁之もの共能く心附世話いし可遣旨御申渡有之い様いし度此段及御懸合い

酉十月

米價高直こ多御府内行倒もの品川宿外三ヶ所御救小屋に送り方出役一件書留

天保八酉年三月六日樽藤左衛門役所こ申渡

御救小屋場の町役人呼出之儀こ付小口年番名主共御申渡寫

今六日町觸差出い通市中行倒等之もの町役人見當次第最寄小屋場の召連い節其の身元之儀詰問之御代官手附手代とも方相糺有宿を勿論假令當時無宿こいとも元來御當地出生之ものを元居町役人とも呼出引渡并去秋以來町會所こおゐて一旦御救受いもの共も是又元居町の引渡一同所役こ手當爲致い積右こ付多も町役人共呼出し之儀其度く達有之い多も手延こ相成差支いこ付此度こ限り奉行所差紙を不相混様掛り御代官中村八太夫山田茂左衛門伊奈半左衛門山本大膳手附手代とも方書附を以其所支配之名主とも呼出之儀可申遣い

右之趣御勘定奉行衆が相達し有之の間兼心得居い様例之通組々早々可申繼い。

右之通被仰渡奉畏い爲御請御帳に印形仕置い以上

天保八酉年三月六日

南北小口
年番名主共

天保八酉年三月廿一日樽藤左衛門方より申渡。

申渡

當月六日相觸い御代官掛より四宿の御救小屋取建御手當有之積り付道路に迷ひ或は行倒い者等有之いより町役人共召連最寄小屋場の可罷出之處此節に至るも町方より右様之者召連い儀更に無之い然ル上も町役人共心得違より等閑に差置い向も可有之哉万一左様之儀いりも厚御趣意相振以外之事に道路に迷ひ行倒いをの宥有之いより早く最寄小屋場の召連可罷出い

右之趣組合中早く可申繼い

右之通被仰渡奉畏い爲御請御帳に印形仕置い以上

天保八酉年三月廿一日

南北小口年番一二番組品川町
名主 庄 右 衛 門 印

四番組 佐内町 衛門印
名主 八右衛門
拾壹番組 神田多町一丁目
名主 權左衛門印

天保八酉年七月廿八日町觸。

去申年以來米價高直に付御府内窮民爲御救品川外三ヶ所に御救小屋取建い間道路に迷ひ又は行倒い類も辻番頭取家來町役人等差控へ右小屋場に可差出旨當三月中相觸追々小屋入之者を厚御手當も有之い處今以御府内立廻い飢餓人共不少由に付向後武家屋敷近邊を御小人目付見廻御救小屋の送方之儀及差圖町方之儀を組同心共日に見廻道路に迷ひ又は行倒い者より後小屋入不相願分を相除實に小屋入相願いをの共最寄御救小屋の送方之儀及差圖い様申渡い條此段町役人共可相心得い且品川板橋千住内藤新宿邊の御救小屋取建置い間道路に迷ひ及飢餓候者共も勝手次第罷越可相願旨相認め町々木戸際等に張出置可申い○天保
右之通從町御奉行所被仰渡い條組々不洩様早く可申繼い 酉七月

天保八酉年九月十八日樽藤左衛門方より申渡。

申渡

町ノ店借等之もの品川外三ヶ所御救小屋入可相願る迄ニ、身上を仕廻、右小屋に罷越儀も、難成事ニハ間、道路ニ迷ヒ又モ行倒儀ももの等町役人共見懸相尋儀、右體之ものを小屋場に召連申間敷儀、尤困窮ニ多、先達る身上仕廻、可便方無之、道路ニ迷ヒ小屋入相願儀ものも、是迄之通相心得、小屋入相願儀ハ、召連出儀様可致儀。

右之趣御勘定御奉行衆カ御達有之ハ間、例之通組ノ早ノ可申繼儀、右之通被仰渡奉畏儀、爲御受御帳ニ印形仕置儀以上。

天保八酉年九月十八日

南北小口年番一二番組本兩替町
名主 彦 太 郎 印
四 番 組 佐 内 町
名主 八 右 衛 門 印
拾壹番組神田多町一丁目
名主 權 左 衛 門 印

天保八酉年十一月廿一日水野越前守殿御渡儀御書付。

町奉行衆

大目付

米價高直ニ付、下賤之もの共取續兼、道路迷ヒ又モ行倒儀類、品川外三ヶ所

御救小屋取建、御手當有之ハ間、右體之もの共モ其向ノ最寄小屋場ニ可差出旨、先達多相觸儀處、未ダ米價下直申モ無之ハ得共、去秋以來ニ見競儀多モ、格別ニ引下り、最早取續兼儀申時節ニモ無之ハニ付、自今小屋入差留儀間、其旨可相心得儀。

右之趣、江戸中武家方寺社之向ニモ、不洩様可被相觸儀。十一月

右之通可被相觸儀。○政保
間記同。 天保撰要類集

十、救濟堀浚 顛末天保撰要類集ニ詳也。左ニ其大要ヲ抄ス。

天保七申年十一月十五日大久保加賀守殿御直上之。

窮民御救助之儀ニ付申上儀書付

筒井伊賀守

當夏以來米相場追々高直ニ相成、當時ニ至儀多モ、米麥モ勿論、雜穀其外食用相成儀品モ、何品モ高直ニ相成、日増ニ世上難澁難凌様子ニ相成儀故、追々御救筋御世話も有之、先モ穩ニ有之ハ得共、實々輕者共窮迫之様子多、捨子缺落者行倒等日々多人數有之、且御救小屋入相願儀も日々相増、兩三日モ月番之番所ニ駈込來儀者、八九百人カ千ニモおよビハ得共、御救小屋も場狭ニ多、

中々大人數を入兼ひ故、追々建増、當時四棟に相成ひ得共、申出ひ儘小屋入申付ひるも、際限も無之、置所焚出之手當も行届兼ひ儀に付、町役人共呼出、當人之様子篤と相糺、其次第に寄理解申聞、町役人の引渡遣ひも多、實以及飢餓の程之者而已、小屋入申付ひ得共、昨日迄二千七百九拾四人に相成、猶此上も追々無據者共を聞届遣ひ事にも得も、人數日々相増可申、小屋入申付ひ程之者共、小兒杯召連來、實以眼も當られざる様子に有之、飢餓之體無相違相見、可憐事に御座ひ。乍去格別之御仁惠を以、右様御救小屋も被仰付、艱苦相凌、殊元手錢迄も被下ひ得も、小屋内を商ひ日雇等、銘々夫々之稼も出來仕間、不一方御救筋にも難有儀に有之、其上再度之御救米も、兩三日中を渡方相成ひ間、此上人氣も落付可申と奉存ひ。乍併今年之儀も、連年不作之上之儀にも得も、米穀拂底之段に無相違、何分江戸表有米高不足に有之、心配仕ひ故、此間伺濟之趣を以、町方御用達共にも申付、米買付方爲取計、又米問屋其外身元相應之もの共も、厚き御趣意之段申諭、爲買入ひ手筈にも得共、當時近在遠國共米穀拂底之折柄ゆゑ、商賣取組之故障も多、先達る御觸も有之に得共、諸國領主地頭津留等も有之、又其所にも津出不爲致も有之様子にも得も、急速買付

方行届、不遠入津米可有之との見届も未相付不申儀にも得も、此上相場引下り、窮民共歸住家業營ひ程之場合に至りひるも、暫し月數も相掛可申哉、其内かのふ商賣體に寄てり、差て不及困窮も有之に得共、諸職人并按摩取藝人之類、或も小切賣古道具屋らうの付け替杯之類、緊要なふさる商賣體之者も、悉く障る取續難澁之趣に相聞、猶此上も米價諸色永々高直に有之にひ、此節方御救米も被下ひ得共、纔十日之食料も渡し日數も相懸ひ得も、未々迫ひ者とも、二ヶ月餘も相後れひ事にも間、夫迄にも凌兼、道路にさまよひひ様可相成哉、御救小屋迎も、無際限建増も難行届、此上別に御救筋之儀差當存付も無之に得共、享保之頃にも、飢饉之節右様之者御救之るは、御堀浚被仰付ひ儀有之由及承ひ、突留有無之儀、早速難相分ひ得共、いゝ様右様之儀も可然哉、其子細を此節柄いつ方にも難捨置場所之外も、普請作事等にもしひ者も無之、且銘々無益之失費無之様心掛ひ段も、無據品之外を買ひ者も少く、按摩取其外藝人杯之類等頼ひ儀無之に得も、自ら右様之類取續難澁相成ひ道理に有之、其内職人杯も、何れも健強成者にも得も、万一困苦に堪兼、何様之不了簡可致も難計、御堀浚等被仰付ひ得も、右等之類又も御救小屋に罷在ひ者

共、土持堀方等に出し得て、上手下手之無差別、步行擔物相成ひ程之身分に
得て、銘々之働丈を元手錢無之共、賃錢受取ひ事故、差當居なから困苦に迫
儀を有之間鋪哉に付、猶此上世上之模様を寄、右様之儀被仰付ひ、又一時
之御救も相成可申哉、必可然との見居も無之に得共、右を格別之御入用も
不相掛、御失墜相成ひ筋も無之の間、此節柄存付ひ儀に付、御取捨之程も免
も角も、先此段申上ひ以上。

申十一月

筒井伊賀守○政

申十二月八日大久保加賀守殿に御直上、同月廿七日御書取添、大澤彌三郎ヲ以御下
ク、承ヒレ付致、翌廿八日返上。

ヒレ付末に記。

御堀浚御入用御出方之儀勘辨仕し趣申上ひ書付

筒井伊賀守

米價高直なる、市中輕者共之内、其職業を寄ひるも、猶更極難澁之者共有之、右
等之御救旁、御堀浚之儀存付し趣申上ひ處、右を可然思召ひ得共、多分之御入
用も相掛可申、右御出方之儀存付も有之に、可申上旨被仰渡し。

此儀兼る可然存付も無御座し得共、差當勘辨仕し處、此度市中輕者共取續

方補之、多、金千兩分錢御買上相成ひ間、右を御出方に相成ひ、御費も
も不相成可然哉に、得共、折角御買上之錢猶又市中に御渡方相成ひるも、
忽錢相場相崩御買上相成ひ詮も無之儀に付、右も難申上、依るも錢相場引
上し得て、相場違なる兩替屋共利益之内取上ひ入歩も、是又錢なる爲相納、
此錢を在浦方魚仕入金、又此節之魚油仕切金等爲致し歟、船なる運送相
成ひ在方に振向、金に引替ひ上、町方御用達共は申付ひ米買入方、諸失脚之
補にも可仕哉と心組罷在ひ間、御堀浚御入用御藏御出方之處、御差支も有
之に、右を繰替御用辨相成ひるも宜、左に、米買方失脚補之方も、又
々何と歟取計方も可有之間、右を以御用辨にも可相成哉、或も千兩橋掛替
永續御手當金も、只今も餘程之溜金に可有之間、千兩計を右之内御遣ひ方
に相成ひるも、御差支も有之間敷し、然處錢之儀も先千兩御買上に仕當、模
様を寄千兩歟、千兩御買上之積相心得可申旨被仰渡し、間若哉都合三千
兩錢御買上之方、被御除置ひ儀も御座し、最初御買上之千兩を、御
下金有之、跡貳千兩之儀を、外に勘辨仕、取計方猶相伺ひ様仕、御下ケ金之儀
不申上相濟し、取計申し、右貳千兩を御浮金に相成可申姿故、右貳

千兩之内を以、御堀浚之御入用御用辨ニ相成ハ、前段御金藏御出方ニ相響ハ儀も有之間敷間、右三ヶ條之内を以被仰付ハ、可然哉ニ奉存ハ。右勘辨仕ハ趣、書面之通御座ハ。依之被成御下ハ書付壹通返上、此段申上ハ。以上。

申十二月

筒井伊賀守

下札

書面米價高直ニ多、市中輕者とも之内、職業ニ寄、猶又極難澁之者共御救旁、御堀浚御入用出方之儀、筒井伊賀守ハ被仰渡ハ趣ヲ以勘辨仕、申上ハ趣一覽仕、取調ハ處、此度錢相場爲引上、相場違ニ多兩替屋共利益之内取立ハ分、御堀浚御入用ニ遣拂ハ歟、又ニ千兩橋掛替永續御手當金溜之内、千兩も御遣方ニ相成ハ歟、其餘此度千兩御買上仕、猶模樣ニ寄千兩歟、貳千兩錢御買上之積ニ相心得可申旨被仰渡ハ、間、三千兩錢御買上之方ニ被御除置ハ儀ニもハ、錢御買上ニ金千兩御下ケ有之候ハ、貳千兩之外ニ勘辨取計方、猶相伺ハ様御下ケ金不申上、右貳千兩御浮金ニ相成ハ姿ニ付、御堀浚之御入用ニ相成ハ、前段御金藏御出方相響ハ儀も有之間敷哉之旨ニ御座ハ間、猶勘辨仕ハ處、此度虎御門外御堀埋ハ處、浚方之儀御普請奉行相伺ハ書面、私共評議仕申上ハ趣ハ以、浚方被仰渡ハ、伊賀守申上ハ市中輕者共雇入、相應之働爲致、貸錢差遣ハ積ニ有之、且前文伊賀守勘辨仕申上ハ三廉之内、錢相場引上ケ候付ル、兩替屋共利益之内八步取立ハ分は、全同人差略ニ出

來ハ浮金ニ御座ハ間、右之分御堀浚之御入用高ニ調達ハ多しハ、其金高を以輕者御救筋御堀浚有之ハ儀ニ可宜哉ニ御座ハ得共、其餘之貳ヶ條ニ御堀浚ニ付別段の御出方ニ相成、可然ニも難申上ハ間、書面申上ケハ三ヶ條之内、錢相場引上ハ付兩替屋共利益之内、八步取立ハ分御堀浚之御入用高ニ調達ハ多しハ、其金高を以、市中輕ニの共御救助筋相應之働爲致、貸錢差遣ハ積御堀浚ハ多しハ、心得を以、御堀ケ所御入用等取調相伺候積、御普請奉行ハ得も打合候様可仕旨、伊賀守ハ被仰渡有之趣、御普請奉行ハ被仰渡、可然哉ニ奉存ハ。

申十二月

明樂飛驒守。矢部駿河守。田口五郎左衛門。鳥居八右衛門。川路仁左衛門。村田幾三郎。御勘定方。

ヒレ付

書面御堀浚御入用御金出方三廉之内、錢相場引上ハ付、兩替屋とも利益之内、八步取立ハ分御堀浚之御入用高ニ調達ハ多しハ、其金高を以市中輕者共御救助筋相應之働爲致、貸錢差遣ハ積之心得を以、御堀ケ所御入用等取調可相伺、尤此外御金出方二廉之分ハ、無用可仕旨被仰渡、奉承知ハ。

申十二月廿六日

筒井伊賀守

覺

書面御堀浚御入用御金出方三廉之内、錢相場引上い付、兩替屋共利益之内、八歩取立い分御堀浚之御入用高こ調達致しい、其金高を以市中輕をの共御救助筋相應之働爲致、賃錢差遣い積之心得を以、御堀ヶ所御入用等取調可被相伺い。尤此外御金出方二廉之分も、無用こ可被致事。

酉二月十二日於御殿受取。

筒井伊賀守殿

土岐大隅守

虎御門外御堀浚土持運爲致い間、働方望之人足もつお天秤棒持參、明十三日か五拾人程ッ、右場所に可罷出旨、御申渡有之い様存い。此段御達申い。

二月十二日

酉三月御直上之。

越前守殿

御堀浚之儀こ付申上い書付

筒井伊賀守

去年以來米價高直こ多、市中一統及困窮、其内こも小前之者共別る難澁仕い

付、右等之者共御救之爲め、御堀浚等被仰付い多も如何可有之哉之段、存付之趣を舊冬加賀守殿に申上い得も、其後御入用御出方之儀御尋有之、勘辨仕い趣申上い處、錢相場引上い付、兩替屋共利益之内、八歩取立い分御堀浚之御入用高こ調達い多しい、其金高を以市中輕をの共御救筋相應之働爲致、賃錢差遣い積之心得を以、御堀ヶ所御入用等取調可相伺旨、舊臘御同人被仰渡、當春右取立い内、金千兩御堀浚之方に御出方こ相成、差支有無御普請奉行に掛合有之、差支無之段及挨拶置い處、日比谷御堀井赤坂溜池常浚組合入用遣錢、御金藏に假納い多し置い金子并右私方に可差出、金千兩を以、一橋御門に數寄屋橋御門迄之間、清水御門に竹橋御門迄之間、御堀掃除浚之儀取調、御普請奉行に相伺い處、假納金之内御遣方を先差延之積、右取立、金千兩を以、掃除浚窮民御救方行届い様、今一應取調直し可相伺旨被仰渡い得共、千兩而已こ多場廣之御堀掃除浚こ多も中々出來兼、殊御救筋行届い様こ多逆も無覺束由こ多、右千兩之外こ私方おゐて御出方こ可相成、金子無之哉之旨、猶又懸合有之い間、素か右千兩之外私共方に可差出、金子無之并右千兩而已を以、御堀浚等被仰付い多も、場廣之御府内御救之御趣意行渡申間敷い間、今一應勘

辨ひるし可申上旨其外委細及挨拶しに付猶又相伺ひ哉承知仕得共未御差圖無之哉沙汰無之然る處追々市中差詰り實々極難之様子相聞此程心痛仕罷在折々此度大坂表之騷動を市中之もの共内々取沙汰仕由に得て右之通大坂表之變事をも彌以入津米有之間敷杯存迷ひ不了簡不仕様夫々手段仕居し時節に相臨ひ故猶又急速御堀浚等にも有之右之方に極難之もの共多人數罷出様相成ひ窮迫之者共氣配を相鎮めし一助にも罷成可申哉に付前書之御堀掃除浚又先達る御普請奉行方伺置由之濱御堀浚等にも急速御差圖御座様仕度奉存依之申上以上

西三月

筒井伊賀守

西三月十二日於御殿受取挨拶下ケ札付翌十三日返却再下ケ札付同十六日來尙挨拶下ケ札附翌十七日返却

筒井伊賀守殿

御普請奉行

濱御殿地構御堀浚方之儀御内慮相伺置處兩替屋共利益之内八步通御取上に相成し分金千兩を以御入用差加ひ様取調し處若御差圖も相濟し

ハ、早々相伺取掛り可申心得有之處御救筋も土持運等之人足も日々壹荷毎に見届賃錢相拂儀に付御組之者立合附切支配向方万事打合爲取計し積可申上も存御存寄も無之ハ、拙者共相伺様可致し且右御金千兩も其御方直に浚御場所御差出可被成哉又當時御取替御金藏方受取拂置追其御方御金藏御返納可被成哉御合之處承知し度此段御掛合およひハ否早々御挨拶有之様も度存以上 西三月

下ケ札

御書面之趣致承知右場所浚御伺之通相濟ハ、素浚方等も各様御受持に付得共御救筋に付得ハ土持等といつま多人數罷出可及混雜就る組之もの共差出制方都人足共指揮爲致并賃錢等御渡之節爲立合ハ、可然も兼る存合罷在尤見廻り等も逆を不行届儀に付拙者共兩組方與力壹人ツ、貳人、同心三人ツ、六人立合附切之積各様御伺有之候様も度存且差加金千兩之儀も拙者御役所に有之の間錢も御差支無之ハ、御案内次第浚場所差出御差支無之ハ依之及御挨拶

西三月

筒井伊賀守

再下ケ札

御下ケ札之趣致承知ハ、本文濱御殿地構御堀浚伺相濟兩替屋共利益之内八分通御取上に相成し金千兩浚御入用差加御救之爲メ浚被仰付の間夫々窮民働

應シ、相應之貨錢差遣、御救筋厚勘辨以多し可取計旨、越前守殿被仰渡、依之右邊中
兩御組與力同心共、都合八人立合附切之儀、明十七日越前守殿に伺書進達以多し
以積御座以。御差加金御差出方之儀、取掛之上、御組之ものを支配向方打合爲取
計可申以。且又取掛り之儀、御下知以前申上取掛り心得有之以。猶日限之儀、
從是御達可申以。此段猶御相談旁及御掛合以。西三月

再々下ケ札

御下ケ札を以御相談旁御掛合之趣、致承知、拙者何之存寄無之以。尤差加金差出方
之儀、一度ニ千兩分及御引渡御差支も有之以ハ、御入用丈之員數等前々日御
達有之以様以多し度、且其度々受取、御支配向より小手形差出、追多不殘御引渡濟
之節、本手形御差越し有之以様存以。此段尙及御挨拶以。

西三月

筒井伊賀守

西三月十六日於御殿受取、挨拶下ケ札付、翌十八日井上備前守へ返却。

筒井伊賀守殿

御普請奉行

濱御殿地御構堀浚之儀、窮民御救筋之譯柄を以、凡御入用金貳千七百兩程可
相掛趣、去十二月中再應御内慮相伺置以處、伺之通被仰渡以ニ付、御内慮伺取
調以砌も錢相場も相違有之、金三百七拾六兩餘相増以間、右之分口ニ割

増以多し相伺可申与存以。左以得も、兩替屋共利益金御取立之分千兩之外、
金百三拾九兩壹分割増ニ相成以間、右千兩之外割増之分、其御方より御出方
相増申以、右之通御差出有之以御差支も無之以ハ、越前守殿に相伺可申
与存以。依之御掛合およひ以、差急相伺、御下知以前も取掛申度以間、否早々
御挨拶有之以様以多し度、此段及御掛合以、則伺書下案御心得迄ニ御廻し申
以、御一覽之上御返却有之以様存以。以上。西三月

下ケ札

御書面御掛合之通、兩替屋共方取立以八步之内、兼多御掛合濟之金千兩之外ニ割
増之分、金百三拾九兩壹分、拙者方方差出以儀、差支無御座以、依之被遣以御伺書案
一覽之上、致返却、此段御「挨拶およひ以。

西三月

筒井伊賀守

西三月

越前守殿

濱御殿地御構堀埋出洲浚御入用之儀相伺以書付

井上備前守 土岐大隅守

濱御殿地御構堀埋出洲浚御入用之儀左ニ申上以。

霸都時代ノ救濟

一、金千五百三拾五兩 地割棟梁元積

是を御堀内へ切水替棧橋棚足場水絞場并柵仕付道造人足世話役浚土入
鍬足場廻し小屋場并矢來諸式諸道具損料職人人足等都多御救人足賃錢
之外。

一、^米金千九百八拾五兩銀六匁四分九厘四毛 二番札

^{差引}金四百五拾兩銀三匁四分九厘四毛元積之方安シ。

外、凡金千五百四拾壹兩

是を浚土持運ひし救人足賃錢遣拂可申分。

^{貳口}合金三千七拾六兩

内、金七百九拾七兩貳分 臨時御入用

金千百三拾九兩壹分 御組合御入用

金千百三拾九兩壹分 錢相場引上ひに付兩替屋共
利益之内町奉行に取立ひ分

右者濱御殿地御構堀浚之儀、凡御入用金貳千七百兩程に多、御出口口々仕分
ケ、再應御内慮相伺ひ處、凡御入用金貳千七百兩之内、金七百兩を臨時御入用
金、千兩を御組合入用金、千兩を錢相場引上ケひに付兩替屋共利益之内、八歩

通町奉行に取立ひ金千兩ヲ以、御救之る先被仰付ひ間、夫々窮民働に應し、賃
錢差遣御救筋厚勘辨ひ多し、取計可申旨被仰渡ひに付、猶又場所之様子支配
向召連、得と見分仕、浚土取片付方等厚勘辨仕、仕様注文取極、地割棟梁に御入
用之積申付、猶又入札取之ひ之處、前書通高金千五百三拾五兩に有之、再應吟
味仕ひ處、不相當之儀も無御座ひ間、右御入用を以御堀浚可申付ひ哉、尤前書
高金之外、千五百四拾壹兩を、老人幼弱に多不馴之人足共も、爲御救浚土爲取
片附、壹荷毎に賃錢取せひ之儀も有之ひ處、最初凡御目當積取調申上ひ金高
か、此度之合金相増ひ得共、御目當積り取調ひ砌、錢相場壹兩に付六貫六
百六拾四文に有之ひ處、當時相場五貫八百四拾八文に有之、壹兩に付八百十
六文ッ、相違仕、貳千七百兩之内に多凡金三百七拾六兩餘之相場違有之ひ
間、前書高金當時直段に見合ひ得も、不相當之儀も無御座ひ間、此度入札取調、
御入用相増ひ分も、御入用口々を差加御出方之積、錢相場引上ひに付取立ひ
利益金千兩にも、右錢相場差合割増に取調ひ積、筒井伊賀守に申談ひ處、差支
無之旨申聞ひ間、前書之金百三拾九兩壹分差加、都合千百三拾九兩壹分伊賀
守方出金之積、且御組合入用之儀も、當時御金藏が受取拂置、追多御組合普請

金取集返納可仕。御場所抄取之る先、臨時御入用御組合入用共、諸色人足入高井出來形步通に應、御内借金受取相渡申度奉存。且又御救人足賃錢拂之儀も、別多増減等も可有御座、御間追多取調可申上。則仕様注文御入用内譯帳場所繪圖附切人數伺書共相添、此段相伺申。差向御救筋之儀に付、早々御下知御座、様仕度奉存。以上。

酉三月

井上備前守 土岐大隅守

御堀浚凡日積

濱御殿地御構堀浚

凡日數 雨天其外休日相除 百六拾日程

内

御救人足多浚揚土

凡日數 雨天其外休日相除 百十日程

平均一日人足
百貳拾人之積。

右之通有之。 酉三月

酉三月廿二日

此度濱御殿惣御堀浚被仰付、就夫去秋中追米價并諸色高直に付、其日稼之もの共家業手薄なる稼方心當無之者も、右御場所罷出、土持運、相當之御賃錢於御場所被下、御間町々其日稼之もの共之内、日數凡百十日程之間、日々人足四百貳拾人宛差出方之儀可申上旨、被仰渡奉畏。此段前書被仰渡、人足高、日々出方之儀、御鑑札五百枚私共、御渡被成下、惣町名主共一ト支配、其日稼之者二人宛、月行事持場所同壹人宛、差出様仕、凡五百人計に相當、可申、其内差掛病氣差合等も可有御座、御間、人數不足も可仕哉、得共、凡四百廿人位宛、日々無滯罷出可申儀に奉存。尤右之趣組々世話掛年番名主共、申談、惣町々取調望之、御鑑札相渡置、御趣意行届可申哉、奉存。此段申上。以上。

酉三月廿二日

鈴木町肝煎名主

源

七

柴井町同

八郎右衛門

筒井伊賀守殿

御普講奉行

濱御殿地御構堀浚之儀、未御差圖も無之儀得共、御救筋之儀に付、差急去廿二日、取掛支配向之儀も、附切同様先取扱申渡、小屋場竹矢來并御堀内へ切等爲取懸、追々出來寄儀に付、來ル廿九日、小屋場入爲致儀積に付、御救人足出方土持運手繰其外之儀、支配向に申含置儀間、明後廿八日御組之者、右小屋場御差出、万端爲打合儀、御申渡有之儀存儀、則支配向附切同様取扱名前書略。差進申儀、御組之者出役名前御申聞有之儀存儀以上、三月廿六日

濱御殿地御構堀浚中附切同様取扱名前書

御普請方下奉行 同改役代り御普請方
近藤義八郎 竹内市十郎
同假役 濱中儀兵衛 星野又四郎
同同心肝煮役 荒川 三七

右之通有之儀。 西三月

西三月廿七日於例席申渡。

申渡

山崎助左衛門

此度町々窮民共御救之爲メ、御普請奉行一手持に多、濱御殿地御構堀浚有之窮民共、多人數罷出、可及混雜儀に付、人足製方懸申付儀。 西三月

西三月廿九日

濱御構堀浚之儀に付申上儀書付

山崎助左衛門

此度爲御救濱御殿御構堀浚に付、町々罷出儀窮民共、御渡相成儀鑑札之儀、今日名主共、御渡に付、明晦日方一同罷出可申旨、昨廿八日芝新錢座御普請方小屋場に多、同下奉行近藤義八郎に申談儀處、差支無之趣、且浚方

幕府時代ノ救濟

五五一

之儀も今日より相始ひ間私共にも出役有之の様致度段申聞ひ付右場所に罷出申ひ依之申上以上

三月廿九日

山崎助左衛門

中野彌五兵衛

土橋重藏

土持人足賃錢受取高之儀付奉伺書付

山崎助左衛門

濱御堀浚付町々方罷出窮民共にも可相渡賃錢兩替屋共方御取上相成利益金渡方左之通

一土持人足四百貳拾人之積

一日壹人付凡見積賃錢貳百文宛。

右之通罷出趣御座得共御役所方御渡相成鑑札も五百枚付日々出方増減も可有之得共鑑札人數丈ケ之賃錢持參も可然奉存處右之外も何人罷出可申難計付臨時用意之爲メ百貫文之外貳拾貫文受取申度奉存御救筋之儀付鑑札人足之外無札も罷出土持仕も有之趣付右無札之者迄賃錢差遣儀付万一引足不申も難計付右臨時之分受取様可仕哉左得も人數相増も右之内こそ

半途も差止も可有之又も當人稼方寄渡方増減も御座間彼是流用も多し得も多分右も差支も有御座間敷奉存尤人足賃錢渡殘有之分も小屋場泊番等無之由付難差置間右最寄兩替屋共にも相預翌日之方に相廻様仕得も便利も宜可有御座付右之趣柴井町名主八郎右衛門に申談處差支無之段申之間右之通取計様可仕哉奉伺且無札之もの迄一同罷出間多人數格別混雜も有し事故無差別一同打交賃錢渡遣し様も有し度左い都合も宜敷旨下奉行近藤義八郎申聞ひ依之申上以上

西三月

山崎助左衛門

御堀浚付名主共出役之儀奉伺書付

書面伺之通可申渡旨被仰渡奉承知

西四月六日

山崎助左衛門

鈴木町名主

源七

柴井町同

八郎右衛門

宇田川町

彌兵衛

右者濱御堀浚中私共手付心付方相勤様仕度源七八郎右衛門儀も鑑札

御渡之節、町々割付方等取扱ひものこゝ、彌兵衛義を近邊最寄に御座し間、右三人之者共申合、日々壹人宛罷出し、差掛急速之御用向御座し節を、申付し様仕度、且も多人數之儀混雜も仕し間、人足共取締方にも罷成可申哉、存〇伺以上。

西三月

山崎助左衛門

西三月廿九日水野越前守殿に田中休藏ヲ以上ル、翌晦日思召無之、尤承付に御下ケ無之旨、同人申聞ル。

越前守殿

濱御殿地御構堀浚に付兩組與力同心立合附切之儀申上し書付

筒井伊賀守 大草安房守

今般町々窮民共御救筋之譯柄ヲ以、先達る伊賀守方に取立し兩替屋共利益金八歩之内、千百三拾九兩餘御差加、御普請奉行掛に濱御殿地御構堀浚被仰付し付に、人足共多人數罷出、可及混雜し間、人足とも日々差出方制方等之爲、與力貳人同心六人立合附切之儀、御普請奉行に相伺し由に付、右御差圖濟之趣達有之次第、可申渡心得に御座し處、今廿九日御普請取掛、人足共

出方も有之、組之者出役之儀申聞、逆も見廻等にも、行届不申し間、前書之通り兩組と與力貳人同心六人立合附切申渡し様可仕存し、依之申上し。以上。

三月廿九日

筒井伊賀守〇政 大草安房守〇高

西四月朔日於丙座申渡之。

申渡

山崎助左衛門 加藤九平

此度町々窮民共御救筋之譯柄を以、御普請奉行一手掛に、濱御殿地御構堀浚被仰付しに付、浚土運方として、窮民共多人數罷出、可及混雜しに付、爲制方右浚中立合附切申付し。且此方々差出し兩替屋共取立し八歩之内、金千百三拾九兩壹分之分も、日々渡高丈け錢に町年寄共を受取、小屋場に持參得と相改、賃錢渡遣し、勤方之儀を御普請奉行差圖も可有之間、得其意支配向にも打合、入念可被相勤し。西四月

濱御殿地御構堀浚中附切名前書

御普請方下奉行

同改役代り御普請方

御普請方改役

近藤義八郎 竹内市十郎

同同心

濱中儀兵衛 星野又四郎

同同心

山縣善十郎 關口三次郎

同改方同心

池田衆平 長谷川善三郎

地割棟梁

河合玄作 中村爲三郎

吾孫子丈助

山本金四郎

右之通有之。 西四月

西八月

兩替屋利益金遣拂勘定書之儀申上し書付

御堀浚掛

先達多申上置し濱御堀浚二付、兩替屋共より差出し利益金千百三拾九兩壹分、當三月晦日分同六月十二日迄御普請方支配向立合、賃錢別冊之通遣拂申し。然處右賃錢之儀、一日壹人ニ付何程と申儀こそ無之、其時之擔し間敷ニ寄壹荷ニ付何程と取極差遣、其内にも輕荷を擔し者にも、半減之賃錢差遣し故、品々甲乙有之、右等之處仕分等仕しるも、勘定彼是混雜仕しニ付、平均ニ割遣拂入御覽申し。此段以別紙申上し以上。

西八月

山崎助左衛門 谷 榮五郎

西八月

濱御殿地御構堀浚土爲運し御救人足高井賃錢遣拂書之帳

三月晦日 一、錢百貫文

兼房町兩替屋平八方方請取

内、遣拂

六拾八貫三百五拾四文

御救人足 貳百八拾一人

殘錢

三拾壹貫六百四拾貳文

四月朔日 一、百貫文

平八方方請取

一、三拾壹貫六百四拾貳文

晦日殘錢

合百三拾壹貫六百四拾貳文

内、遣拂

百拾貫五百三拾五文

同人足 五百拾壹人

殘錢

貳拾壹貫百七文

同日 一、百貫文

平八方方請取

一、貳拾壹貫百七文

朔日殘錢

合百貳拾壹貫百七文

内、遣拂

百貫七百七拾壹文

同人足 五百貳拾三人

霸都時代ノ救濟

殘錢 貳拾貫三百三拾貳文

同三日 一、百貫文 平八方方請取

一、貳拾貫三百三拾貳文 二日殘錢

合百貳拾貫三百三拾貳文

內、遣拂 七拾八貫拾九文 同人足 五百貳拾貳人

殘錢 四拾貳貫三百拾三文

同五日 一、百貫文

一、四拾貳貫三百拾三文 三日殘錢

合百四拾貳貫三百拾三文

內、遣拂 百拾貳貫六百八拾九文 同人足 七百三拾七人

殘錢 貳拾九貫六百貳拾文

同六日 一、百貫文 平八方方請取

一、貳拾九貫六百貳拾文 五日殘錢

合百貳拾九貫六百貳拾文

內、遣拂 八拾九貫八拾壹文 同人足 四百三拾壹人

殘錢 四拾貫五百三拾五文

同七日 一、百貫文 平八方方請取

一、四拾貫五百三拾五文 三日殘錢

一、五貫文

是差掛錢不足ニ付、柴井町兩替屋 小三郎に申付立替ひ分。

合百四拾五貫五百三拾五文

內、遣拂 百四拾三貫六百貳拾七文 同人足 七百壹人

殘錢 壹貫九百八文

同八日 一、貳百貫文 平八方方請取

一、壹貫九百八文 七日殘錢

合貳百壹貫九百八文

內、遣拂 拾八貫五百六拾七文 同人足 三百八拾九人

殘錢 五貫文 七日立替ひ錢小三郎に渡。

同九日 百七拾八貫三百三拾七文

同九日 一、百貫文 平八方方請取

新都時代ノ救濟

一、百七拾八貫三百三拾七文 八日殘錢

合貳百七拾八貫三百三拾七文

內、遣拂 百五拾貫拾五文 同人足 七百八拾七人

殘錢 百貳拾八貫三百貳拾貳文

同十日 一百貫文

一、百貳拾八貫三百貳拾貳文

合貳百貳拾八貫三百貳拾貳文

內、遣拂 百五拾六貫八百九拾五文 同人足 千八拾人

殘錢 七拾壹貫四百貳拾三文

同十一日 一百貫文 平八方方受取

一、七拾壹貫四百貳拾三文 十日殘錢

合百七拾壹貫四百貳拾三文

內、遣拂 百五拾六貫七百貳拾七文 同人足 九百三十七人

殘錢 拾四貫六百九拾貳文

同十二日 一百貫文 平八方方請取

一、拾四貫六百九拾貳文 十一日殘錢

合貳百拾四貫六百九拾貳文

內、遣拂 百四拾六貫七拾九文 同人足 九百拾貳人

殘錢 六拾八貫六百拾三文

同十三日 一百貫文 平八方方請取

一、六拾八貫六百拾三文 十二日殘錢

合百六拾八貫六百拾三文

內、遣拂 百貳拾六貫百五拾五文 同人足 八百壹人

殘錢 四拾貳貫四百五拾四文

同十四日 一百貫文 平八方方請取

一、四拾貳貫四百五拾四文 十三日殘錢

一、貳拾貫文 前書同様ニ付、小三郎ニ申付立替分。

合百六拾貳貫四百五拾四文

內、遣拂 百五拾貳貫六百八文 同人足 八百五拾三人

殘錢 九貫八百四拾六文

東京市史稿

同十五日 一、貳百貫文 平八方方請取

一、九貫八百四拾六文 十四日殘錢

合貳百九貫八百四拾六文

內遣拂

三拾九貫貳百拾九文 同八人足 貳百四拾三人

殘錢 貳拾貫文 十四日立替外錢小三郎以渡。

同十六日 百五拾貫六百貳拾七文

同十六日 一、百貫文 平八方方請取

一、百五拾貫六百貳拾七文 十五日殘錢

合貳百五拾貫六百貳拾七文

內遣拂

同八人足 百貳拾六貫六百拾八文 八百拾七人

殘錢 百貳拾四貫九文

同十八日 一、百貫文 平八方方請取

一、百貳拾四貫九文 十六日殘錢

合貳百貳拾四貫九文

內遣拂

同八人足 百五拾三貫五百四拾八文 九百拾六人

六百五拾六人

殘錢 七拾貫四百五拾七文

同十九日 一、百貫文 平八方方請取

一、七拾貫四百五拾七文

合百七拾貫四百五拾七文

內遣拂

同八人足 百五拾壹貫貳百八拾四文 八百五拾人

殘錢 拾九貫百六拾九文

同廿日 一、貳百貫文 平八方方請取

一、拾九貫百六拾九文 十九日殘錢

內遣拂

合貳百拾九貫百六拾九文

內遣拂

同八人足 百貳拾六貫四百貳拾六文 七百四拾九人

殘錢 九拾貳貫七百四拾三文

同廿一日 一、百貫文 平八方方請取

一、九拾貳貫七百四拾三文 廿日殘錢

合百九拾貳貫七百四拾三文

內遣拂

同八人足 百六拾貳貫貳拾壹文 八百拾六人

新都時代ノ救濟

殘錢

三拾貫七百貳拾貳文

同廿二日 平八方方請取

一、三拾貫七百貳拾貳文 廿一日殘

合貳百三拾貫七百貳拾貳文

內遣拂

百貳拾壹貫九百五拾九文

同人足

八百五拾壹人

殘錢

百八貫七百五拾九文

同廿三日

一百貫文

一、百八貫七百五拾九文 廿二日殘錢

合貳百八貫七百五拾九文

內遣拂

百五拾六貫貳百三拾七文

同人足

八百五十八人

殘錢

五拾貳貫五百貳拾貳文

同廿四日

一百貫文

平八方方請取

一、五拾貳貫五百貳拾貳文 廿三日殘錢

合百五拾貳貫五百貳拾貳文

內遣拂

六拾貫貳百八拾六文

同人足

六百貳拾貳人

殘錢

九拾貳貫貳百三拾貳文

同廿五日

一百貫文

平八方方請取

一、九拾貳貫貳百三拾貳文 廿四日殘錢

合百九拾貳貫貳百三拾貳文

內遣拂

百貳拾貳貫七百四拾九文

同人足

七百貳拾六人

殘錢

六拾九貫四百七拾九文

同廿六日

一百貫文 平八方方請取

一、六拾九貫四百七拾九文 廿五日殘錢

合百六拾九貫四百七拾九文

內遣拂

百四拾九貫三文

殘錢

貳拾貫四百七拾六文

同廿八日

一百貫文 平八方方請取

一、貳拾貫四百七拾六文 廿六日殘錢

合貳百貳拾貫四百七拾六文

內遣拂

百拾八貫九百四拾貳文

同人足

六百人

霸都時代ノ救濟